BROADCAST CREATORS ASSOCIATION OF JAPAN

放送人の会

No.103 **別紙**
2025.02.19
特集・選挙
理事と会長

〒102-0094 千代田区紀尾井町１－１ 千代田放送会館３階 Tel&fax:03-3221-0019 Mail:info@hosojin.jp
発行 一般社団法人・放送人の会 会長 今野 勉 編集 菅野高至、青木裕子、鈴木典之、逸見京子、田中典子、
事務局 深尾隆一 須斎恵美子 http://www.hosojin.jp

特集 理事選挙と新会長の選定について

総務委員会からの報告とお願い

総務委員長 小川 和之

言い古された言葉ですが、月日の経つのは早いもので二〇二四年度もあと1か月余りで終わります。年度末の3月には**2年ごと行われる理事改選**を控え何かと忙しい毎日が続いています。

そんな中で、長らく放送人の会を束ねてこられた今野会長（代表理事）が今期限りで勇退の意思を表明されており、いつもでない期末を迎えることになりました。

＊ ＊ ＊

ご承知の通り、今野会長は、それまでの大山勝美会長（代表幹事）から引き継ぐ形で二〇〇六年の総会で承認されて以来、19年間にわたり代表幹事を務めてこられました。思えば初代・川口幹夫（代表幹事）が3年間、続く大山勝美会長（代表幹事）が6年間でしたので、最も長きにわたりご尽力いただいています。現在いろいろな課題を抱える放送人の会としては、引き続きご指導を得るべく留意の御願いを申し上げて参りましたが、ご高齢を理由に後身に委ねたいとのご意思を尊重し、来る総会で新しい会長（代表理事）をお迎えすべく、準備を進めています。

＊ ＊ ＊

放送人の会の定款によれば――

『会長及び副会長は、理事会の決議によって理事の中から選定する。（第5章20条の2）』と規定されています。また、現理事は全員今期末をもって任期満了となり、新たに総会で承認された次期理事の下で新しい体制が組まれ、各委員長及びプロジェクトチーフは次期会長によって選任されることになります。会長の交代で組織も新しく生まれ変わることになります。

そうした状況に鑑み、昨年夏休み明けに総務委員名で現理事の皆様に『今後の放送人の会のあり方について』と題してメールでご意見を伺いました。

忌憚のない真摯なご意見の詳細は避けますが、質問項目は時期会長候補のついての考え方や現在の放送人の会が抱える課題（減少傾向が続く会員への対策、会費の未納問題、現行プロジェクト体制の見直し、会員相互の親睦交流の強化など）多岐に亘り、その後、ご意見をお寄せ頂いた皆様にお集まり頂いて議論を深め、その概要を2月の第5回理事会に報告致しました。

そこで、次期会長について検討する**『会長推薦委員会』（※1）が発足**し、現在4月の総会に向けて準備を進めているところです。

その意味からも、3月～4月に予定されている理事改選は今まで以上に重要な意味を持ってまいります。

具体的なスケジュールは2月の理事会に諮ったのち確定し（※2）、会員各位にお伝えしますが、このところ――

皆様による投票総数も減少傾向にありますので、次期理事改選に際しましては、できる限り多くの会員の皆さまの投票をお願い致します。

＊ ＊ ＊

日頃事務局を預かる身として総務委員会全員、新たな体制に向けて可能な限りの努力を続けて参りますので、引き続き会員の皆様のご理解とご協力をよろしくお願い致します。

（2025年1月23日）

≪お詫び・編集長より≫

大変申し訳ありません。この原稿は本来、会報一〇三号に掲載すべきところを、菅野の誤りで掲載し得なかったものです。誤りの原因は集中力欠如でした。

会員の皆さま大変申し訳ありませんでした。

☆ ☆ ☆

第6回理事会の報告より

※1 委員は理事の、石田、柏木、工藤、菅野、田中、林、深尾、永田、前川、吉田、矢島、渡辺、小川（事務局）。監事の長井。計15名。

※2 **新体制へのスケジュール**

3月5日（水）理事改選の選挙公示
3月24日（月）投票表紙送付。
送付対象は3月31日現在在籍の予想される会員。
4月14日（月）投票締め切り。
4月16日（水）理事選考委員会
会員の投票結果を受けて会長、副会長、事業委員長、広報委員長、総務委員長、事務局長の選考委員により理事を選考。
4月19日（土）決算理事会
5月24日（土）総会（理事監事の承認）及び25年度第2回理事会（新会長の選定）

＊ ＊ ＊

『会長推薦委員会』の経緯と報告

第5回理事会の討議を受けて発足した「会

長推薦委員会」は、今後の放送人の会のあり方とともに、新しい時代に向けて「どういう方が会長にふさわしいのか」を議論しました。

基本は、外から招聘するのではなく、今いる理事・監事の方の中から選ぶべき、との意見が大勢を占め、「これまでの放送人の会を熟知していて、会のいろいろな課題も把握されている方」、「この機会に、世代の新旧交代も必要」、などの意見が出され討議が進められました。

その結果、次期会長長の候補に数名の方のお名前が挙がり、候補を推薦した委員が個別に候補者の意向（推薦された場合、お引き受けいただけるか？）を伺うことし、その結果を2月15日の第6回理事会に報告いたしました。

これにより、最終的には

5月の総会後の25年度第2回理事会で、「放送人の会」第4代会長が推挙されることになります。

（文責・小川）

放送人グランプリ2025

投票の締め切りは

3月7日(金)必着！

BROADCAST CREATORS ASSOCIATION OF JAPAN

放送人の会

No.103
2024.02.07
下馬評座談会
特集号

〒102-0094 千代田区紀尾井町１－１　千代田放送会館　３階　TEL&fax：03-3221-0019　Mail：info@hosojin.jp
発行：一般社団法人・放送人の会　　会長：今野　勉　　編集：菅野高至、青木裕子、鈴木典之、逸見京子、田中典子
事務局：深尾隆一　須斎惠美子　　http://www.hosojin.jp

テレビ年齢だけでも、『還暦』になった

その3　万博で世界一周

放送人の会　会長　今野　勉

万博がやって来た

萩元晴彦さんと私をたずねて、電電公社（日本電信電話公社）の万博プロデューサー氏が現れる。一九六八年の2月、2年後開催の大阪万博の相談だった。

電電公社と国際電電（国際電信電話株式会社）が共同で出資して作る「電気通信館」というパビリオンがある。電電公社のマイクロウエーブのネットを使って、会期中の6か月間（3月15日～9月13日）、中継映像を館内で上映したい。具体化するにはテレビの人材が必要で協力を仰ぎたいとやって来たのだ。

私たちは、この仕事はテレビそのものだと思った。半年間、毎日、生中継の映像を流す、テレビ局では決してできない、テレビの可能性を試す実験だった。

そこで、私たちが考えたプランは――パビリオンの広場にスクリーンを3面作る。その3面で、半年間、毎日ナマ放送をやる。日本全国のどこかAとBとCと万博会場を結んで映像音声のやり取りをする「システムと企画」を考えた。毎日のナマ放送はテレビ局のディレクターには日常的な仕事の延長だったからだ。

3面のスクリーンに合わせてメインホールは三角形になり、広場も「三角広場」となった。

だが、公社の万博チームと意見が対立する。32歳の私と同世代の彼らは、広場を神社のお祭りの境内に見立てて、屋台のようなものをあちこちに配置して広い空間を庶民的な祭りの場に変える。だとすれば、そこに流れる映像は祭りを盛り上げる添えものではないだろうか…。

私たちのコンセプト――遠くの場所（空間）に流れる〝日常の時間〟を遠く離れたこちら側（会場）にいて共有する――と、くっきりと対立した。建築家の「空間論」とテレビディレクターの「時間論」が真っ向からぶつかり、お互いが譲らなかった。

9月になって、公社総裁の決裁が下りて、私たちのプランが通る。当たり前の日常を見せる、その先の思案はまだなかったが、中継地探しのロケハンで動くと、見えてくるものがある。中継地の条件は、公社の無線中継所（タワー）が見える場所、そこだとマイクロウエーブを使って中継地との「双方向性」が可能になる、当時のテレビでは想像しえなかった、双方向性だった。

世界一周の嘱託

三角広場に入るための、約一八〇㍍の導入空間と呼ぶ長い通路がある。その空間にも何か映像を流したいと、公社の万博氏があっさりいう。

再び私たちは考えた――「人間とコミュニケーション」をテーマに、①「赤ん坊」の泣く声と顔、②人々の「抱擁」する瞬間、③世界をまわる「キャッチボール」を考えた。

③では、通路の右と左にダーツとテレビの受像機を並べて、右の壁からニューヨークの人が音の出るボールをポンと投げると、音がカランカランと鳴って反対側の左の壁で、サハラ砂漠にいる人がパッと受け取る、編集で「投げて受け取って」を繰り返し、通路を挟んで延々40人ぐらいのキャッチボールを見せる空間を作ろう、と。

11月1日、私たちは休職の辞令をもらい、万博終了まで電電公社の嘱託に雇われる。日比谷の公社建築局に通うことになる。

それから9か月後。私たちは42か国を回って、赤ちゃんと抱擁を撮りつつ、ボールを投げるカットと受け取るカットを、そこら辺りのいろんな人たちを見繕ってロケをする。まだ1ドル三六〇円、1か国3日半！ものすごく大変な大ロケーションを企てて、2か月余で本当に地球を1周してしまう。私の初めての海外旅行は、お祭り騒ぎのようなロケだった。

撮影チームは12名。先発隊7月下旬、後発隊8月1日。日本全体がイケイケの面白い時代でもあった。

祭りのあとに…

69年10月4日、2か月余の海外取材から帰って、初めての企画会議。万博プロデューサー氏は、会場でディレクションをする大阪のディレクターたちを味方につけて、三角広場もコンセプトも「日常的時間」から「笑い」に変わっていた。私たちは必要とされていなかったのだ。それでも、請け負った導入空間の映像を編集して完成させ、公社に納入する。

そして万博から撤退する。世界一周から帰国して直ぐに、私たちはTBSをやめて、日本で初めての制作プロダクション作ることになる。大忙しで、大阪に行く余裕も気持ちも、なくなったのだ。

（続く）

（24年5月取材・文責：菅野）

会員短信（入稿順）
～25年初春～

脚本・台本収集に向けた、アンケートのお願い

石橋 映里

日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアムの事務局代表をしております、石橋映里です。

脚本アーカイブズでは、映像保存が少ない一九八〇年代以前の放送番組の脚本を中心に収集して参りました。現在、国立国会図書館に6万冊以上の脚本を寄贈し公開しております。

「放送人の会」会員の皆様からも貴重な脚本をご寄贈頂いております。ラジオ放送開始100年を前に再度、脚本の所蔵に関するアンケートを各方面にお願いしております。

下記QRコード、もしくは入力フォームよりご記入頂けます。

https://X.gd/Fv1Tu

今後とも、放送番組の貴重な資料の散逸を防ぐ「アーカイブズ活動」へのご理解と応援を、どうぞよろしくお願い申し上げます。

☆　☆　☆

初めて寄稿いたします。

メディアストラテジスト 塚本 幹夫

フジテレビOBの塚本幹夫です。初めて寄稿いたします。

大先輩の前川英樹さんから「フジテレビの連絡係も必要だから」とお誘いを受けて入会。当時、早期退職して独立を目論んでいたことなど口が裂けても言えず、すぐに役立たずの幽霊会員となりました。

二〇一六年にメディアやコンテンツの発展をサポートする株式会社ワイズ・メディアを設立し、放送局や配信サービスのアドバイザーをする傍ら、総務省の検討会に意見書を提出したり、メディア動向について白書や専門誌に寄稿しております。

ネットフリックスなどの配信プラットフォームが制作費をかけてオリジナルコンテンツを提供することは、放送業界がシュリンク傾向にある中、制作会社等には希望の光でしょうが、一方で国内事業者を盛り上げていかなければ、首根っこを押さえられてしまいかねません。

その観点から、放送がインターネットにも境目なくコンテンツを提供できるよう環境整備すべきだと、機会をとらえて意見表明しています。

現役時代は主に報道やコンテンツ事業に従事しており、番組内容について評価できるような経験も眼力もありませんが、会の末端でお役に立てることがあれば参加したいと思います。

☆　☆　☆

せめて、『製作委託法』に

矢島 良彰

昨年暮れの新聞が、「〝下請け〟用語見直しへ」と報じていた。下請法改正の有識者会議が答申をして今年度の通常国会で改正を目指すという。記事を見て昔のことを思い出した。

二〇〇九年、総務省は「放送コンテンツの製作取引適正化に関するガイドライン」を公表した。その中で、放送事業者に対して番組製作会社を〝下請け〟と規定していた。

〝下請け〟とは可笑しいのではないかと思った私は、所管の公正取引委員会に抗議の電話をした。手元の国語辞典によると〝下請け〟とは「引き受けた仕事をさらに別の者が引き受けて行うことを指す」のであり、いわゆる孫受けのことである。少なくとも我々製作会社は企画書を提案することによってコンテンツの製作を請け負っている訳で、発注者が示す仕様書に基づく取引とは違うという自負があった。思いの丈を伝えようと電話をしたのであるが、応対した職員はその通りで、とあっさり非を認め、にがり切った返答であった。なぜそのようなことになったのか、質問を重ねてもサー、と言ったきり暖簾に腕押しで埒が明かなかった。今、考えるに役人の方が一枚上手だったのかもしれない。

それから10数年が経っての改訂であるが、その理由は〝下請け〟と言う用語は、発注側と受注側の上下関係をイメージさせるからだと言う。記事では、私が訴えた用語の間違いについては触れていなかった。

ところで、法改正にあたって代わりの呼び名として〝パートナー〟などが候補に上がっているという。しかし、〝パートナー法〟とは、これはこれで実に意味不明の曖昧な用語ではないだろうか。せめて〝製作委託法〟とでもすれば良いのに、と思った次第である。

ちなみに、NHKでは「制作」と表示しているが、ATPでは例え委託と言えども当初の資金負担を含むことから「製作」としている。

☆　☆　☆

録音テープ再生までの苦労

鈴木 嘉一

ICレコーダーが登場する前、取材で使う録音機器はマイクロカセットテープレコーダーだった。読売新聞記者時代、たいていは大学ノートへのメモで済ませ、録音するのは著名人へのインタビューや聞き書きの連載用などに限った。だから、録音したテープは消去・再利用せず、ずっと保存していた。

昨年、テープの一つを再生する必要が生じ、久しぶりにソニー製のレコーダーを取り出したら、まったく作動しない。家電量販店で修理を頼んだところ、「ソニーは2007年に生産を終えたため、もう部品はないという。修理は受け付けられません」と断られた。

録音テープは50本近くあった。放送担当の記者として録音したのは、劇団「新国劇」の御大だった島田正吾さん、個性派俳優の小沢昭一さん、コメディアンから渋い性格俳優になった植木等さん、女優では桃井かおり、樋口可南子、小林麻美さんたちだ。出演者へのインタビューは数多くこなしてきたので、録音は個人的な好みからに違いない。

文化部から解説部に異動すると取材範囲は広がり、聞き書きの「時代の証言者」シリーズなどで市川崑監督、岩波ホールの高野悦子・総支配人、劇作家の永井愛さんらにロングインタビューを重ねた。作家では大江健三郎、宮尾登美子さんのテープもある。もちろん、放送関係についても川口幹夫・元NHK会長をはじめ、脚本家では橋田壽賀子、倉本聰、山田太一、大石静さんらの長時間にわたる録音テープを保存してきた。

名前を挙げた人の半数以上は故人となっている。それだけに、その肉声を記録した貴重なテープをこのまま埋もれさせられないと考え、再生できる中古品を探すことにした。

まず、家電などをリユース（再利用）するハードオフに当たった。私の地元だけではなく、

東京・秋葉原の電気街にも足を延ばし、全部で4店を訪れた。しかし、メーカーを問わず、お目当てのレコーダーは1台もなかった。

次は、アマゾンがインターネット上で運営しているマーケットプレイスにアクセスしてみた。真夏の盛り、ソニー製の同じ機種を注文すると、届いた中古品は作動しない。今度は別の業者が出品したものを注文したが、これまた不良品だった。作動しても、テープのスピードが異常で、よく聴き取れないものもあり、注文―不良品配送―返品の繰り返しは何と10回にも上った。

業を煮やして、何回目かの返品の際、「非常に怒りを覚えている。アマゾンは受け付けから配送までを担う企業として、取扱業者のずさん極まりない商品管理を放置していいわけがない。善処をお願いしたい」という文書を添えたものの、何の音沙汰もなかった。ネット上の「商品レビュー」で同様の苦情を書いても、完全に無視された。

11回目にしてようやく、正常に作動する中古品を手にしたころは、もう年の瀬を迎えていた。半年近くかかり、アマゾンへの強い不信感は募るばかりだ。

今回は録音機器を何とか確保できたが、同じような苦労は録画機器にも当てはまるだろう。アナログからデジタルに至る技術革新の過程では、誰もがハードの変化という大波を避けられないとあらためて実感した。

☆　☆　☆

日記より抜粋した「胆嚢摘出の記」

相田　洋

日時はつい最近（水曜日）晴れ。前半省略。夕食後1時間が過ぎた頃からミゾオチ周辺に軽い鈍痛。次第に強くなり、22時頃に七転八倒。あぶら汗で全身びっしょり。22時から午前2時ころまでに頻尿8回。口の中カラカラ。声帯が動かず喋ることが困難。いつもなら午前2時頃から症状が緩和して最後には正常に戻るのだが、今回は翌日の明け方になっても痛みが去る気配がない。

昨年の4月、突然起きた腹痛を診てもらうためにホームドクターの紹介で武蔵野日本赤十字病院消化器内科を訪れた。そのときの診断結果は「胆嚢に出来ている石の挙動が原因だが手術するほどではないので、しばらくは食事内容に注意しながら観察する」であった。その後も何度か同じ症状に苦しんだが、いつも、痛みが深夜から明け方にかけて消えていたので、喉元過ぎれば状態が1年続いた。

2日目（木曜日）雨天。前半省略。深夜から痛み止まらないばかりか一段と酷くなり一睡もできなかった。口の中はカラカラのドライマウス。喉の奥に痰が絡まって咳も頻発。胃部の激痛で寝汗でびっしょり。明け方に右手に強い痺れ、同時に右足ふくらはぎに「こむら返り」の激痛。7時30分に起きてみると足元定まらず、両目を開けているとめまいに似た症状になり、むかつくが、片目をつぶると直る。

15時にパソコンを抱えてマイカーでホームドクターの医院へ。診察室でパソコンを開いて病状メモを読むと、先生はそれを聞きながら時々自分のパソコンにメモった後、患部を手で触り聴診器を滑らせて体内音を聴く。

「胃液の出過ぎかな、逆流性食道炎か?」。「昨年の4月、日赤で胆石が見つかっているんだよね」「胆石が悪さをしているのかなあ?」と思案しながらも、とりあえず胃壁の荒れと診断した。胃壁の粘膜を保護する「アルカロイドG内服液」と胃酸の分泌を抑える「タケキヤ錠20㎎」を処方してもらい帰宅。

夕食は牛乳だけにして処方された薬を飲む。しかし病状は悪化の一途を辿り、痛む場所がミゾオチ周辺から、5センチほど左下の部位に移った。息をする度に激痛。寝返りを打つ度に痛み、無痛の体位を探せなくなった。腹痛収まらず明け方まで続き、全く眠れず。午前2時から午前6時までの間に排尿8回の超頻尿。しかも、その色は濃い紅茶色。

新しい位置に移った痛点は、それまでとは何かが異なる。胃壁が胃液で荒れているような問題ではなく、腹部に生き物が棲んでいて、それが動く度に神経に触れるのではないかと思うほど。起き上がろうと体位を変える時や、咳が出る時など。何かの拍子に腹部に力を入れると、刺激された生物が暴れ廻るのではないか。そんな邪推をしながらベッドの上を転げ回った。ついに一睡も出来ず。

3日目（金曜日）快晴。8時30分居間でパソコンを開いて「昨夜の病状メモ」を打つが、時間がかかってしまい午前の診察には間にあわなかった。午後の開院を待って15時過ぎにホームドクターの診察室へ。例によってパソコンを開き、「昨夜の病状メモ」を朗読した。聞いていた先生は朗読が「痛点がミゾオチ周辺から5センチほど左下の腹部に移った」に入った直後、先生の顔に緊張が走り、右手が受話器に伸び、武蔵野日赤病消化器内科に緊急診療を要請。続いて紹介状を作ってくれた。

「これ持って今直ぐ日赤に行って!!」。受付の青年が「タクシー呼びましょうか」と聞いてくれたが、一刻を争う状態らしいと思ったので、左手で激痛の腹を押さえながら、右手でハンドルを握って日赤に向かって発進した。

17時前に武蔵野日赤病院消化器内科に着くと直ぐに看護師が私を処置室に連れて行き、診察台に私を寝かせてキャスターつき点滴スタンドに鎮痛剤の薬液をセット。すると、みるみる腹痛が消え元気が出てきた。間もなく飛んできた若い医師が紹介状を読み、私から話を聴き、横たわっている私の腹部を触診し聴診器の音を聴いた。それが終わると看護師に①血液検査、②心電図のデータ把握、③腹部のエコー検査、④腹部のレントゲン撮影、⑤腹部のCT画像撮影などを一巡実施するように命じ、私に向かっては「奥様に直ぐに来るように伝えてください。検査が終わるタイミングで、おいで頂けるとありがたいのですが」。携帯でその旨をカミさんに伝え終わると、車椅子を持ってきた看護師が私を乗せて走り出した。

18時30分、車椅子は一連の検査を次々と終えた後、手術準備室に入り診察台に寝かされた。間もなく、そこにカミさんが駆けつけてきた。夫婦が揃ったところで消化器内科の青年医師が次のように説明を始めた。①病名は急性胆嚢炎、②現在の状況とここに至るまでのメカニズム。③治療の方法如何に関わらず入院が必要。④治療方法の検討（A：内科が行うことになる「内視鏡による胆石除去」B：外科が行うことになる「腹腔鏡による胆嚢摘出」C：従来型の開腹手術・外科担当）⑤只今から内科と外科で合同検討を行い決定する（所用時間は30分）。

19時30分、消化器外科の医師が来席して「腹腔鏡下胆嚢摘出手術に決まりましたので、これから私がご説明いたします」。ポンチ絵を使って30分間の解説。その後で全身麻酔をはじめとする9つの重要場面で「起きる可能性のあるリスク」について、ひとつひとつ丁寧に説明してくれた。

青年医師は私達が理解できたかどうかを厳しく問い詰めて確認した。私が「理解できた」

と答えるとその都度、隣の看護師が机上に「同意確認書」を広げて署名捺印を要請した。その数が全部で9枚。真剣に聞いているうちに私は「今晩ここで亡くなってもおかしくない」と思い動揺。どこかのタイミングでカミさんに伝えておきたい言葉を考え、とりあえず次の言葉を伝えることにした。「60年もの長い間本当にありがとう。頼りがいのある良きカミさんでした。大満足です」

全ての同意書に署名捺印し終えたころで、私はベッドに寝かされたまま、看護師達の手で、衣服を剥ぎ取られ、素っ裸にされ、手術着に着替えさせられた。その間、カミさんへの言葉を放つ機会を窺っていると、「そーれ」という掛け声とともに私の体が宙に浮いた。運ばれてきたトレッチャーにシーツごと引っ張り上げられたのである。ああ万事休す。妻への感謝を言うチャンスを失った。時に20時10分。

寝台車に仰向けに寝かされた私に見えるのは後ろに流れ去る天井だけだったが、ぶら下がる機器が多くなることで手術センターに入ったことを知った。数多く並ぶ手術台の一つに着いた。鼻に酸素マスクが置かれ、「麻酔に行きます」という声がすると間もなく私の意識は無くなった。

深い眠りから覚めた時、私の顔の上には4つの顔が並んでいた。その中の一人が「何事もなく無事に終わりましたよ」と言うと他の3人が口を揃えて「全てが順調でしたよ」。壁にかかる時計の針は零時10分を指している。4時間はかかっていたらしい。本当に何もなかったのだろうか。ストレッチャーに横になったままローズ棟5階二五二一室に運ばれ、ベッドに移された。部屋には長男が来ていた。不覚にも腹痛を押さえながらマイカーでやって来たが、入院となると何日も放置できないので、青梅に住む息子に代走を頼んだ。私から鍵を受け取った息子が帰ると、入れ替わるように当直の担当看護師がやって来て、点滴の再点検。体温と血圧の計測。酸素値の測定。検査用の血液の採取をして、部屋を暗くして退室。激痛から開放された私は深い眠りに落ちた。

4日目（土曜日）快晴。朝6時に当直の看護師来室。点滴バッグ（栄養液と抗生剤薬液の2種）交換、検温、血圧測定、酸素量計測、腹部術後痕（お腹に腹腔鏡を挿入した傷穴）の点検。傷跡に当てられたガーゼ（染み出す体液を吸収）の交換。約10分で終了。7時に本日午前担当の看護師が来室。彼女が先導して、車輪つき点滴スタンドを左手で持ちながら長い廊下を歩いて3往復。看護師が「手術直後に、こんなにスタスタ歩ける人は滅多に居ませんよ」と褒めてくれる。理由を聞かれたので「隔日毎に実践しているプール通いでしょうかねえ」と答え、週3回、水中歩行で五〇〇㍍歩き、平泳ぎで五〇〇m泳いでいることを付け加えた。これが消化器外科の全員に伝わったらしく、主治医の執刀医と腹腔鏡チーム（主治医と二人の青年医師と女性看護師）が来室した時、執刀医が次のように教えてくれた。「命拾いしましたね、胆嚢が半分腐っていましたから」「来院がもう一日遅かったら処置なしでした」「処置なしと言うことは、あの世行きということですか？」「最悪のケースではね。命を失うところまではいかなくても、終生寝たきりになるのは確実でした」「腐った胆嚢から有毒なバイキンが体中に広がり、血が菌血になり、次々と起きてくる悲惨な症状に苦しむことになります」「相田さんの体が全身麻酔と腹腔鏡手術に耐えられるかどうかを判断する時に重要だったのは筋肉の状態です。相田さんの筋肉は若かった。プール通いのお陰でしょうね」。先生は最後に「これが拾えた命の証ですよ」と私に小さな瓶を手渡して去った。小瓶の中には直径2センチほどの味噌玉みたいな茶色の球体が入っており、瓶には「摘出された胆石」と表記されていた。

☆　☆　☆

壁を越える「物語」を

内山 聖子

新年にトランプ大統領が再誕生する。ベルリンの壁崩壊から30年、世界にはまた壁が次々に出現している。この分断を越えるのは「物語」だ――。

私はやっととれた年末年始の休みに、久々に海外に飛び出した。そこで目にしたものはNetflixの「イカゲーム」の広告祭りだ。韓国のドラマシリーズは、もはや国内に向けて作られていない。アジアだけではなく、全世界に配信するドラマとして企画製作されている。いわゆる長尺映画である。日本がテレビや映画を国内で十分商い出来ている間に、〝世界で見られるエンターテインメント〟が映像の主流になっていた。アメリカの時代劇ドラマ「将軍」もまた世界を席巻。日本発ではなく、海外の製作チームが今や日本で見られなくなった時代劇を莫大な製作費をかけて作り、世界で賞を総なめにしている。

私たちはもっと自分たちの文化をベースにオリジナルの物語を作り、自らのエンターテインメントで世界の壁を越えていくべきだ。私自身、海外の視聴者を意識してテレビドラマを作ってきたわけではないが、「ドクターX」は地上波ドラマシリーズとして人気が出たと同時に、グローバルOTTとの交渉を始めた。

当時は日本のドラマは海外番組販売が中心で、海賊版が出回ってる始末だった。いまや放送前からグローバルOTTにセールスが決まっているドラマが多い。それによってリッチコンテンツになりうる十分な製作費を用意することが出来たり、「全世界配信！」など宣伝が唄えたりする。逆に、俳優や優秀なスタッフはその環境に惹かれて拘束されてしまい、ドラマ業界はなかなかの人手不足である。

ただこんな混沌とした環境の時は、守りに入らない面白いドラマが生まれてくるものだ。コンプライアンスに縛られた地上波ドラマに嫌気がさした視聴者を刺激する配信ドするラマも沢山出てきたが、「王道」の物語が支持されたり、昔の向田邦子作品や山田太一作品がリメイクされて今の話題になったりする。

つまりは「強い物語」「面白い話」であれば、地上波、映画、グローバル配信問わずに人は魅了される。色んな壁を乗り越えたり、壊したり出来るのはやはり「物語」である。

☆　☆　☆

SNSとテレビについての ちょっとした感想。

SNS時代に、「お前はただの現在に過ぎない」から「少し遠回りして放送法を考える」までを考える。

前川 英樹

この1年のメディア関連事象の最大の関心事は「SNSと選挙」であろう。それは同時に既存メディアの影響力の低下であり、その既存メディアをエスタブリッシュメントと考える〝人々〟からの批判や不満であり、既存メディア離れの加速化であった。

テレビも新聞も流石に反省や自己批判を含めて自身についてのコメントを語り始めた。テレビで言えば、例えば「クローズアップ現代」

（NHK）や「報道 1930」（TBS）などである。

テレビ（あるいは放送）の存在理由はその時間性にあるのだが、最近のSNS状況を見ていると〝深さ（深度）〟に拘るべきではないかと改めて思うようになった。

「テレビは時間である（映像ではない）」と喝破した先人たちの認識の先見性は、そこに情報の深度（あるいはその掘り起こし）というもう一つの時間特性を付加することで、テレビは21世紀のメディアたりうると考えられるのだが、どうか。

『『時間』をすべて自ら政治的に再編したあとで、それを『歴史』として呈示する権利を有するのが『権力』だとすれば、そのものの『現在』が（を…引用者）、as it is（あるがままに）呈示しようとするテレビの存在は、権力にとって許しがたいだろう。『テレビ、お前はただの〈現在〉にすぎない。お前は安定性を欠き、公平を欠き、真実を欠く』――それが体制の警告だ。テレビが堕落するのは、安定、公平などを自ら求めるときだ。」（「お前はただの現在にすぎない　テレビに何が可能か」萩元晴彦、村木良彦、今野勉。田畑書店・1969）

テレビは（あるいは電子メディアは）時間のメディアとして誕生した。記録よりも伝送が先行したのである。一般的には、それは同時性同報性を最も特徴的な機能とされている。「速く」「広く」である。

今、テレビが改めて自らの特性を確認するならば、そこに「深さ」を見るべきだろう。時間は進行性と拡散性だけでなく深化として機能する。テレビの記録機能は「同時的」メディアと対立するように見えるこの機能を捉え返すことによって、メディアとしてあるいはジャーナリズムとして存在することが可能になる。テレビドキュメンタリーの可能性の再発見、新たな意味をそこに見るべきだ。それは個別の番組としてではなく、総体としてのテレビ機能として定位されることでテレビの時間性の拡張なのであり、先人たちの洞察への新たな意味付けでもあろう。例えば、表現方法としてのテレビモンタージュは、こうして新たな意味付け＝「現在性」が付加されるその可能性を積極的に開拓されるべきであろう。記録は常に進行中の状況に投げ返されることで意味を持つ。想像力と現在との同時進行としてのテレビジョン。

そこで問題はこうなる。

総体としてのテレビメディアの可能性を自由に、即ち「あるがままに」表現し記録しこれを持続するためには、メディアとして「制度からの解放」、そのための国家権限による管理の極小化を積極的に提起しなければなるまい。少なくとも、戦後体制で成立した放送法制において短命に終わってしまった電波監理委員会による免許審査制度の復活を主張すべきである。

このことは、近代メディアの宿命ともいえる「想像の共同体」とのある種の共犯関係を意識的対象化することと不可分なのである。想像力による共同体の形成は、前近代への異議申し立てとともに近代メディアが不可避的に足を絡め取られる構造による。その時「時間を再編する」ことの構造的な機能を前に、私たちは「ただの現在」であるテレビの捉え返しに向き合わなければならない［私］を発見することから始めなければならないのだ。SNS時代にテレビあるいは放送が向き合うべきテーマとは何か、その原理的考察から始めたい。

かくして、放送法問題は戦後民主主義論との関係とともに、メディア論としてのアプローチが必須の課題なのである。（「『オレたちの放送法なんだぜ』―放送法問題を少し遠回りして考える」会報99号、2023.09.29.）

だから、SNS情報が不正確であり根拠不明であるからと言って、その規制を期待したり主張したりしてはならない。それは新しい表現の場でありツールとして浸透しつつあるのであって、そうした状況において私たちはマスメディアとして何を果たさなければならないかを見極めるしかない。SNS、それは既存メディアにとって新しい環境なのである。インターネットが登場した時に、「誰もが情報発信者であり、表現者になれる」と言われたことは、まさしくその通りの現実である、と言うしかない。

「朝、目が覚めると戦争が始まっていました」（方丈社、解説・武田砂鉄、2018年刊）という時代の直前にいる私たちと私たちのテレビジョン。私たちは以下の示唆的フレーズの前に立っているのだ。ここで考える、それが放送人というものではないだろうか。

「社会のマジョリティにとって不都合な他者の言論に対する弾圧は、文字を得た人類社会において繰り返されてきた現象であった…どの時代にも時の権力者や宗教指導者たちにとって不都合な、それでいて民衆を熱狂させる書物は存在し、それが社会に拡散されないよう『検閲』するシステムが作り上げられてきた。もちろんその目的は既存の権威に対する疑義を抑え込むためであった。」（読売新聞・文化欄、岡美穂子の書評「禁書目録の歴史」ロビン・ヴォス著）

「新しい事実を掘り起こすより、すでに知られていることについて意見を言う方が、残念ながら簡単なのです。」スウェル・チャン『選挙報道 日米の課題』（朝日新聞「オピニオン 交論」二〇二五年1月7日）

「匿名性の持つ負の部分はたくさんあるけれど、同時に正の部分に目を向けた方がいいとも思います。」言論の自由は民主主義の根幹 ネット規制 慎重に議論を 青木理（毎日新聞二〇二〇年5月31日 9時45分。／最終更新 6月1日 11時3分）

☆　☆　☆

大河ドラマの演出を終えて

大河ドラマ「光る君へ」チーフ演出

中島 由貴

二〇二四年の大河ドラマ「光る君へ」は、63作目にして、（作・音楽・主演・制作統括・チーフ演出）が女性で構成されることとなった。

「大河ドラマは男性のもの、連続テレビ小説は女性のもの」という区分けはないと思うが、大河ドラマとしては思い切った方向に舵を切った番組だったと思う。たまたま飲み屋で出会った方から「一年間有難うございました！」などと言われたり、「大河ドラマ、初めて見ました」「初めて大河ドラマを完走しました」というコメントに触れると、約3年間格闘してきた甲斐があったかなあと、終わってからしみじみ実感。しかし、この先こういう布陣になる可能性はあるのだろうかと思うと、正直なんとも言えない。

ここ数年で、NHKドラマ部（正式名称ではないが面倒なので）に女性職員が増えた。しかし、現在演出を担当しているのは、私（最年長者なので）の下に片手を超えるかどうか。他局の状況は分からないが、演出という仕事が女性に人気がないのか、何か別の要素が邪魔しているのか（中島の背中を見ていて失望して

いるとか)、とにかく昨今のＮＨＫ採用者の男女比に対して、女性演出があまり増えていないのが実情。向き不向きもあるので、何が何でも増やさなければいけないということもないのだが…。

とはいえ「光る君へ」は、女性スタッフが多かった。扮装部のみならず、大道具、装飾、造園、撮影、照明、助監督…と多岐に渡って女性たちが活躍していた。怒声が飛び交っていたかつての制作現場とはがらりと雰囲気が変わり、私個人は心地よく仕事をさせて頂いたのだが、男性演出陣は果たしてどう思っただろう。

☆　☆　☆

W・H・S・Y、諸兄のこと

元NHK音響デザイン　織田　晃之祐

いつもの大音声で「おい、俺の次のドラマは、君の口笛でやってくれよ！」と、頼みこんできたのは、あの和田勉だ。そのドラマとは一九六三年制作の『鋳型』だ。そしてそれから4年後の、当方の結婚式の彼の祝辞はやさしかった。「いやあ、よかったですねえ。奥さんは幸せですよ。これからは、彼のやさしい口笛をいつも聴けるんですからね…。」

70年、青少年番組『若い広場』のテーマ音楽を『鋳型』のような口笛でやりたい！と、懇願してきたのは萩野靖乃ディレクターだった。その口笛のテーマを聴いて、こそっと小さな声で頼み込んできたのは、昨年88才で亡くなった佐々木昭一郎だ。「俺ね、テレビをやることになったんだが、音楽は『若い広場』のような口笛でやりたい…。」それ以来、当方は彼のテレビドラマ『マザー』(70)、『さすらい』(71)を口笛中心の音響デザインでやり、名作『四季・ユートピアノ』(79)、『川の流れはヴァイオリンの音』(80)等にも参加…。彼自身はエミー賞、芸祭大賞、毎日芸術賞などの大成果を手中にする。そしてその後の佐々木は、かつて吉田直哉のNスペ『明治百年』のスタッフの一員だったことから、更に吉田との交流を深め、その両人のアルコールの席には、なんと当方も常に参加する嬉しい時間が増えていったのである。そして佐々木は、いつも吉田のテレビ黎明期のドキュメンタリー『日本の素顔』を大評価し、吉田もまた、佐々木の、脚本を含めてのドラマづくりを大絶賛し当方の音響デザインも大いに讃える…。卓越たる放送人であった。そしてその後吉田は、年間大型ドキュメンタリー『未来への遺産』(74)、『太郎の国の物語』(89)、Nスペの名作『アマゾンの大逆流・ポロロッカ』(78)などの音響デザインのすべてを、当方に任せてくれたのだった。

そしていま二〇二五。敬称略で記させて頂いた諸氏諸兄は、なんとみな鬼籍の人である。そして当方もまた年を重ねて、まともな口笛を吹けないのだが、どっこい！手元のシンセサイザーは、口笛よりはるかに豊かなサウンドを奏でて、ＣＤアルバム「星のかけら」BSCL30003、ナウ・オン・セール中だ。そして…。

そうだ！鬼籍の諸氏諸兄は、その超能力？で、この世の波動の全てを！リアルに聴取可能なはずである…。

さあ勉さん、萩ちゃん、昭ちゃん、マエストロの吉田さん！ぜひ聴いてください。86才の音。ぜひとも耳傾けてください。よろしく。よろしく。おねがいします…。

☆　☆　☆

断層

近藤　邦勝

流幻の如き人生百年の中、と陶淵明先生は謂われるが…。既に八割がた過ぎてしまった年月を振り返ってみて…何やら節目というものもあった様に思える。年令でいうと18歳、23歳、46歳、65～66歳の折に自分の環境が大きく変化した。断層といっていい跡がくっきり認められる。

生まれて18年間は東北の磐城という田舎町に住んで高校を卒業する迄その土地を離れることは少なかった。この歳に大学受験で拠点が移った。京都に住むとそれまでの人間関係が全く変わってしまった。それからゴミゴミゴタゴタしながら何やら愉しい時間が流れ…4年経って…。ハタと思った。このまま卒業して就職し社会に出て行って何か今よりより良いことがあるんだろうか？うーむ…ありそうにはとても思えなかった。一九六七年のことである。親にあと一年学生をやらせてくれまいかと頼んだ。しぶしぶ親に赦してもらって卒論のみを残して一年間留年することになった。一九六八年、サンケイ新聞社（関西）とＴＢＳから内定をもらった。サンケイに行けばそのまま割と気に入っている関西圏に居座れる…。

或る日の或る朝、銀閣寺電停でバッタリ高校時代のクラスメイトと出会った。当時理学部湯川研究室にいた橋本君、入学以来殆ど会ったことが無い、共通の話題というのも無く、互いにニヤニヤ笑って向かい合っているだけだった。じゃあといって別れ際に瞬間的に僕の口を突いて出たのは「俺、東京に行くことにした！」という言葉だった。割とデカい声で言ったと記憶している。

ＴＢＳでは一九六八年5月から石井ふく子Ｐの組に入れられ二年半程お世話になった。相変わらずゴミゴミゴタゴタした暮らし振りであったが生活の心配がなく遊んで暮らしていけるのが何よりだった。タイムトンネルに入ったような20年ほどの年月が流れ、46歳の時職場が制作から編成に変わった。また周囲の人間関係がガラリと変化した。ガタガタゴミゴミした12年間が過ぎ、次は事業局。興業・バレエ・番販、映画・ＤＶＤ販売、ＴＶショッピング・格闘技、デジタル関連など幅広い分野が守備範囲。お金と直結する職場なので実は割と緊張を強いられた。幸い業績はまァまァの線で引き継ぐことが出来たと思っている。やがて肩叩きにあい、美術制作会社アックス、番組制作会社ドリマックス、同テレパックと渡り歩かされ65歳を過ぎてサラリーマン生活は終わった。未だほぼ五体満足で生存しているのがなんだか不思議に思える今日此頃である。

☆　☆　☆

傘寿の歌声

秋田　和典

岐阜弁など東海地方の方言の調査研究をしている神田卓朗さんが昨年「こんな話知っとんさる？　おもしろ岐阜学入門」という本を出した。神田さんは元岐阜放送のアナウンサーで地元の大学教授も務めた方だ。今回の本は放送局時代に取材で知った情報や学生たちと一緒にフィールドワークに出かけた地域の話題などをもとに岐阜のトリビア情報をまとめたものである。

関市のある地区では、同姓の人が大変多くて、小中学校では出席をとる時に名字を呼ばずに名前を呼んでいたとか、中津川市のある地区では、節分の豆まきの時に、親が「鬼はーそとー、福はーうちー」と言うと、子どもたちが「ごもっともー！ごもっともー！」と合いの手のような声をかける風習があるというような話が載っている。また神田さんは中津川で

開催されたフォークジャンボリーにも参加したそうで、このイベントについての熱い思いも紹介されている。

そのフォークジャンボリーに「六文銭」時代に出演したのが小室等さんである。傘寿を迎えた小室さんの新録音のアルバム「ｌｏｖｅ ｓｏｎｇ」がリリースされた。「雨が空から降れば」や「だれかが風の中で」などおなじみの曲が若々しい歌声で収録されている。同世代を元気にしたいというメッセージも込められているそうだ。年の初めの楽しい音楽体験だった。

（番組ディレクター）

☆　☆　☆

「箱根駅伝」一〇〇回超えに想う

工藤 英博

箱根駅伝は、今では日本の風物詩になって夏に花火を見るのと同じように、正月には家庭でテレビ中継を見る。一九八七年に生中継が開始されて歴史を積み重ね、私たちの胸に刻み込まれてきた。

一〇一回目を迎えた今年も平均28・4％の高視聴率をマークした。それにつけても、一昨年の「放送人の証言」で箱根駅伝生中継の生みの親、坂田信久さんが熱く語った収録が蘇る。（以下、敬称略）

坂田信久は東京教育大（現・筑波大）を卒業、62年日本テレビ入社。運動部に配属された1年目に箱根駅伝を取材し、素晴らしいレースに深い感銘を受けて強く中継したいと思った。お正月はお笑い番組や歌番組が多く、若者の溌剌とした姿を放送すれば、感動する人はたくさんいるはずだ。

しかし、当時は中継のノウハウもないアナログ時代、箱根山中の電波環境などリスクが多く、先輩たちに相談するも「中継は無理だよ」と一蹴されるばかり。

中継技術を磨くために、米国で1年間の研修を終えてきた同期入社の大西一孝に相談すると「不可能に挑戦するのは面白いじゃないか」と。技術パートの根回しは、中継技術の中心だった大西が受け持ってくれることになった。

しかし、この実現不可能に思える大事業を成し遂げるためには、求心力があり制作能力に秀でたディレクターが必要だ。坂田は初めて上司に頼み、通常のシフトではなく田中晃を指名した。自分より一回り以上も年下だが、「晃は自分には無いものを持っている。彼と組めばきっと上手くいく」と。実際、坂田は81年の「第1回東京国際マラソン」の中継でも田中を抜擢して成果を上げて以来、コンビを組んできた。

田中晃は早稲田大学一文演劇科を卒業し、「傷だらけの天使」や「前略おふくろ様」のようなドラマを作りたくて79年日本テレビ入社。配属は田中の意に反して運動部となったが、その仕事ぶりはセンスに溢れ、人望もあった。坂田はパートナーにディレクターの田中晃、技術の大西一孝を得て「チーム坂田」は本格的に動き出した。

何度も退けられたこの中継番組の企画は、ついに86年の役員会で承認されてスタート。89年に全コースの完全生中継が実現して視聴率も20％を超えた。制作と技術の一体感がなければ成功しない事業だった。

初中継で総合ディレクターを務めた田中晃（現・ＷＯＷＯＷ代表取締役会長）が、ＯＢ選手たちに話を聞き続けるうちに共通の想いがあることが判った。

箱根駅伝に参加するランナーがなによりも大切にしている価値がある。それは「タスキを次につなぐこと」だ。その重みをどの人も熱っぽく語る。だから中継では、タスキリレーを中継のフィロソフィー（哲学）の最重要事項にした。

田中は年頭のインタビューに改めて語っている。

「どの大学が勝つか、というよりもタスキをつなぐ選手個人のドラマの集合体なのです。それを表現できなければ、中継する資格はないのです。箱根駅伝の本質は、あくまで個人のドラマであり、そのドラマが大正9年から続いて、今回一〇〇を超えた。走ったランナーのすべてにドラマがあって、その積み重ねに視聴者は心を打たれるのです。」

☆　☆　☆

「放送人」と「メディア人」

千葉 邦彦

「放送人」という言葉は、〝知の巨人〟梅棹忠夫（民俗学者　1920年–2010年）が一九六一年に朝日放送の広報誌『放送朝日』に寄稿した論考「放送人の誕生と成長」が初出とされる。放送という新しい仕事に従事する職業集団を、「新聞人」に対して「放送人」と名付けたのだった。ところが、放送に携わる者のなかに、この言葉についてシニカルな見解を表明した人物がいた。ＮＨＫドラマ部の和田勉（演出家1930年–2011年）である。和田は部内誌『演出研究』（一九六八年）で、次のように述べている。「職業人の一類型として、『放送人』という考え方がある。あるいは『テレビ人』。企業意識では『ＮＨＫ人』だけれども、どうも僕らは、そういう小さなワクを自分で決め過ぎる。放送の仕事はこういうものだ、と決めること自体が自分をダメにしているんじゃないか」。一般には八方破れな印象を以て知られる和田勉、その若き日の真っ当で鋭い見解である。

それから半世紀あまり。この国の「放送の一〇〇年」を前に、今野会長は、「放送人とは誰か」をあらためて問い、「放送人は隣接する領域の人たちと話をしないといけない」と発言された。前者は、『放送人』とは誰のことなのか。放送人が集まって何かの目的のために活動しようとするとき、その目的とは何なのか、ということが問われる」「『放送人』と枠づけることで生まれる『会の目的』は、これからのメディア状況に積極的に関われるものであるのか」（会報83号（2019年2月））という問題意識。後者は、「会が始まって26年、その間に、『隣の領域』（映画、演劇、音楽、文学、漫画など）の人たちとの話し合いの機会は一度もなかった。なかったというよりは、作らなかった、というのが正しい。何たる視野の狭さであろうか」との反省と、「どの分野の誰と話し合ってみようか。すぐにでも、会員と『隣の領域の人』の候補を考えていきたい」という意欲表明であった（会報97号（2023年2月））。そのための議論はなされたのか。議論したとしても、〝情報の自家受粉〟や〝共通の思い出の確認〟でよいのか。

では、今野会長の問いかけに対する答えは、どこから得られるのだろうか。それは、「自らを『放送人』と限定的に捉えない人たち、分かりやすく言えば、「放送人」を超えて、「メディア人」という視点に立つ人々のなかからではなかろうか。

「メディア人」といえばという話をして、本稿を結ぶ。一九九七年6月11日、私はＮＨＫ放送文化研究所「メディア情報」に着任した。職制改正により、旧来の放送情報調査部が「メディア情報」に変わった日であった。放送分野以外の人々との情報交換の機会が増えていき、

そうしたなかから生まれた集まりを〝メディア人の会〟と呼んだ。約四半世紀後の二〇二三年6月20日、私たちは〝メディア人の会〟を起源にもつ一般社団法人「メディア人フォーラム」（代表理事：千葉）を設立した。法人の定義は、「博物館、美術館、図書館、史資料館、大学、研究機関、アーカイブ等から、建築、絵画、演劇、音楽、文学、出版、新聞、広告、写真、映画、通信、放送、コンピュータ・AI等にわたる多種多様なメディア分野の関係者が広く自由闊達に交流することを通じて、共有し得るテーマや目標を見出し、それらを追求、達成するために融合的な活動をすることを目的とする」としており、その上で、「メディア分野全般に関する調査及び研究、提言の公表、講演及び各種セミナーの開催」や「メディア分野全般の関係者及びその諸団体との交流・提携」を図る。次の機会には、より具体的な話、場合によっては提案をしたいと思う。

☆　☆　☆

TVドキュメンタリーを継ぐ

林　健嗣

OBとして、どう応援できるか、という思いで前回に引き続き「地域制作者の現在」を厳寒の北海道から報告させて頂きます。

フォローするのは、昨年9月からはじまった「北海道ドキュメンタリーワークショップ」に参加する若い記者や制作者スタッフと、その運営を担うベテランプロデューサー、ディレクターたち。NHKを含む道内6局共同の取り組みは、今年7月まで残り3回札幌市内で開催される。今回は、昨年12月15日北海道文化放送uhbカフェテラスで開催されたワークショップに参加していた20代の制作者たちの声を軸に報告したい。

ゲスト森達也も驚いた、東京にない若い制作者たちの熱!?

第二回は、ゲストの森達也監督も経験がないと驚くほど、参加者93名のうち6割を20、30代の若い制作者が占めた。当日の大雪予報を吹き飛ばし、森監督の映画「A」上映会からはじまった。25年前のオウム教団の騒動を歴史的な事件として、活字と映像だけで知る世代には、新鮮な衝撃だったようだ。映画「A」を通して、森は、どのようにドキュメンタリー映画を創ることになったのか、彼が、如何に今日に至る映像制作者になったかという話を、UHB後藤一也（注・参照）プロデューサーが進行役となって、インタビュー形式で解き明かしていく時間は、スリリングなものだった。それが後藤の狙いだったのかもしれない。

森は「この企画はテレビ番組にはできない」とCXから言われ、所属していた共同テレビを辞して、麻原逮捕後のオウム教団広報部の荒木浩に密着し、教団内部に潜入していった映像記録が映画「A」であった。森の「教団内部に入った自分が凄いというよりもメディアが当時、みな機能不全に陥っていた」という言葉は、同時代の者としては複雑であったが、若い制作者の声は新鮮であった。森本人も「当時テレビ局に断られた企画を、今テレビ局内で、若手制作者と一緒に見ているように、25年余りでいろんなことが変わった。」と感慨深く語ったように、デジタル時代、SNS時代のなかの放送の現在地がそこに寄しくも露われたのだ。

○取材を自ら規制したのは組織メディアであったと思っているという話に、改めて、自分の頭で考えるという基本を大切にしなくてはと思った。○疑似的な被害者意識そして異分子を差別することで安心感を得ようとする社会構造が、当時も今もあるのではないか。○旭川の女子高校生殺人、江別大学生暴行死等と集団化による凄惨なニュースに心を痛めていましたが、森監督の話は、大変参考になった。○NHKでは挑戦的な枠が、減ってきていますが、森さんのように勝負しきたお話を間近で伺えたことは刺激的でした。等々…。

すっかり世間ずれした筆者には、番組枠も減り、あらかじめ失われた現在の彼らの「それでもなお」の意欲には、「これからの放送」を見ている者たちの今日的な覚悟のようなものを感じたが、それは私だけだったろうか。映画「A」は、テレビがダメなら映画として発信するという、TVドキュメンタリーを映画で発信する先駆けのような作品でもあったわけで、ゲストとして森を招聘したUHB後藤の狙いは、若い制作者の意欲を見事に共鳴させ会場の温度をあげることになった。

ワークショップ後半は、後藤君の後輩記者（20代後半）が、ニュース番組で放送した「知的障害者の就活問題」を取り上げたリポートを題材に、他局の同世代の記者やカメラマンが、パネラーとして加わり、森監督を巻き込んだ形で「ニュース企画をどうしたらドキュメンタリーにできるか?」という実践的なテーマで活発な質疑が展開した。前半とは違って、今日的な放送現場の裏側を表出する議論が印象的であった。こんなにも若手は「ものづくり」の議論に飢えていたのか、と…。

○1本のニュースの背景にあるものを掘り下げていくと、こんなにも起伏に富んだ情報が出てくるのかと圧倒されました。○同世代の記者や先輩方が特集やドキュメンタリーをつくる際にどんな視点をもち、どんな事に悩んでいのかを知ることができ、学びがありました。○NHK内でも各局でも、飲みに行って番組談義、映像談義をするのが日常茶飯事だったのが、そういう場が失われているからこそ、みなさんの熱い議論があの場で生まれたのかな、と感じました。○まずは普段からニュースだけでなく番組や映像について語るような雰囲気作りを弊社でもやらなければと思いました。

後半は徹底した聞き役に回っていた森監督は若手の問いに答えて、「ドキュメンタリーとドラマは通じるものがあるが、ニュースは別物である」と語り、「ドキュメンタリーは誰かの視点が入っており客観的なドキュメンタリーは存在しないということを自覚すべきだし、そのメディアリテラシーが、作り手も視聴者もフラットになってはいない、という現状があると認識すべきだ」と語り、客観的なニュース報道の価値にも言及していたことはSNS時代の放送報道の在り方を問いかけて、印象的だった。

「前向きにテレビに向き合っている若い制作者が札幌にいる」と感激した森を囲む若い制作者の姿が、ワークショップ後の直会の酒席にあった、と後日、後藤君から聞いた。

「置かれた場所で咲きなさい」なんて古い言葉が、後輩たちのなかにもあるとすれば、北海道も捨てたものではない、今後も応援し続けたい。

次回は、二月十五日。NHK札幌が担当局となって開催予定。

（注）98年北海道文化放送に入社。報道部記者を経て、ドキュメンタリー、ドラマ制作。「ある出所者の軌跡～浅草レッサーパンダ事件の深層」（05年演出）、「石炭奇想曲～夕張、東京、そしてベトナム」（07年演出構成）など、ドキュメンタリーで数々の受賞歴がある。ほかに、ドラマ「乃木坂46橋本奈々未の恋する文学」（16年演出P）、私、林も参加した日韓中共同制作ドキュメンタリー「About Her」（20年P）などがある。

☆　☆　☆

テレビの三択、日本は？

長井 展光

昨年は41年勤めた毎日放送を退職し、大学の教職中心にシフトしました。現役時代から10年程教えていますが、若い世代と向き合っていると「テレビ離れ」「メディアの変化」を痛感します。

「放送やめますか？」去年飛び込んできたのはイギリスの「テレビの三択」です。「①放送は技術的に高度化して存続　②放送は報道・情報などに縮小して他はネットに移行　③放送は全廃、ネットに完全移行」という選択肢です。二〇四〇年頃の移行を考え、ここ2、3年で意思決定と言われています。イギリスではテレビ放送のネット配信が進み、若年層以外でも「テレビ番組をネットで見る」ことが一般化していることが前提にあります。毎年、欧州の放送のコンベンションに行くのですが、ネット配信が進み、放送ビジネスもそれを織り込んで展開していることを痛感します。スイスではすでに二〇一九年には地上波のテレビ放送は終了し、衛星、ケーブル、ネット配信に移行しました。「地上波廃止」でも、放送局はニュース、番組の作り手・伝え手としての役割を担い続けています。

「日本はどうするべき？」学生たちに欧州の実情を説明して問うと、②の「放送はニュース・情報などに絞ってドラマ・エンタメは配信で」が一番支持されました。一方で「若者ほどテレビ『番組』が好き」という調査結果もあります。彼・彼女らは『番組』を配信でスマホでも見ています。「情報の信頼性」「プロが作ったクオリティの高さ」「世の中の動きがわかる」などが理由です。フェイクニュースが横行し、分断への危惧が高まる時代を生きるこの世代の「肌感覚」なような気がします。

「信頼される情報を伝える」「見ごたえのある番組を作る」。これは伝送路がどう変化しても放送局が果たさなくてはならない役割でしょう。勿論、老若男女、あまねく層、地域に最適な手段で届けることも大事です。今後もそんな視点で放送を見守り続けていきたいと思います。

☆　☆　☆

お先真っ暗、日本の人口減少

加藤 滋紀

新年早々、憂鬱な話で恐縮です。

私は暮れから正月にかけて、2冊の中公新書を読んだ。1冊目は二〇一四年に出版された増田寛也編著「地方消滅～東京一極集中が招く人口急減」。もう1冊は、その10年後の昨年に続編のような形で出版された人口戦略会議編著「地方消滅2～加速する少子化と新たな人口ビジョン」である。前者によると、二〇一〇年に一億二八〇六万人であった日本の総人口は、今世紀末の二一〇〇年には四九五九万人に急減し、首都圏への人口移動が止まらなければ、全国の自治体の約半数が消滅しかねないという。そして、後者の本では、この10年間の取り組みは極めて弱く、危機は迫っているとした上で、二一〇〇年に向けての数値目標を掲げ、人口ビジョン2100「安定的で、成長力のある『8000万人国家』へ」を提言して、官民挙げての取り組みを促している。

その目標を達成するには、並々ならぬ努力が必要である。今は、夫が企業戦士として外で働き、妻が専業主婦として子育てに専念する時代ではない。女性が働きながら結婚し、出産し、子育てし、そして職場でキャリア形成するには、あまりにも環境が整っていない。

政治の課題となっている「一〇八万円の壁」を廃止する案や「高校授業料無償化」なども、人口減少を止めるのに少しはプラスになると思うが、そうした個々の政策にとらわれるのではなく、福祉、経済、労働、教育等々のすべての制度を点検し、「若者や女性が希望を持てる環境づくり」に繋げてもらいたい。また、放送人や新聞・雑誌などのマスコミも世論形成に大きな役割を果たすよう期待したい。

こうした問題を考えながら、私は自分の孫たちの将来が気にかかっていた。そこで、妻に孫の将来に絡めて「お先真っ暗な日本の人口問題」を話したところ、意外な反応が返ってきた。「大丈夫よ。いつも大変だ、大変だと騒ぎながら、何とか解決するのが日本だから…」この根拠のない楽観論に私は救われた。

☆　☆　☆

関容子さんのこと

永田 俊和

定年後の私の生活をまずまず豊かなものにしてくださっている一人がエッセイスト・小説家の関容子さんです。近刊の「銀座で逢ったひと」（中公文庫）は、雑誌「銀座百点」の連載で、関さんが銀座で逢った文学者・歌舞伎役者などとの思い出を綴ったもので、銀座の書店では文庫売上ナンバーワンになっています。

その関さんの多彩な人脈を生かして歌舞伎座ビル内のホール「花篭」と池上・實相寺で開かれているのが、対談イベント「関容子の逢いたい人」シリーズ。この数年でも中村歌六（歌舞伎・人間国宝）、吉田玉男（文楽・人間国宝）、桐竹勘十郎（文楽・人間国宝）、大蔵源次郎（能楽・人間国宝）、中村萬壽（歌舞伎）、横内謙介（劇作家・演出家）、高橋睦郎（俳人・詩人、文化勲章受章）、麿赤児（舞踏家・俳優）等々そうそうたる顔ぶれ。

これらの方々が語るウラ話、芸談をコンパクトなスペースで伺うのはまさに至福のひとときです。今後「花篭」では2月22日中村児太郎さん、實相寺では3月1日に文楽三味線の鶴澤燕三さんの登場が予定されています。

関さんとの出会いは約40年前、私がLF編成で広報担当の頃、関さんが「女性自身」の記者として出入りされて以来。その頃「オールナイトニッポン」の中川公夫プロデューサー（故人）と親しく、同番組スペシャル・パーソナリティとして交友関係から岩城宏之（指揮者）、桂米朝（落語家）、小松左京（作家）ら各氏を紹介いただいていました。

その後私が制作の頃には当時の松本幸四郎（先代）・中村吉右衛門の母・正子さんをモデルにした関さんの小説「おもちゃの三味線」を、松本幸四郎（当時・市川染五郎）・宮沢りえの主演でラジオドラマ化し、吉右衛門さんや中村勘三郎さんにもカメオ出演していただいています。先日の「花篭」での松本幸四郎さんとの対談でも話題になり、関さんの小説作りのウラ話も飛び出しました。

関容子さんは、今年めでたく米寿を迎えられますが、その記憶力、会話力にはいささかの衰えも感じられません。益々お元気で、私の人生を彩り続けていただきたいと願っております。

☆　☆　☆

問われる放送人としての初心

市川 哲夫

フジテレビの不祥事に、心を傷め又、怒りを禁じえない。もちろん中居正広氏を巡る問題である。私の出身のTBSも中居氏を重用し

て来たし、同様の醜聞があったのかは知らない。しかしTBSでは、自社の女性社員の心身を傷付けるような事態はなかったと断言できる。中居氏は、出演する他局でも同様な挙に及んだのか？局の対応次第だったのではないか？放送人としての矜持を持ったプロデューサーだったら、そんな接待要求を受け容れるような愚か者などいない筈だ。

私自身、俳優諸氏との付き合いは多かったが、そんな馬鹿げた要求を受けたことなど一度もない。当たり前である。一昨年のジャニー喜多川氏の性加害問題の露見以来、テレビ界にまつわる性加害スキャンダルが報じられることが多いが、自分が生涯働いて来たテレビの世界がこんなにも、顰蹙を買う世界になるとは、情け無い限りだ。今回の事態は、バラエティ番組系の事件だが、90年代以降に生じた人気タレントへの過剰な忖度の結果としての「病理」ではないか。

放送人の会の会員諸氏は、放送人としての矜持を持ち続けて来た方々だが、今こそ現役の放送人に、もう一度放送業の初心に還って放送界を立て直して欲しいと呼びかけるべきである。一九五七年に、大宅壮一や松本清張が警告したテレビ「一億総白痴化」論が現実化することがあっては断じてならないのである。

☆　☆　☆

テレビの選挙報道に思う

石田 研一

都知事選挙での石丸現象、衆議院選挙での国民民主党の躍進、兵庫県知事選挙での不信任決議が可決された斉藤知事の当選など、最近の選挙では、SNSを駆使した選挙運動が大きな力を発揮して、SNSと新聞、テレビなどのオールドメディアとの関係が大きな話題となっている。

兵庫県知事選挙のNHKの出口調査では、投票をする際に何を最も参考したかという問いに「SNSや動画サイト」が30％で、それぞれ24％だった「新聞」と「テレビ」を上回ってトップだった。そして、「SNSや動画サイト」を最も参考した人のうち、70％以上が斉藤知事に投票したと答えている。

では、テレビや新聞はどうであったのか。オールドメディアは、もっと積極的に突っ込んだ報道をすべきだったのではないか。例えば、テレビは候補者の第一声や選挙期間中の言動だけではなく、過去の発言や行動を丁寧に報することで、どんな候補者かを有権者に伝えられなかったのか。政策の面でも、候補者同士の討論会がなくても、何らかの工夫でもっと掘り下げた報道ができなかったのか。また、テレビ報道でのファクトチェックの手法や伝え方を確立する必要があり、そのための要員も必要なのではないのか。ネットの世界でどんな課題に注目が集まっているのか、開票後の解説だけでなく、選挙期間中からもっと伝えるべきではないのか。さらに、「つばさの党」の選挙妨害や都知事選挙でのポスターの問題など、選挙期間中でも選挙運動の在り方についてもっと問題提起をする必要があったのではないか。これまでは、テレビや新聞は選挙報道の主役であったが、ネット、SNSという競争相手のあるなかで、テレビや新聞が有権者の判断にどれだけ役に立っているのか。「公平性」という原則を踏まえた上でも、まだまだやるべきことはあるように思えてならない。

☆　☆　☆

「裁判所」通い

山路 家子

2月20日15時、東京高裁判決。

≪種子法廃止は違憲訴訟≫ご注目ください。

最近、友人知人への便りに、書き添えている文言です。この裁判、一審の裁判官は、「食」の重要性が理解出来ない人でした。高裁の裁判官はどうでしょうか？

原発、リニア、外環道、農業問題etc.さまざまな訴訟の裁判応援「傍聴」に行き、痛感するのは、裁判官の「質」のことです。

年初、「いもうとの時間」という映画を観ました。一九六一年、三重県名張市で起きた「名張ぶどう酒事件」。奥西勝さん（当時35歳）が逮捕された。しかし、自白に疑問が多く、一審は無罪だった。が、二審で死刑。72年に最高裁で死刑が確定した。無罪を訴え続けた奥西さんは、二〇一五年に89歳で獄中死し、妹の岡美代子さんが再審を求めて闘ってきた。10度目の再審請求が棄却され、裁判は動きがない中、映画は妹に寄り添う。東海テレビ放送が、50年近く継続取材してきたドキュメンタリーです。再審請求できる最後の一人、妹さんは94歳。有耶無耶にしてはならない！

自白強要による冤罪事件が、袴田巌さんをはじめ、これまで、どの位あったでしょう。思うのは、警察官、検察官の「質」のことです。

そうなのです。裁判官、警察官、検察官、そして政治家も！「人権教育」を徹底しなければなりません！「裁判所」通いで痛感しています。

最後に、東海テレビ放送に敬意を表します。これからも、よろしくお願い致します。

（二〇二五年1月22日、記）

☆　☆　☆

メディアのピークは50年

三原 治

二〇二四年は選挙イヤーで、ネット社会における既成メディアの立ち位置が問われた。都知事選、衆院選、兵庫県知事選などでSNSでの発信が支持拡大につながった。SNSの勢いに対して、新聞、テレビの従来メディアの敗北が決定付けられ、「既得権益の側」という悪役にまでされてしまう有様。新聞、テレビの従来メディアが選挙中、公選法や放送法を理由に報道を抑制してきた。一方、SNSは過激な情報や不確かな情報を拡散させ、選挙では偽情報がネット上に氾濫し、選挙に影響を与えた。特に若者はネットで支持者を決める時代になっている。誤った情報を信じる人が増えれば、民主主義の基盤である選挙の機能が損なわれかねない。このままネット全盛社会へと変わっていくのか。

ネット社会は、誰でもフェイクニュースを作って拡散できる。その結果、誤報まがいのやらせのコンテンツが注目を集め政治的な影響力を持ったりする。今までのようなマスメディア中心の社会で成り立ったような倫理の仕組みが、もう機能しない水域に達している。ファクトチェックがままならない現状において、民主主義の信頼性は崩れている。

メディアの年齢について気づいたことがある。ざっくりと、映画が始まったのが一九〇〇年。テレビが一九五〇年。ネットが二〇〇〇年。テレビに勢いが出てきたころ、映画は衰退していった。テレビもネットに抜かれて元気がなくなった。メディアのピークは、50年説。旬な時期と言った方が適当か。ネットもすでに20年以上。あと25年もすれば次のメディアが出てくるのか。

新聞は150年。ラジオは100年。成長の時代を過ぎて成熟の時代へ。ネットのスピード感や便利さだけが魅力の尺度ではない。メディアの価値は、正確な情報を提供すること。インターネットは便利で人々の生活を激変させたけ

ど、それで経済成長したかというと実感はない。むしろ社会が悪くなっていく予感さえする。進歩という弊害もある。右肩上がりの経済成長も進歩という概念も考え直すときではないだろうか。資本主義は持続可能ではない。成長型の社会から循環型の社会へ移行する。成長より成熟。成長する社会より成長しない社会。拡張する社会よりも収縮する社会。加速よりも減速。スローダウンで豊かになる社会も悪くない。

☆　☆　☆

新年雑感
～放送 時代と正義感～

渡辺 紘史

年賀状に「放送開始一〇〇年にあたり、57年前にこの世界に入った私は…」と、自分のことを書き出して、ふと、ドラマプロデューサー時代、登場人物を造形するために、よく、彼らの歴史年表を作ったことを思い出した。人が、どこで育ち、どんな時代の空気を吸ったのかが、その人間のありようを決めると考えていたからだ。翻って、私自身の場合は、と考えたとき、子供の頃の記憶が時代の空気と共に甦ってきた。

一九四四年生まれ、東京から一〇〇キロ北の栃木県宇都宮市で育った私の最初の記憶は、一九四七年頃の隣家の門前の〈配給〉に大人達が群がる風景、配給された芋は農林一号というサツマイモであることを知った。続く記憶は遊びだ。〈紙芝居〉のおじさんの自転車を追いかけたこと、風呂敷を被り、物差しを手に駆け回った〈チャンバラごっこ〉、そして母親手製の布製グラブに丸太のバッドで詰め物のボールを打ち合った〈三角ベースボール〉。やがて、少年たちは、絵や写真満載の本や新聞などの活版文化、そしてレコードやラジオ放送、映画など、音声・映像メディアとの鮮烈な洗礼を受ける。ラジオの最初の記憶は、どういうわけか、「尋ね人」（＝引揚者の時間）のアナウンサーが淡々として呼びかける声であったが、夢中になったのは、放送劇とその主題歌だった。どこの家からも聞こえてきた「鐘の鳴る丘」の主題歌、それが聞こえると、子供たちは遊びをやめて家に帰った。「三太物語」の「おらぁ、三太だ！」のキャッチセリフは、今も耳に残る。進駐軍の規制が終わり、時代劇が解禁され始まった新諸国物語「笛吹童子」は、すぐ映画化され、中村錦之助、東千代之助といったヒーローを生む。その東映時代劇を、私は満員の映画館で立って観たものである。のちに、「スクリーンミュージック」という番組で映画音楽に夢中になり、「鉄道員」と「朝な夕なに」のドーナツ盤が、私が最初に買ったレコードとなった。

戦前の強制的で灰色一色の情報環境から一転、自由でカラフルな百花斉放ともいえるメディアの奔流を浴びたのは、私たち世代にとって幸せだったと、今思う。この時代の空気は、放送局に入り、少年ドラマをスタートに、ドラマの世界に踏み込んだ私の過去から現在に、間違いなくつながっているのだ。ちなみに、良し悪しは別にして私の作品で今でも好きなものは、少年少女を主人公としたドラマ、そして時代劇だ。そして、その主人公達は、皆、誰より他人（ひと）の幸せを願う、正義感の持ち主であり、その私の好みは、間違いなく一九四〇年代末から五〇年代前半にかけてのあの時代の空気の反映に違いない。そして、その空気の延長線に、日本のテレビ放送のスタートがあったということは、よく知られた事実でもある。

さて、二〇二五年、韓国大統領の逮捕、パレスティナの停戦など激動の中で、1月20日、ドナルド・トランプがアメリカ大統領に就任した。アメリカ第一主義（MAGA）を標榜する大統領は、SNSの過剰な使い手である。言い過ぎを承知で言えば、SNSやNETの世界は、自分第一の世界である。己の欲求や存在を承認してほしいという、自分本位の言説がまかり通る。善悪正邪の判断より、「いいね、いいね」の好きか嫌いかの判断が勝る。そのトランプに、NETメディアを牛耳るIT富豪達が、我先に媚を売る時代を迎えたのだ。他人ごとではなく、既存の放送メディアの行く末に危機感を持たざるを得ない。

私は年賀状の最後に、「放送が、信頼されるメディアとしてあり続けることを強く願う」と書いた。折しも、放送一〇〇年を意識したか、江戸時代のメディア王、蔦谷重三郎を主人公として、NHK大河ドラマ「べらぼう」が始まった。番組そのものについては、下馬評座談会に譲るとして、主人公重三郎の描き方については、大いに賛成だ。彼は、一方的に女性が搾取された吉原に生きて、決して己の幸せを主張することはせず、弱き他人（ひと）の幸せのために働く、向こう見ずな正義漢として描かれる。彼の正義は、私が育った戦後の自由でカラフルであったあの時代の空気感を思わせる。改めて、彼の出版人を放送人と置き換えるならば、放送というメディアの信頼を担保するのは、放送人ひとり一人の〈己を措いて他の幸せを願う、向こう見ずな正義感〉に他ならないと、自戒を込めて思うのだが、それは、牽強付会だろうか？

或る現役テレビ制作者からの手紙

柏木 登

私は、放送人の会の活動の一つ「放送人の証言」チームの一員に入れて頂き、放送史に残る仕事をされた先輩方のオーラル・ヒストリーを収録しています。

数多くのヒット・バラエティ番組を作ったハウフルスの菅原正豊さん、「木曜スペシャル」を舞台に「教養エンターテインメント」とでもいうジャンルを開発し、「ドミノ倒し」や「ピラミッド建設計画」「はじめてのおつかい」等、高クオリティ高視聴率という難度の高い、民放らしい番組群を作った佐藤孝吉さん、箱根駅伝の完全中継をやってのけ、高校サッカーや世界陸上のスポーツ中継のひな形を完成させた坂田信久さん等々。聞き手の準備によって収録内容の出来が違うと肝に銘じ、打合せや資料にあたるなど…時間をかけて臨んでいます。その都度「学び」があり、知っていた筈の出来事の裏側や真実を知る醍醐味もあり、やりがいを感じています。今は、九一歳の現役声優・羽佐間道夫さん収録の準備中。羽佐間さんには、昔のラジオドラマのウラ話や、テレビ草創期の海外映画等の吹き替え事情などを中心に伺う予定です。

証言チームは、工藤英博チーフと会員有志が定期的に集まって議論をしながら取材対象を推薦し、併せて番組について語り合っています。

そんな時、旧知の後輩制作者から手紙が届きました。会員を辞めようと思うというのです。その手紙にはこんなことが記してありました。

「退会を考える一番の理由は、無力感です。会報に載る座談会は非常に的を射ているのですが、現役世代への叱咤激励と受け止めつつ、

先輩からのお説教として苦しく感じることも多いのです。日本のテレビ番組にはもっと批評精神が必要だとは思っているのですが…。近年、制作環境は厳しくなっていると実感しています。予算は少ない、コンプライアンスは厳しい。働き方改革と言いながら、実際は時間が足りないので、悪いことをしている様にコソコソ働く。加えてＳＮＳでの展開も現場の仕事なので、仕事量は増えるばかり。八方塞がりです。番組批評と同様に、環境整備のために何が出来るのか等を考えるべきだという気もしますが、自分にその余裕もなく、ますます無力感を覚える…そんな気持ちのスパイラルです。会のメンバーとして何をすべきか見つけられず、何の役にも立っていない自分が情けないのです。」

理事会で、放送人の会の会員が漸減しているという危機感が語られています。平均年齢も年々高くなっている、若い会員をどうすれば増やせるか…と。「日中韓の制作者交流会」が行われなくなってから、一般の会員が参加出来る催しが少なくなってしまいました。放送人の会が今後どうあるべきか、この手紙からも、私たちは問いかけられています。

☆　☆　☆

元放送人いま YouTuber

大浦　勝

フジテレビ系列テレビ長崎を退職して始めた YouTube チャンネル「まさるの大旅小旅」。2年半で91本の動画を発信、総視聴回数95万。チャンネル登録数三三〇〇人。収益は多い時は9万円ほど。YouTube はチャンネル登録数が一〇〇〇人を超えると、再生回数に応じ月額で収益が出るシステムでテレビと同様に途中にＣＭが入る。最初の1年間はチャンネル登録が中々増えなかった。誰もがやっているような旅ものや店巡り、趣味などを発信した。おじさんの顔出しや喋りでは見て貰えなかった。

原点に帰って放送人時代に培ったドキュメンタリー系に路線変更。すると瞬く間に難関一〇〇〇人を超えた。地方で地道に生きる漁師にスポット当てる「海に生きる」を月1でアップした。アジの一本釣りやタコ壺漁の漁船に一日乗船、普段口にしている魚がどのようにして獲られているのかを密着取材し生き様を描いた。16分位に編集しナレーションは自前で入れる。中でも「36歳女性漁師応援ドキュメント」は25万回再生、全国から感想コメントが沢山来た。出身局のニュースの特集に月1でYouTube の短縮版「海に生きる」を1年ほど寄稿した。

年末には2年がかりで制作したドキュメンタリー映画「風待ちの島 Cabexima（かばしま）」という69分の長尺を YouTube にアップした。ポルトガルの古い地図にも記載がある樺島という小さな島の1年を描いた作品だ。ラストには「公民館や映画館で上映しませんか」とテロップを入れた。予想より多く再生され1カ月経って2.5万回以上、コメントも一杯来た。年齢、性別、国などどんな人がどのように見ているかも簡単に分析が出来る。それなりの収益も得られる。放送局とは全く規模は違うが一人で気ままに番組を作り全国、海外にも発信出来るのはYouTube の魅力だ。

今年の構想は高橋治という千葉県出身の小説家が41年前、長崎の小さな漁港で暮らす老漁師と巨大魚の物語を描き直木賞を受賞した「秘伝」という小説を映像化すること！ 地上波放送の行く末を案じる元放送人いま孤独の YouTuber の近況でした。

☆　☆　☆

放送人句会
2月に第百回を迎える

句会幹事　深尾一化（隆一）

放送人句会とは

「放送人の会」のイベントとして、二〇〇七年3月に評論家故松尾羊一氏の呼びかけで始められた句会です。月1回赤坂の居酒屋「麦屋」の別館「納屋」で行われ、今年2月に目出たく一〇〇回を迎えます。

草創期の顔ぶれには当時の熱気が感じられ、放送人ならではの映像的表現・色彩感覚・俳諧味にあふれた内容は、選者・講師として長くご指導頂いた俳人星野高士師をも唸らせるものでした。何句かご紹介しましょう。

第一回（二〇〇七年3月27日）

青き踏む磯辺に細き女下駄　　とんこう
春雨や背中丸めて五十肩　　勝美
青き踏むシャボンの匂ふ少女消ゆ　　もとを
訳ありの二人春雨傘のうち　　阿舟

「とんこう」演出家の故堀川とんこうさん
「勝美」演出家の故大山勝美さん
「もとを」プロデューサーの故新村もとをさん、
「阿舟」プロデューサーの故西川章さん

いずれもドラマのワンシーンそのもので、放送人の感性で捉えられた世界が鮮やかにみとれます。

参加は会員を中心に様々なジャンルから多岐にわたっています。

第五回（二〇〇七年11月13日）

駅前で落ち葉絡まる「町の声」　　馬笑
女優二人背を丸め来るロケ焚火　　きよし
拾われてなお身を糺す落葉かな　　冠

第七回（二〇〇八年3月12日）

雛飾る老いたる妻はなぜ囃ぐ　　馬笑
手のひらに嬰の尻あり雛の春　　康夫

「馬笑」評論家の故松尾羊一さん
「きよし」美術製作者の橋本潔さん
「冠」演出家の石橋冠さん
「康夫」映画監督の故鶴橋康夫さん

落ち葉・焚き火・雛というごく平凡な季題を得ても、情景がありありと想像出来る秀句に仕立て上げる力は流石です。

この度この成果を取りまとめて小冊子とすることを検討しています。掲載するのは、星野講師により特選をいただいた句、互選で当日の参加者が特選とした句に絞りました。全部で５００句程度を予定しています。

現在句会の顔ぶれは7人で、隔月（偶数月）赤坂で行っています。会場は一回目から変わらず「麦屋」の別館「納屋」です。関心のある方は是非ご一報下さい。

☆　☆　☆

小さな"地震"の大きな"衝撃"

小川 和之

それは真夜中の出来事だった。忘れもしない昨年11月24日、午前3時半過ぎ、たまたま眠りが浅かったのか、ベッドの中で地震の揺れを感じとった。たいした揺れではなかったが有感地震に変わりがない、どこか遠くで大きな地震が発生したのかもしれないとすぐさまベッド脇のテレビを点けた。

まずNHK…何の速報も出ない、各局をザッピングしながら10分ほど探した。でも速報のテロップはどこにも流れていない。おそらく速報するほどの大きな震度の揺れではなかったのだろうと諦め、寝ようとした時、スマホのFacebookに友人の投稿メッセージが入った。「今、地震の揺れを感じたがテレビ画面にその情報が出ていない」。と同じことが書いてあった。矢張り同じ疑問をもって情報を探していた人間がいたのである。

するとその投稿に反応して、彼の友人から『出てますよ。』のリアクション。コメントに続いてYahooのリンク先のURLが張り付けてあった。

早速開いてみると、あった！

『午前3時36分ごろ、宮城県、福島県、茨城県、栃木県、千葉県、東京都、神奈川県で最大震度2を観測する地震がありました』という見出しで、当該地域の詳しい市や町名がすべて列挙されていた。

テレビ（放送）が伝えない情報を、なんとYahooがネットで流していたのである！

かつてNHKのニュースの編責（生放送の編集長）をしていた経験者として大きな衝撃を受けた。

確かに私が報道局でニュースを担当していたころ、速報するのは震度3以上の地震。震度2以下であれば自動的に速報は流れない。今回の事例もそうなんだと思う。

しかし待てよ、少なくとも真夜中の深い時間帯にも拘らず、3人の人間が地震情報を得ようとテレビをチェックしていた。しかもそれに答えたのは放送でなくネットだった！ただでさえネットで情報を求める人たちが増えているデジタル時代，テレビが、放送が、ネット情報に主役を奪われそうな危機の中で起こったこの事実は、報道の道を歩んできた人間にとって小さな地震情報が大きな衝撃となっていまだに残っている。

ただ一つの救いは，Yahooのネットの情報源がTBS NEWS DIGという放送局発信のネット情報だったことだが、英国のBBCはごく近い将来情報発信の主力をネットに変えようと議論を進めているという。〝民業圧迫〟などと言っている場合ではない。大丈夫か、日本の放送局。ますます心配になってきた。

☆　☆　☆

第20回「ラジオ聞き酒の会」開催報告

ラジオプロジェクト　田中 秋夫

「放送人の会・ラジオプロジェクト」が定期的に開催している「ラジオ聞き酒の会」は10月9日に第20回を迎え、文化放送の会議室でラジオプロジェクトメンバー9人と同番組制作者の関根英生氏（QR）の10名の参加者で開催された。

テーマに取り上げたのは**特別番組「戦後79年スペシャル（反骨の、漫才モレスク）（24年8月9日20時～21時放送）**

文化放送はこれまで毎年のように8月の終戦記念日の時期に、詩人のアーサービナード氏による戦後誰も語り継いでこなかった「封印された真実」を発掘する企画を放送し、放送関連の各賞を受賞してきたが、今年は上記タイトルで、検閲厳しい戦時下の大衆演芸の世界を振り返る。

昭和に入り軍部の発言力が強くなり、あらゆる分野に規制がかかりはじめ、新聞やラジオといったメディア、映画や小説、雑誌はもちろん、紙芝居や流行歌までが「国家総動員」のプロパガンダとして利用され、さらにその潮流が演芸の領域にまで及び、落語、浪曲、講談等大衆娯楽の世界にも大日本帝国の思想が色濃く反映されるようになる。日に日に息苦しくなる世相の中、2人の落語家による漫才コンビ「リーガル千太・万吉」がデビュー。国家統制が厳しい中、この2人は世相や戦争に対するシニカルな批判を取り入れたギリギリのネタ、スレスレの台本による軽妙な掛け合いで「笑い」を提供した。

この番組では当時のSP盤から「国策歌謡」ともいうべき流行歌や「愛国浪曲」「国策落語」など各ジャンルのプロパガンダ音源をオンエア。

リーガル千太・万吉の「朗らかな兵隊」シリーズをとりあげて、彼らの時代に対する反骨心と芸人魂を感じさせる作品を紹介している。

参加者は「検閲厳しい戦時下でどのように反骨精神を貫き、笑いを取ったのか」に興味深々で聞き入っていた。その後、浜松町の居酒屋に移動して恒例の「利き酒の会」を開催、話に花が咲いた。

放送人グランプリ2025
投票締め切りは、
3月7日(金)です。

下馬評を読む前に

会報編集長　菅野 高至

下馬評座談会は、フジテレビ問題が揺れ動く中で、1月25日（土）に開催されました。座談会で語られた内容を的確に把握していただくために、25日以前と以降の経緯を時系列で振り返ります。

芸能人のスキャンダルから放送局のガバナンスの問題へ、どんな動きがあったのか、記憶と記録に残します。

【時系列一覧】

- 23年5月：社員Aが女性に声を掛け、中居氏の所有のマンションで行われたBBQに参加。
- 23年6月：食事会で事案発生。
  ある社員が女性から事案を聞く。フジ側、女性の意思を尊重し、情報漏洩防止を優先。
- 23年7月：中居氏から社員に連絡があり、女性とは認識が違うことが発覚。
- 23年8月：事案について港社長へ報告がいく。

～～☆～～☆～～

- 24年12月19日：「女性セブン」が中居氏の女性トラブルと巨額解決金を報道。
- 24年12月25日：「週刊文春」中居氏に「意に沿わない性的行為」を報道。
- 24年12月27日：フジ、食事会の設定・突然欠席の事実否定。中居氏、有料会員サイトでコメント「真摯に、懸命に取り組んでおります」
- 25年1月7日：日テレ系『ザ！世界仰天ニュース』中居氏の出演シーンカット
- 25年1月8日：フジ『だれかtoなかい』放送休止、ほか4番組も（ニッポン放送、TBS系2番組、テレビ朝日系）休止や見送り。
- 25年1月9日：中居氏、騒動を謝罪・示談成立認める。示談成立により「今後の芸能活動

についても支障なく続けられる」

・25年1月14日：米ファンド、フジに第三者委設置を要求。

・25年1月15日：日本テレビ「仰天ニュース」中居氏、降板。

・25年1月17日：港浩一社長が、ウェブや週刊誌の禁止、中継・動画禁止の定例会見、「第三者の弁護士を中心とする調査委員会」「回答は控えさせていただく」などを繰り返し、ネット上で大炎上。

・25年1月18日：トヨタなど大手企業がフジのCM差し止め。

・25年1月20日：CM撤退50社超え。TBS「金スマ」の打ち切りと「THE MC3」は降板。

・25年1月21日：ニッポン放送「中居正広ON&ON AIR」打ち切り。

・25年1月22日：フジ「だれかtoなかい」、テレ朝「中居正広の土曜日な会」放送終了。中居氏の全レギュラー出演番組がなくなる。

・25年1月23日：中居氏が「芸能活動を引退」を発表。フジ、港社長と嘉納修治会長による社員説明会を実施。本来は取材NG。日本テレビ系『newszero』関係者の証言をもとに説明会の様子を報道。

・25年1月24日：2度目の「仕切り直し」会見の日程発表。

・25年1月27日：フジテレビ社長と会長の辞任。28日付で新社長に清水賢治（FMH専務取締役）が就任。

2度目の記者会見は、午後4時から翌28日午前2時半前の約10時間半にも及ぶ。

事実関係の認定は日弁連が策定したガイドラインに沿った第三者委員会によるとした。

・25年1月28日：「週刊文春」は、「被害女性を誘ったのは中居本人」、フジテレビ社員Aは関わっていない、と訂正。

放送人グランプリ下馬評座談会

恒例の下馬評座談会をお届けします。いつものように、文頭のA、B、C、Dとあるのは段落記号のようなもので、特定の発言者を示すものではありません。グランプリのノミネートの参考にしてください。**投票の締め切りは、3月7日(金)です。**

司会　いつも通り、24年度下期の感想、感慨などを。

A　ローカル代表でみているが、地方のドキュメンタリー枠が減少して、放送の場がないので、正直、推奨できる人と作品はない。

B　性加害のタレントと放送局の責任。中居くんとフジテレビの責任。放送一〇〇年なのに、フジテレビが〈放送〉を終わらせるのか？

C　始まったばかりの大河だけど、性産業の吉原を舞台に選んで、果たして勝算はあるのかしら？　遊郭の吉原は全く過去の舞台では無く、今でも性売買がある場所が現存する。単発ならともかく。

D　大河でいえば、昨年の**「光る君へ」**はチャレンジングでよかった。だけど、一昨年が徳川家康で、来年はまた豊臣秀吉、結局、武士と合戦と男に戻るのか。

A　ドラマは豊作だった。この1年、すごくいいドラマが多かった。

B　上半期はNHKの中国語放送の問題。下半期は誰しも思う、フジテレビの問題。

ニュース報道番組からバラエティーに至るテレビ業界、放送業界全体を揺るがすような問題が奇しくも放送百年という節目の年に起こった。これは、私たちが「放送をちゃんとしていかなければならない」という思いを強めていかないと危ないと感じます。放送メディア全体の危機です。

C　この1年、一番大きな問題は「選挙とSNS」。テレビラジオというマスメディア側から言うと、今のメディアは信用されていないのです。これは相当ちゃんと考えなきゃいけない。SNSの情報を規制するのは違う方向だと思う。だからと言って、無責任な発言がいいというわけじゃない。

D　いろんな人がいろんな発言手段を持つのを否定するべきではない。そこでマスメディアはどうするのかを考えていく必要がある。今年の放送を巡る一番大きい論点だと思う。

A　日テレ系の4社、福岡・札幌・名古屋・大阪が持ち株会社を持つという経営統合的な動きがあって、これは民放の産業構造の再編に繋がるぐらいの影響がある。各系列がどういう経営戦略をとるか、フジテレビにも関係してくるでしょう。

今年の夏から秋にかけてウオッチしていこうと思っています。

B　フジテレビの問題はまだ解決してないが、放送を作る立場として、「放送人という制作する主体をどう考えるか」が問われている。つまり、自分はテレビを作っている業界人だという考え方はあるけれど、テレビを作る1人の制作者としての放送人という意識が、本当にこれでいいのかが問われている。

C　もう一つ。「報道する」会社、「放送」の会社が1月17日にクローズドな記者会見をしたこと。港社長は「記者会加盟社」のみの参加で、テレビの中継や動画撮影を禁止した〝定例会見〟を開いてしまうことに、驚くべき意識の欠如がある。いつの間にか放送局であること、放送人が放送を作っているという意識が本当に欠落してきている。危機感を感じました。

D　だから放送人の会としては、書生論っぽく言うと、「原則として放送とはこうあるべきだったのではないか」、「私は、現在はこういう立場で、こういう考えのもとで放送を作る」ということを、やはりもう1回頭で考えるべきだと思う。

A　関西から。奇しくも、その1月17日は阪神・淡路大震災から30年でした。いろんな番組を関西各局は作りました。今回は、昨年4月に「関西民放NHK連携プロジェクト」が立ち上がりました。参加は、朝日放送テレビ・毎日放送・関西テレビ・読売テレビ・テレビ大阪・サンテレビ・NHK大阪。「放送文化基金50周年事業」と位置づけた放送文化基金とNEP大阪が協賛しました。

B　一昨年ぐらいから走り始めて、若手の記者、ディレクター、カメラマンの勉強会を5回開催しました。実際に体験した先輩たちから話を聞いたり、ドキュメンタリー映像作家や研究者を招いて、「震災30年をどう伝えるか」

を話し合い、活発な意見交換を重ねる。

C　それから共同で、統一のロゴを作り、アナウンサーも共演で各局出てきてディスカッションする番組**「阪神・淡路大震災30年 守りたい、だから伝える」**をNHKG（関西、中部、徳島県地方）で放送しました。

D　昨年は東南海トラフが警戒しなきゃいけない事態になってきて、これからも災害報道は続けていくのは当然で、実際に今後の取材にどう生かしていくか、若手中心に研修ができたのは非常に良かったと思っています。

（石橋映里）

A　まだ動いているが、フジテレビについて。まず、第1に、展開が早い。中居さんが「示談が成立したことにより、今後の芸能活動についても支障なく続けられることになりました」と発表したのは1月9日です。それが、わずか2週間後の23日にはもう引退です。

B　フジテレビが集中砲火を浴びるクローズの記者会見は17日です。1週間も経たないうちに、スポンサーが雪崩を打って降りてしまう。今日25日の千葉県版を見たら、千葉県庁が週末に5分の番組を提供している、そこで『提供：千葉県』のクレジットをやめてくれと言う。雪崩を打って、もう止まらない。

C　今フジテレビが消防署を舞台にしたドラマ**「119 エマージェンシーコール」**がある。『協力：横浜市消防局』ですが、どうなるのか。現場は大変でしょうね。営業、それから編成、制作、取材も。フジテレビと言って取材に出て、今まで通りの取材ができるかどうか…。

D　かつてない事態です。このスピード感はすごい、流れを読み間違えて、あっという間に燃え盛ると、とんでもないことになる。

　かつて、盤石と思われていたNHKの海老沢会長が退陣する場合には4、5か月かかっている。

A　昔と何が違うのかというと、一つは視聴者の声。SNSでいろんな形で拡散して、企業の宣伝担当者が見る。

　もう一つは、ビジネスと人権を巡る国際的な潮流の変化です。SDGs。国連の『ビジネスと人権に関する指導原則』を無視できなくなっている。

B　これほど雪崩を打つのが、どうなのかの議論はあるが、スポンサー、経済界の動きを見てると、日本経団連の今の会長社とこれからの会長社（トヨタと日本生命）が動いたら、もう他も右へ流れでCMを控える。

C　最初は中居正広問題だった。あの不手際な会見で、あっという間にフジテレビ問題になる。各局、中居さんのレギュラー番組をいろいろやっていたから、影響を受ける。

D　今後はフジテレビ問題にとどまらない、記者会見で記者に問われた村上総務大臣と林官房長官が発言している。遠藤龍之介民放連会長は「これは民放全体の信頼感を問われる事態だと」と発言。個別のフジテレビの問題ではなくなってきている。

A　今後、予想されるのが永田町です。霞が関の総務省が監督官庁として発言しているが、永田町が与野党含めてこの問題に手突っ込んでくる。これだけ関心を集めている話に、国会の先生方が与野党スルーするわけがないです。総務省、政界の介入的な動きも覚悟して置いた方がいい。

B　フジテレビ問題でありながら、最早、民放の問題になっている、各局が「内部調査」を始めると言っています。

C　NHKは今回、やけに張り切って7時のニュース、9時のニュースでやっている。ところが、これもブーメラン効果で、そういうあなたはジャニーズ問題で第三者委員会を作らなかったのに、社会部記者の70万円の使い込みについて第三者委員会を作った、NHKのこの対応は何なんですか、というブーメランもある。民放の問題からテレビの問題に波及する…。

D　23日の「社員説明会」をきっかけに現場から動きが出てきた。唖然としたのはこの1週間で組合が80人だったのが500人を超えている。一三〇〇人いて80人の組合員というのも愕然としたが、そのぐらい弱かったフジテレビの組合が500人に増えている。現場ももう黙っていられないということです。

A　24日、「仕切り直しの会見」を月曜日27日開くと発表したから、トップの進退をある程度仄めかさざるを得ないでしょうね。今、組合も正式に日枝さんも含めた執行部の一掃、総退陣を要求している。調査報告書が3月末に出るわけですが、ドンの日枝さんのとこまでいくでしょうね。

B　その「弁護士による」調査報告書では、公正さが保証されないと、大問題になっている。日弁連が策定したガイドラインに沿った「第三者委員会の調査」ではないのだから、やる意味が無い、と。

C　危機管理で言うと、頼るべきプロがいないのか、対応があまりに素人過ぎる。明らかに逃げを打っている。現場の社員が可哀相だ。

D　サンケイグループ全体では不動産業で儲かっている。フジテレビが経営危機に陥っても響かない。それでも、4月期首の番組が今セールスの時期だから大変だ。

A　放送百年の初めに、民放でこれだけの規模の問題が起きたのは、すごくシンボリックだ。経営の問題だけではなく、民放のビジネスモデルの根幹に関わる。現場のありようと、現場とトップのありよう、いろんな要素が含まれている。

（岡室実奈子）

B　昨年のNHKの国際放送の問題ですが、BPO放送倫理検証委員会が取り上げず、審議入りしなかった。つまりスルーしたんです。理由がよくわからないんです。明らかに国際放送のニュース番組の問題で、NHK自体が国際放送基準に違反していると認めているんです。

C　BPOは番組について、放送倫理違反があるかどうか、人権に反しているかどうかを審議します。それぞれの番組基準に反している場合には、放送倫理違反の根拠となる、これがBPOの判断の基準です。明かな違反なのに、なぜ審議入りしないのか？

D　もう一つ、事故対応が的確でない場合には審議入りする、これがBPOの判断基準で

す。事実関係の把握が二転三転して、事故対応がなってないんです。視聴者に対するお詫びも、事故から二、三週間経っている。その前に国会に呼ばれて「ご免なさい」と言っているが、視聴者に対しては全部終わってから謝っている。

A　事故対応ならぬ、事後対応。

B　ここも条件を満たしているのに、なぜ審議入りしないのか？

C　NHK経営委員会の議事録開示の問題。NHKが他社に先駆けてかんぽ報道（※1）をしたにもかかわらず、経営委員会で、3月に辞めた前の経営委員長、森下俊三氏が「取材を極めて稚拙」と述べ、当時のNHK会長・上田良一氏を「ガバナンス強化」名目で厳重注意したため、その後の第2弾第3弾の報道がストップした。

※1：二〇一八年4月24日、NHKは「クローズアップ現代±」で、『郵便局員がかんぽ生命保険を不適切な営業で販売していた』と報道した。

D　21年6月、市民ら約100人がNHKと森下氏を相手取り、厳重注意の経緯が分かる経営委の議事録の開示などを求め、東京地裁に提訴した。24年2月一審は勝訴したが、NHKと森下氏が控訴した。12月17日、東京高裁で和解が成立した。和解の内容は二つ。一つは議事録の開示（※2）と二つは原告に解決金98万円を支払う。

※2：NHKが削除したと主張していた録音データの存在を認め、開示を認めた。開示した議事録はデータを文字に起こしたもの。

A　原告からみると全面勝訴です。NHK出身の長井暁（さとる）さんが事務局長を務めていますが、市民たちが手弁当で3年半も大NHKと大NHKの前経営委員長を相手に闘ったんです。これは非常に大きい。

B　NHKの経営委のHPに〝開示された議事録〟があがっている。それを読みましたが、まあ酷いです。ヤクザの脅しです。委員長と司会の石原さん、品位のかけらも無い。報道の自由を侵す、いかに悲惨な行為が行われていたかがよくわかります。

C　ラジオの頑張っている長寿番組を2つ紹介します。一つは終わってしまった**「新日曜名作座**」。西西田敏行さんが亡くなって、そのまま終わるのが非常に残念です。相方の竹下景子さんは紅白でも西田さんのお話をずっとなさっていましたね。

D　森繁さん以来の伝統のある番組、何かうまいことできないのでしょうか、第1放送がどうなるかということもありますが…。名作座のような「言葉を豊かにする」ラジオ放送は非常にいいなという思いがあります。

A　**「森本毅郎・スタンバイ」**が11月に9千回になった。12月30日に詩人の荒川洋治さんと対談があった。言葉を豊かに操る人が2人出てきて、文学や言葉、ラジオ放送についてじっくりと話す対談でした。こういう放送はなかなかないものですから、改めてちゃんと放送しないといけないなと思いました。

B　ラジオで言うと、首都圏の個人聴取率です。4社横並びの時代が続いて、TOKYO FM、ニッポン放送、文化放送、付け足せばTBSラジオもそんなに落ちたわけじゃなかった。それが10月だけかもしれないけど、TOKYO FMが0.1％という低い戦いなんですけど、ちょっと一歩抜きん出た。

C　全局のセットインユースでは、前年度調査から0.1％増えて、4.1％になった。局別の数字では、TFM0.6％、J-WAVE0.5％、ニッポン放送は0.5％、TBSラジオ0.4％などで、数字的にはFM転換じゃないけれども時代はFMの方に動いているようだ。

D　ラジオもオンタイムで聴かれなくなってきた。Radiko（ラジコ）15年、15年経って定着している。若い子たちは大体スマホとかパソコンでradikoを聴きます。radikoの中でもポッドキャストという既存の番組じゃない番組もあって、ラジオそのものが変わってきている。

A　先日のアメリカのニュースで、一時的にTikTokが停止されたときに、TikTokへビーユーザーの、若い女性が「私にとって全ての情報手段が失われた」と怒っていた。テレビも新聞も見ないのだ。

B　そういう人たちが増えてきて、それがアメリカの大統領選挙にもあって、兵庫県知事の選挙にもあって、次第に放送の信頼性が失われる…。

やがてというか、いつの間にか、SNSが情報を収集をする全てだと思う世代がやって来て、大きな塊になっている。先ほど論点にも繋がって、放送メディアの〝曲がり角の1年〟だったのではないかと思います。

C　去年、象徴的だった出来事は、上期の宮藤官九郎さんの**「不適切にもほどがある！」**の評価が真っ二つに別れたことです。少し上の世代の人たちは喜んで面白く見たが、若い世代の人たちが「自分たちが築き上げてきたコンプライアンスを冷笑している！」と、厳しく批判をしたんです。

D　エンディングの「寛容になりましょう」という歌が、若い世代には「ハラスメントを容認しましょう」というメッセージに聞こえてしまったのです。今まで、いい番組を作れば、世代の分断を乗り越えられると思っていたけれど、もう、そうではないというのがよくわかった出来事でした。

A　コンプライアンスが100％正しく、そこに寛容が入ってくる余地はない…。

B　「寛容と忍耐」と池田勇人が言った昭和の36年は、安保の翌年一九六一年。大昔だね（笑い）。

C　地上波ドラマが貧しくなる…。

（木原毅）

D　去年の今頃、漫画の原作者が亡くなる事件があって、脚本家の団体がすごいバッシングされて大炎上になって、それから1年後に

新しくシンポジウムを立ち上げようというとき、またこのフジテレビ問題が出てきてしまって、テーマと座組をどうしよう、どうしよう！…です。

A　要はXの収益化が問題なわけで、誰かと何かを叩けば「いいね」で儲かる。

B　そこに、画像や写真、動画の切り抜きが定着して、だれもが言いたいことを発信する。

C　Xは拡散性が高いSNSだから、拡散でフォロワー数を短期間で増やそうと、過激な内容を投稿する、炎上のリスク覚悟というかインフルエンサーが次の炎上を探して動き回る。

D　フジテレビ問題がスポンサー総引き上げみたいに、一気に流れたのもSNSだけど、ドラマ自体がSNSを利用している。どのドラマも視聴者を呼び込むために、俳優のスタジオ写真、オフショット、ネタバレの小咄、制作者たちの発信、次回予告etc.

A　SNSとの、ある種の共犯関係だ。NHKでは、顕著になったのは二〇一三年前期「あまちゃん」からじゃないですかね。

B　それこそ放送を見なくても、ストーリーはわかるし、評判もわかる、見た感じにもなる。

C　「#反省会」でバッシングすれば、お金も稼げる…いやはや、絶望的。

（矢島良彰）

D　ATPの新年懇親会があって、そこで呟かれた言葉が「成約率NHK0.3％」だった。NHKは25年度の特集提案を募集して、大体年末にその結果が出ます。どこから出た数字かよくわからないが、特集提案で成約した番組のパーセンテージが0.3％という数字を、期せずして3人から聞いたんです。千本企画を出して、3本採択されたということなんですね。この数字の信憑性は私も確認していないから定かではないが、結構、制作会社の間で一人歩きしている数字なんです。

A　暮れから、いろんな制作会社から非常に厳しいと聞いていました。これはNHKのラジオとテレビBSの1波削減の影響です。

B　もう一昨年ですか、NHKのラジオとテレビBS 1波削減の計画に、放送人の会も意見を出しました、去年も11月に前川さん中心に経営計画の意見も出しました。（※1）放送人の会だけじゃなく、他の団体や会社も意見を出した筈ですが、ほとんど無視されて、今の制作会社を取り巻く状況になっている。

C　NHKの経営方針の中にコンテンツ産業を育成するという項目があった。かつてはBBCに倣って、全番組の25％を外注化する経営方針を掲げたこともあった。最近は、それが経営方針の中に入っていない。（※2）なんで入っていないのかを聞いたら「実態として達成されないから」との返事だった。今それが実際、何％になっているか、確かめようもないわけです。

※1：本号　39頁参照。

※2：「NHK経営計画 2024-2026」では、「情報空間全体の多元性確保への貢献」で、外部との協調・連携に『〝共存共栄〟のための外部制作比率の確保（衛星）』とある。数字は無い、「業界全体の底上げの取り組み、等」という、お題目はある。数字があるのは、メディア産業全体のために、予算規模「一〇〇億円～地域を含むメディア産業全体の多元性確保に貢献～」がある。

D　確かBBCの場合は、イギリス政府の規制のもと、BBCは外部に何％出せと指示している。NHKでは、BBCと同じような政府の規制を受けないようにと、自主的にパーセンテージを掲げて、外注比率を決めて、毎年のATPの会議の中で、総合波とBS合わせてどのぐらい、BSはどのぐらい、というような話があった…。

B　意見提出のときに、我々が危惧したことが現実になっている。

A　NHKスペシャルも含めて、さすがNHKと言われるような番組が非常に少なくなっている。だからこそ、我々は発信していく必要が大きくある。NHKに届かなくても周辺に対して「放送って本来こうあるべきじゃないか」と。

B　NHKが正式に25％を維持したことって、あったの？

C　今から7、8年前は目標値25％があった。確かBSだけで、ただ問題なのは再放送や海外からの購入も含めての25なので、制作委託だけでの25ではない。

D　そう言えば、やたら最近増えているのが再放送。平気で5、6回こする。こすった分の再放送料を制作会社に払っても、新作よりも安上がりに番組表が埋まる。我々が危惧したことが現実になっている。

A　再放送だけでなく、本放送の質が落ちている。1本あたりの制作費が落ちたからです。制作費は番組の質に直結します。酷い話です。

B　波の削減の他に、受信料を値下げして収入がかなり減ったため、局内でも番組提案の採択が厳しくなったという話は聞きます。だからおっしゃることよくわかります。

C　24年、一番に思ったのは地上波ドラマとネットのドラマのボーダレスですね。この1年ぐっと進んだと思いました。**「サンクチュアリ」**とか**「忍びの家」**とか、人材的にも、昔の地上波と変わらない、ネットフリックスもアマゾンもディズニーもみんな民放にいらした方がいて、そこで脚本家も抱え込んできている。演出もNHKも含めて、ディレクターがボーダレスになってきている。

D　そうすると、ネットは例えば1本2億ぐらい行く、地上波とは全然、桁が違う。今後、これがどうどういうふうになっていくのか？

A　NHKの経営計画に「米国ハリウッド等との本格協業による社会派ドラマ」というのがあるね。

（鈴木嘉一）

B　最近、なるほどと思った言葉がある。「アテンションデモクラシー」という言葉で、びっくりさせてワーワー騒いで、SNSを駆使して大統領になっちゃう。

C　日本の選挙とSNSで言うと、放送法の公正と中立、これはもういらないんじゃない？　選挙期間中、選挙の報道ができないな

ら、それは自分たちで「放送法はいらない！」って言った方がいいという意見がある。

D　放送法第3条の「民主主義の健全な発達に資する」ため、「情報空間の参照点」を経営計画の基軸に掲げている。

だが、選挙になると全く「選挙の報道」が止まってしまい、選挙が終わってから「参照点」を見せられる…。どうすりゃいいのさ、ここは放送法のスペシャリストに別途、教えを請いたい（笑い）。

A　フジ問題でみなさんの意見を伺っていて、怖くなったのは、「放送局の潰し方」を学習しちゃった政治家がどう出るか…これは困ったなと思いました。

B　権力が放送局に手を突っ込みやすい状況を作ってしまった…。

C　最近、テレビで一番感動したこと。トランプの大統領就任式の翌日のミサ（ワシントン国立大聖堂）で、女性のバッディ主教が説教の中で、前日の就任式の発言（※）をめぐり、トランプに「慈悲」を求めて、「LGBT（性的マイノリティー）や移民コミュニティーが恐怖を感じている…そうした人々への『慈悲』を願う」と言った。大統領が出席しているところで、たしなめちゃう人がいるのは、アメリカだね。編集無しの生中継というのがすごい、主教は生中継を意識して発信したんだろうね、世界に向けて。マリアン・エドガー・バッディ主教、覚えておこう。

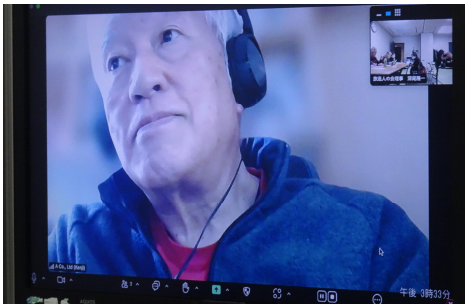
D　問題は、「フェイクの新聞は潰す」と、大統領になる前に公言しているトランプ政権に、新聞放送も含めてアメリカのメディアが、どう向き合うか、大いに注目したい。対岸の火事ではなく、我が事としてね。

※トランプは20日の就任演説で、「今日からジェンダーは二つしかない、アメリカ政府の公式方針になる。男性と女性だ」と表明。また、国内への不法移民の流入を終わらせ、数百万人の「外国人犯罪者」を強制送還すると述べた。

A　地方の放送をどうするか、放送への信頼を失墜させたフジテレビの問題は地方にとって、系列とは言え「貰い事故」のようなもので、エンタメのスキャンダルとガバナンス欠如のつけが、ニュース主体の地方の放送にも影響を与えている。

B　貰い事故とは言え、失われた信頼をどう回復するのか、「賞と信頼と放送」ということで、アメリカの地方紙の話を参考までに考えて見たい。

（林健嗣）



C　二〇一〇年代後半、アメリカもSNSによって地方紙がどんどんなくなっていると同時に、しっかり生き残っているところもある。実は18年にピューリッツア賞を取ったカリフォルニア洲オークランドの『イーストベイ・タイムズ』は、36人の犠牲者を出した倉庫の火災について、5か月にわたって火災事故の調査報道を続け、市の行政が引き起こした人災の側面があると報道して賞を受賞した。

D　ところが、受賞の知らせを受けた1週間後には、経営難から記者の解雇が始まる。しかし、実は今も会社は健在で、記者たちは安定した取材を続けている。これは地域の信頼を得て、ピューリッツア賞の優秀な記者と会社の存在は、地域で欠かせないメディアだと市民たちと地域の企業が支えているからだ。

A　今年度の放送人グランプリの選考は、「放送への信頼を回復することを目的とした選考」という特別なものになっても良いのではないか。

B　テレビ局のコンプライアンス、ガバナンスの劣化を是正するのは時間がかかるはず、そのなかで、我々が表彰するものは、それなりの使命のようなものを感じたいと思う。

C　信頼の回復は、言わば民主主義の学校である地域からしかできない。地域から、コツコツと放送の存在価値を再認識してもらえるように日々やっていくしかない。

だから、地域の良い番組づくりに、これまで以上に甘やかさず、しっかりと評価してほしい。信頼は視聴率ではなく、番組をつくる人ですから。

D　韓国の今回の尹大統領のクーデター未遂（?）で、あれだけの世論が湧いてデモが起きたとき、KBS、MBSがほとんど見られていない。SBSは今年24年度赤字に転落する。CMが無くなり、日本のフジと同じような支援対象のインターネット広告です。

A　特にKBS、まあMBSもそうですけども、お国掛かりの偏った放送メディアは見られていないのです。

B　今、彼らが見ているのはネットの「ニュース打破（タパ）」（※）です。タパは「打ち破る」という意味。支えているのは、KBS、MBS、SBSや中央日報などをやめた優秀な元放送人、元新聞人たち。国民はプロのジャーナリストを信頼している。何よりも彼らは、自ら第三者機関のファクトチェックを受け入れて透明性を担保している。

※：調査報道機関「ニュース打破（タパ）」李明博政権に批判的な報道をして左遷や解雇された公共放送の記者やプロデューサーら10人ほどが集まり、12年、YouTubeでインターネット番組を始めたのがタパの始まり。翌13年に会費（寄付）の受け皿となる非営利団体「韓国調査報道ジャーナリズムセンター（KCIJ）」を設立して、KBSを退社したキム・ヨンジンが代表に就任。

C　最近、民放の場合は途中入社でたくさん入ってきて、辞める人も結構多くなっている。そうすると、放送が好きで入ったという人じゃなくて、給料がいいからとか自己実現のために入ってくる。だから、自分の思い通りでなかったら、ネットに移るとか、辞める…。これは、やばいなと思う。

D　放送人になりたいって入るのじゃない、業界人になりたいって入る。

（三原治）

司会　番組の検討に入ります。今回の番組メモが厚くなったのは「地方発」を表彰したいと

のことで、日テレ、朝日、TBS、CX、各系列の地域のドキュメンタリーをマメに載せたためです。

A　突出した作品が少ないようだ。

B　Eテレの**「こころの時代、徹底討論・宗教と政治」**のシリーズが昨年末で9回になった。信教の自由で政教分離の原則が語られた。

C　MBSの伊佐治整D、橋本佐与子P。2人の注目作。**「労組と弾圧～関西生コン事件を考える～」**。一瞬、いつの時代の話だ！　東映のやくざ映画かと思うような組合潰しが行われる。『週刊金曜日』が記事を書いていた。

D　「笑顔で繋がるEテレ敬老ウイーク！」NHKのなんとも言えない・コピーですが、面白い番組があった。エネットという制作会社が作った**「わたしを生きる～認知症とともに歩む社会」**。フランス南西部で自治体が作った施設は、まるごと施設が「街」になっていて、認知症の人が〝住民〟として暮らす。医者看護師は普段着。「街」に行きたくなった。

A　この番組、フランスだけで1本にすればいいのに、地域で支える日本のケースが入っている。これは、企画が通りやすいということなのか…。

（八木康夫）

B　**NHKスペシャルの調査報道 新世紀**、このシリーズのいいところは新しい言葉を覚えるね。**File6の「中国・流出文書を追う」**で明かされた「認知戦」。

C　万博関連は余り多くなかったが、朝日放送テレビの**「万博～組み上げたパズルの先に～」**は他人事ながら切ない。アルメニアが初めて独自のパビリオンを出そうと頑張っていたら隣の国と戦争になって出来なくなった。振り回された日本人建築家をメインに追うドキュメント。

D　先ほどのMBS毎日放送のコンビで、**「限界ニュータウンと言われても～住民自治を生きる人々～」**。バブル期、京都と大阪の境に無許可で開発したニュータウンがバブルがはじけて業者が倒産、住民自治会が自主水道の維持管理、道路の補修をする。話の軸は、水道代10年分24万円の滞納者に対して、自治会がどう取り組むかを追う。

A　水道止めたら人権侵害だと猛反対する理事が1人いる！　関西地区のドキュメンタリーは関西弁のマジックで魅力的な会話になって人間のニュアンスがよく出ている。

B　標準語だと、そうはいかない。実際は伊佐治Dが1人で追っかけている。制作が23年9月制作、ドキュメントJの放送は24年9月。

C　**「罪の壁～危険運転致死傷罪の23年～」**福井テレビ開局55周年ドキュメンタリー。これも力作です。飲酒運転で人が死んでも、100キロ越してまっすぐ走っていれば、安全に運転できるから、過失運転致死傷罪。普通に疑問に思った武澤記者が作った、ドキュメンタリー。

D　科学の進歩（ドライブレコーダー、監視カメラなどデジタル）に対応しない、法律家の怠（長井展光）慢だと法案作成に関わった法務省の元局長が言う。

A　福井放送の青園大亮Dは横山康浩Pと組んで、テーマも幅広く外国人労働者を扱うなど、いい作品を作っている注目すべきコンビです。

B　袴田さんの冤罪に関しては何本かあるが、これ1本と言えば、SBS静岡放送でドキュメンタリーを撮っていた笠井千晶の**映画「拳と祈り－袴田巌の生涯」**が秀逸でした。ちょっと笑える姉弟愛があって素敵な作品になっていました。

C　笠井さんはすごいですよ、22年間、会社辞めたあとも追い続けている。袴田さんに再審が確定して、釈放されたその日を24時間密着して撮っている。姉のひで子さんに深く信頼されていて、釈放の情報を得て、それを撮ってくれと言われたのだ。

D　釈放されたばかりの袴田さんとお姉さん。家ではひたすら、ぐるぐる、ぐるぐる歩き回りながら、ブツブツ、ブツブツ呟いている。明日死刑が執行される恐怖が長く続いたことで精神に異常をきたしている、そんな様子を内側から撮っている。

（長井展光）

A　この映画の発端は、静岡放送時代に事件に出会って、それからずっと取材して撮りためたものを集大成した。この持続力はすごい。テレビでは袴田さんでドキュメンタリーを4本作っている。

B　長いサブタイトルが流行るなかで、サブタイも無い、ETV特集**「タマゴ家族」**が親子の葛藤をえがいて面白かった。養鶏場という事業の継承で、ケージ飼いの父と平飼いの息子が対立する。

C　子の心、親知らず。父に仕えて働きづめの母に楽をさせたい。手間の掛からない平飼いで家族旅行が普通に出来るようにしたい。

D　こころの時代**「いのちのドアをひらく 助産師永原郁子」**。助産師の永原は24時間対応で傷心な妊産婦の相談に応じて、赤ちゃんと母親を守る。撮影が浅見織恵、Dが松本友花里、丁寧な作りで完成度が高い。三宅民夫の語りが沁みる。

A　制作統括の鎌倉英也さん、何年やっているんだろう。テーマが多岐にわたってこ数年量産している馬力は、どこからくるんだろうか。

B　住み込みで働いていた障害者の虐待を取り上げた**「沈黙の搾取～見過ごされた障害者の虐待～」**HTV制作。トイレ無し、暖房無し、飲み水は汲み置き、外からかんぬき、休日無し、給料無し。あげく倒産で、障害年金が20年間で5千万円ネコババされる。公正中立を忘れて、もっと被害者の味方でいい。

C　ドキュメンタリー解放区の**「標本室～731部隊 細菌戦と少年たち～」**。731部隊の人体実験に荷担させられ、マルタそのものにもなった少年たちの証言。93歳と90歳が語る。これは力作です。

D　**「第2の家 あなたの再出発、手伝います。」**Nドキュの55分枠。引きこもりの中年男が家を出るためにどれだけ苦労したかという話。山形放送。

A　同じ、Nドキュの55分枠。**「アポジが眠る海」**磯野恭子さんはじめ、山口放送の歴代制作者たちの積み重ねで作られた力作。引き継い

だD＆Pは佐々木聡。海底炭鉱の水没事故で海の底に眠る遺骨を朝鮮の地で葬りたい。

「見える遺骨しか調査しない」という日本国のへ理屈がおぞましい。

（前川英樹）

B　名盤ドキュメントシリーズの**『テレサ・テン 略 アジアの歌姫は何を歌ったのか?』**、以前、キャンディーズを取り上げていましたが、今回のテレサも非常に面白かった。過去のマルチトラックから、テレサのボーカルそのものを取り出して一青窈はじめ作曲家、ギタリストなだが論評していく。

C　歌謡曲というか、歌に対するリスペクトがあって、テレサが歌姫としていかに優れていたかを解き明かしていく。このシリーズは長嶋甲兵さんが二〇一三年の井上陽水から初めて10作目です。

D　前作のキャンディーズでは『映文連アワード2024グランプリ』を受賞している。彼は歌に強い。**『世紀を刻んだ歌』のシリーズ**では反戦歌の「花はどこへいった」、クィーンの「ボヘミアン・ラプソディ」、ジュディ・ガーランドの「オーバー・ザ・レインボウ」を取り上げ、歌にまぶして戦争や差別の問題を訴える。

B　音楽ドキュメントとして新しい地平を開いた『名盤ドキュメントシリーズ10作』と長嶋甲兵さんとの組み合わせで、グランプリの候補としたい。

C　名盤の前作**『キャンディーズ『年下の男の子』～彼女たちのJポップ革命～』**は音楽を取り上げながら社会的背景もきっちり捉えている。映画監督の犬童一心監督が、当時の高校生にとってテレサがいかに大きな存在だったかを語る。

D　録音原盤のマルチ音声を通して、アイドルを超えた高い音楽性と声の魅力を語る。YMO、喜納昌吉、太田裕美も証言。

A　グループサウンズの時代に、新しい音楽にトライしていた3人が一緒になることで、ぱっと花開いた。

B　長嶋甲兵さんには、**『詩のボクシング～鳴り渡れ言葉一億二千万の胸の奥に』**という名作がある。谷川俊太郎とねじめ正一がリングの中で詩を朗読して闘って採点される。谷川さんを追悼して、昨年暮れに再放送された。

C　長嶋さんは偉才です。この3月、6年務めたBPO委員を退任する。

D　フジテレビ系列のテレビ大分の**「私のお墓はどこですか　～さまようムスリム永眠の地～」**。明日は我が身になるかもしれない、そう思いながら、当事者の日出（ひじ）町皆さんには大変申し訳ないけど面白く拝見。土葬文化と火葬文化、どう折り合いをつけるか。

A　外国人労働者に頼る日本にとって答えを見つけておく必要がある問題。D・構成が牧野夏佳。11月29日放送。事務局にビデオがあります。

B　1月18日（土）のE特**「坂本しのぶ　誰か私の声を聞いて」**はNHK福岡の吉崎さんが作ったドキュメンタリー。彼が34年間ずっと水俣を取材してきて、その作品だけでも何十本もある。彼もいろいろ転勤して最終的に福岡に戻って水俣に拘っている。

C　坂本さんは生まれながら水俣病を背負った「胎児性患者」で「水俣病の象徴」として生きてきた。ユージン・スミスと奥さんのアイリーン・美緒子・スミスさんに沢山の写真を撮られている。彼女は取材されっぱなしで、取材した人はずっとは寄り添ってくれず、みんな去っていく。

（渡辺紘史）

D　彼女の苦しい青春を回顧するような作りの中で、吉崎は自分も取材者の1人で、取材していい番組を作ったとしても、そこから去ってしまっていいのかと反省する、自分は水俣に戻ってずっと付き添って行こう、という自己告白を縦軸の中に入れた。力のこもった作品です。

A　吉崎さんの存在はNHKという公共メディアの素晴らしいことの一つだ。先走りだけど、グランプリの特別賞的な候補です。

B　ドラマで個人を推薦したい。会員の八木康夫さんの最近の仕事を高く評価したい。（「やめてくださいよ」と悲鳴あり）正月明けに配信した、Netflixの向田邦子作品のリメイク**「阿修羅のごとく」**。もう一つは、昨年の秋にNHKBSで放送した**「団地のふたり」**が評判を呼んで、急遽、年末の12月28日～30日全10回の一挙再放送があった。

C　ちなみに、今年は橋田壽賀子生誕100年です、なぜ橋田さんかというと、テレビにおけるホームドラマを確立された1人であり、一昨年亡くなった山田太一さんもそうですけども、日本のテレビでホームドラマは間違いなく一つのジャンルとしてあったのです。

D　それが今非常にか細くなっていて、やたら考察とか伏線とか回収とか、一種、推理小説を読むようにドラマが受けたりしている。でも、日本のホームに人がいる限り「ホームドラマ」は必要なジャンルであり、最もテレビ的なドラマ表現です。

A　それを誰が担うかというと、時代劇と同じでいないんです。そんな状況で、八木さんは向田さんの原作を今日的なキャスティングでよみがえらせた。着地するまでに相当ご苦労があったと聞いています。

一方で、今日的な団地の置かれている状況を背景にしながら「団地のふたり」は今の中年女性たちの共感を得られる、小泉今日子と小林聡美を起用して、新しい現代的な形のホームドラマを見せてくれる。

B　この幅ですよね。この幅がある人が、他に誰がいるかというと、私はいないと思うんです。

（本人「節操ないんですよ（爆笑）」）

C　この幅が素晴らしい。「阿修羅のごとく」、私、見ましたが、和田勉さんの演出と比べても遜色ない。「団地のふたり」は静かなブームというか、国境を越えて中国でも評判を呼んでいる、共通するところがあるようです。

D　TBSで最後の仕事になった日曜劇場の**『親父の背中』**（14年7月～）。第一線の脚本家10人を集めてホームをテーマに書かせて、一話完結のオムニバス形式のドラマを作る。

このときもホームドラマはほとんど誰もやっていない中で、岡田惠和、倉本聰、鎌田敏夫、

山田太一、池端俊策、井上由美子、三谷幸喜など、第一線の脚本家を八木さんは集めた。

A　もう一つ。フリーのプロデューサーで、制作会社に依拠せずに、これだけ活躍されるのはドラマのジャンルにおいて稀なんです。

B　日本のドラマは日常生活を描く独特の歴史がありました。ところが最近、その日常が描きにくくなっている中で、「団地のふたり」は日常をベースにしながら、老いの問題とかいろんな問題を、柔らかくからめて、豊かなドラマになっている。

本人　団地はこれほど反響を呼ぶとは、これっぽっちも思わなくて、こんなに事件が何も起こらなくて大丈夫なの？　というのが本当のところです。これはBSなので、地上波の半分しかまだ見られていないのに、静かなブームに驚いています。

B　TBSの**「ライオンの隠れ家」**、セリフの純度が良かった。一戸慶乃さん、大事に育ててほしい作家です。

C　最初は単なるヒューマンドラマだと思っていたら、大きいサスペンスに巻き込まれていくが、結局はその兄弟が隠れ家から巣立っていく…というラストも良かった。

D　NHKの**「3000万」**。拾った3千万円をネコババしようとした夫婦の悲喜劇。脚本家4人（弥重早希子、山口智之、名嘉友美、松井周）の集団創作です。

A　22年にNHKが立ち上げたドラマ脚本開発チーム、WDR（Writer，s Development Room）プロジェクトから誕生した作品です。

まず、応募者二〇二五人の中から脚本家チームに10人を選ぶ。10人がそれぞれ企画を出して、弥重さんの「3000万」が採用されて、弥重さん含めて4人のプロジェクトメンバーが選ばれて、創作に入る。

B　演出の保坂慶太さん、諦めずに、よく頑張った！　ホン作りの熱気が役者の怪演を引き出した。

（若泉久朗）

C　アメリカ的な集団創作はこれまで全然好きじゃなかった、例えばアメリカの「24」（Twenty-Four）は何の思想もなくただ面白いだけだった。だけど「3000万」は日本のある種のドラマの伝統も踏まえて、安達祐実が演じるヒロインの「何かよくわからないエネルギーとかサバイバル本能みたいなもの」がきちんと描かれていて、すごく良かった。

D　視聴者に委ねるエンディングも素敵だった。

A　個人的に見てスッキリした！**「あのクズを殴ってやりたいんだ」**。恋とボクシングのオリジナル・ラブコメディ。泉澤陽子脚本。役者の奈緒を誉めたい。

B　**「海に眠るダイヤモンド」**すごく良かったと思います。個人史を遡っていくようで、社会が忘却しきった「炭鉱の歴史」を社会全体に想起させる機能も持っていて、野木さんの脚本がとてもダイナミックだと思いました。

C　何より構成が素晴らしかった。神木さんの一人二役も良かった。炭鉱という地味な題材を扱いながら、完成度の高い作品でした。

D　**「光る君へ」**。戦乱の世を描く大河ではなく、物語を主題にした大河で、しかも物語が政治を動かし国を動かしていく、すごく新鮮でした。まひろが物語の力で道長を操っていく「女性たちの大河」はとても新鮮でした。

A　大河63作目にして、作・音楽・主演・制作統括、チーフ演出の全員が「女性たちの大河」でした。

B　この題材に挑んだチャレンジングさが、今年の**「べらぼう～蔦重栄華乃夢噺」**に繋がる。大石静も含めて「光る君へ」のチームを候補に推したい。

C　大石さんが書くから「平安恋愛ドラマ」になるのかと思っていたら、それを超えて「物語」が主役だった。最後も、主人公が死ぬところで終わるのではなく、新しい話が浮かんでパターッと逝く、大石静らしい潔い終わらせ方でした。

D　自分の憧れを書きたかったのかな？

A　大石さん、あのお年で一年分書いたんです、72歳です。途中で、大石さんの長年連れ添ったご主人を亡くされたけど、「悲しむのは書き終わってから」という名言を吐いている。

B　**「アンメット～」**の杉咲花は、テレビドラマにおける新しい演技の形態を開発したような気がして…これは脚本というよりは役者さんの力だったと思います。

C　ドキュメンタリーのようなドラマの仕上がりになっていたこともよかった。

D　最初の話に戻るんですけど、やっぱりインパクトがあったのはネットフリックスの**「地面師たち」**、大根仁脚本監督。

A　NHKを卒業して黒崎くんが撮った**「さよならのつづき」**は良かったですね。岡田惠和でね。

B　どこの番組なんだろうみたいな感じでね。**「ひよっこ」**と一緒ですよね。制作費はかかっている。映像が美しい。

C　地上波とBSとネットがボーダレスになってきたのが、今年の特徴だと思います。

D　バラエティーの声がない？

A　**「水曜日のダウンタウン」**の**「名探偵津田」**が抜群に面白かったです。虚構と現実の境界が本当に揺らいでいって、その中でダイアン津田がどんどん何か混乱していく。その混乱していくのを一生懸命説明しようとするんだけど、しようとればするほど、虚構と現実の境界がわかんなくなっちゃう。

B：TVerで累計2億回の再生突破の新記録、めちゃくちゃ面白いです。長いんです、最初1時間があって、その後2時間のスペシャルがある、最初っから見ないと駄目なんです。最初の関係ないと思われていたものが、実は関係あったりするので、これはもう超お薦め！

C　テレビ朝日の**「EIGHT-JAM」**が結構、突っ込んでます。日本の音楽が世界から逆輸入じゃないけど戻ってきている、シティーミュージック、シティーポップとして。それだけ日本の80年代の音楽はすごかったと再認識させられる。

D　放送百年、ラジオ百年ですから、今年はNHK（の番組）から何か1本、**「ラジオ第2」**そのものに賞を差し上げるというのは、どうでしょうか？

B　改定に異を唱えた証しとして、ですね。

C　民放では、ドキュメンタリーを3本、推薦します。

D：TOKYO FM の力作、90分。関東大震災の**「福田村事件～暴走することばの群れ」**。朝鮮人がデマで虐殺された「事件」の構造を解き明かして、SNSの個人攻撃やヘイトスピーチによる「集団の暴力」は今も続く。

A　北日本放送が石川県珠洲市を取材したド

キュメンタリー。**「ふるさとの亀裂～地震と過疎と原発と～」**20年前、原発建設計画をめぐり住民同士がぶつかった亀裂は今も残る。人々は地震後も確かに生きている。

B　文化放送の「多摩全生園（たま・ぜんしょうえん）」を「証言」として記録する番組。**「全生園の柊」**。フリーアナの長野智子が園を訪れ、3人のハンセン病回復者を取材。〝生きること〟〝生きていること〟を消し去られていたかもしれない彼らの人生を辿る。

C　**放送アーカイブ「文化放送 PodcastQRスペシャル」**で番組が聴けます。

D　**アンジェリーナ 1/3** という名のラジオのパーソナリティーが注目を集めている。23歳の彼女はガールズバンドのマイクパフォーマーとして活躍。「1/3」は、自身が日本人の父親とスペインとフィリピンのハーフである母親のワンサード(1/3)に由来。声も感覚もいい、期待の星。

A　次は、渋いところで**文化放送のニュースパレード**」が65年周年になる。番組は15分だが、その音の歴史は貴重だ。讃えたい。

B　**「新日曜名作座」**を表彰したい。森繁さんから引き継いで16年半、故西田敏行さんも名作座が大好きでは決して最後の収録まで手を抜かなかったという。

司会　ここらでお開きと致します。お疲れ様でした。

＊＊　＊＊　＊＊　＊＊

座談会次第

日時　1月25日（土）15時～17時20分

場所　千代田放送会館・3F

出席者　石橋映里、岡室実奈子、木原毅、菅野高至、鈴木嘉一、長井展光、林健嗣（on-line）、深尾隆一、前川英樹、三原治、八木康夫、矢島良彰、若泉久朗、渡辺紘史、

2024/02/05：菅野記

2024年度・下期・ドキュメンタリー・一覧

※人名等の誤記を謝謝！

6月30日（日）5:00～、60分、NHKEテレ

こころの時代　シリーズ徹底討論 vol.7「宗教と政治」 宗教は「分断」をもたらすのか

△出演：中東情勢に詳しい宮田律、トルコが専門の地理学者・内藤正典、アジア諸国の文化交流政策に詳しい小川忠、フランスが専門の宗教学者・伊達聖伸、キリスト教と国際政治の関係を研究する松本佐保、宗教学者の島薗進。△語り：守本奈美、制作統括：鎌倉英也、D：矢部悠一。

7月7日（日）5:00～、60分、NHKEテレ

こころの時代　シリーズ徹底討論 vol.8「宗教と政治」「他者」とどう向き合うか

△出演：宮田律、内藤正典、小川忠、伊達聖伸、松本佐保、島薗進。

12月29日5:00～、60分、NHKEテレ

こころの時代　シリーズ徹底討論 Vol.9「宗教と政治」「信教の自由」を問う

出演：中国の宗教事情に詳しい川田進、憲法学者の駒村圭吾、憲法学者の青井未帆、旧統一教会問題研究者の櫻井義秀、小川忠、島薗進。

～～☆～～☆～～☆～～

8月31日（土）4：50～、30分枠、テレビ朝日系列

テレメンタリー2024「ふるさとに生きる～揺れた石垣の里～」

△愛媛県愛南町外泊。150年受け継がれた石垣が4月の震度6弱の地震で崩れた。△撮影・編集：千葉麻寿美、撮影：玉井克典、D：津村研太、P&D：安部栄佑、制作著作：愛媛朝日テレビ

9月1日（日）24:55～、30分枠、日本テレビ系

NNNドキュメント24「はるの空　聞こえなくても、できるんだよ」

△北海道美瑛町。聾者の夫婦が子育てしつつ民宿。△ナレ：三宅健、撮影：佐野眞一、D：山﨑健太郎、P：水谷潤三、制作著作：札幌テレビ

9月5日（木）23:25～、60分枠、NHKBS

BSスペシャル「虹の灯（あかり）が照らすのは〝同性婚〟法制化　台湾の今」

△台湾人との同性婚のために移住を決意した日本人を追う。△語り：守本奈美、撮影：池田健、小寺安貴、D：鹿野諒、野村香衣、P：長谷川三郎、制作統括：深須昭宏、本木敦子、吉田宏徳、制作：NEP、制作著作：NHK、ドキュメンタリージャパン。

9月7日（土）4:50～、30分枠、テレビ朝日系列

テレメンタリー2024「秩序と闇　それは犯罪か、内部告発か」

△鹿児島県警幹部が記者に送った内部告発文（性的暴行）の波紋。△ナレ：村川裕、若松秀一、D：横枕嘉泰、田上晶、撮影・P：中禮海、制作著作：鹿児島放送。　～地元局、頑張れ！～

9月7日（土）23:00～、59分枠、NHKEテレ

ETV特集「罪と赦し～出所者たちの記録～」

△出所者や元暴力団員。人生のやり直しを支え続ける社長の廣瀬伸恵の1年。△語り：マビトウ・ザ・ピーポー、撮影：南木洋介、浅見織恵、

Ｄ：内藤朝樹、制作統括：成松弘明、梅原勇樹、制作著作：ＮＨＫ宇都宮。～社長のキャラが良い。

９月８日（日）10:00～、60 分枠、ＢＳ-ＴＢＳ
ドキュメントJ×鳥取「響け癒しの音色～幸せ届ける宅配便～」2023 年２月制作
△『音楽』の宅配便。吸引などの処置が必要な方に一流の音楽を。△コロナ挟んで３年間の取材。△ナレ：丸山聡美、撮影：高橋正伸、Ｄ：齋尾和之、Ｐ：遠藤秀樹、制作著作：山陰放送。

９月８日（日）14:00～、55 分枠、フジテレビ系
ザ・ノンフィクション「ほめる人とほめられる人～ほめますおじさん　令和の路上物語」
△ほめますおじさん（42）船橋市。△語り：黒木華、構成：石井成和、編集：宮島亜紀、撮影：水上智重子、Ｄ：鳥居稔太、Ｐ：蜂谷時紀、ＣＰ：西村陽次郎、制作協力：テレビマンユニオン、制作著作：フジテレビ。

９月８日（日）16:40～、50 分、ＮＨＫＢＳ
「不登校がやってきた4　知りたい、子どもたちのその後」
△わたしはディレクター。２人の子が５年以上の不登校。21 年～24 年取材。△親は「いつまで見守るの？」△Ｄ：二村真弘、制作統括：堂垣彰久、森博明、石川朋子、制作：ＮＥＤ、制作著作：ＮＨＫ、ドキュメンタリージャパン。

９月８日（日）24:55～、30 分枠、日本テレビ系
NNNドキュメント 24「僕がモデルになったわけ」
△身体に障害のある人がモデルになる。山形県南陽市、丸山聡。△ナレ：早見沙織、Ｄ・撮影・編集：渡部映治、Ｐ：結城則、制作著作：山形放送　～２週続けて、難病もの～

９月８日（日）25:28～、60 分枠、ＴＢＳ。
ドキュメンタリー解放区「労組と弾圧　～関西生コン事件を考える～」
△ミキサー運転手の労働組合。連帯労組関西地区生コン支部「関生（かんなま）」の闘いを追う。△ナレ：西靖、撮影：奥村恭介、編集：野口理恵、映像協力：映画「ここから『関西生コン事件』と私たち」、Ｄ：伊佐治整、Ｐ：橋本佐与子、製作著作：ＭＢＳ。～東映の映画みたい･･･で、いつの話しなの？と勘違いする・今の話！　もっと見たい。～

９月 12 日（木）20:00～、30 分枠、ＮＨＫＥテレ
バリバラ「能登半島地震～被災地の外国人はいま～」
△能登の技能実習生、1431 人。職場が被災、仕事を失い、転職先が無い･･･。△母国語の精神的ケアが必要。

9 月 14 日（土）4:50～、30 分枠、テレビ朝日系列
テレメンタリー2024「パリで叶える！ "鬼コーチ"の夢」
△飛込競技。35 年間選手を指導する馬淵崇英（スーエー）コーチ（60）に密着。△ナレ：藤崎健一郎、企画：東野裕、取材：大島尚ほか、Ｄ：白附優、Ｐ：西一樹、制作著作：ＡＢＣＴＶ。～馬淵かの子は１月４日永眠、86 歳。～

9 月 14 日（土）５:20～、30 分枠、テレビ朝日系列
日本のチカラ「ひげじいのハンドル　～77 歳、動ける限り送り続けます～」
△山梨県北杜市。「ひげじい」中村三郎（77）は高齢者の送迎サポートを行う。△ナレ：小林千絵、Ｄ：豊島一弘、Ｐ：荻野弘樹、安藤尚之、総合Ｐ：雪竹弘一、堀池勝法、制作著作：山梨放送。

９月 14 日（土）23:00～、59 分、ＮＨＫＥテレ。
ETV特集「多国籍アパートで暮らせば」
△岐阜県可児市。人口の１割が外国籍。半年、相原Dはアパートの部屋を借りて住む。その記録。△Ｄ：相原友子、Ｐ：久保田瞳、制作統括：森田哲平、古屋敷将司、梅原勇樹、制作著作：MHK岐阜。

９月 15 日（日）21:00～、55 分、ＮＨＫＧ

NHKスペシャル「封じられた "第四の被爆" ～なぜ夫は死んだのか～」
△1958 年、アメリカの水爆実験で海上保安庁の船「拓洋」などの乗員 113 人が被ばく。△翌年、永野博吉（34）が急性骨髄性白血病で亡くなる。△日米安保改定交渉に向けて「所見無し精密検査は必要ない」△取材：山下哲平、山下達也、撮影：鈴木裕髙、編集：林洋三、リサーチャー：ウインチ啓子、五十嵐哲郎、Ｄ：横里征二郎、制作統括：高比良健吾、宮原俊平、三村忠史、制作著作：ＮＨＫ　～執念の労作です。～

９月 15 日（日）25:55～、30 分、日本テレビ系
NNNドキュメント 24「この鉄砲がゴボウであったらなぁ　～兵士の証言を残すために～」
△島根県雲南市の「戦士の記録」兵士 1000 人分の証言。△相原利彦（24）は３年前から、肉声のデータを集める。△語り：斉藤由貴、Ｄ：伊藤祐介、Ｐ：河野信一郎、濵吉寛臣、制作著作：日本海テレビ。

９月 16 日（月）19:00～、60 分、ＮＨＫＥテレ
「わたしを生きる～認知症とともに歩む社会」　＜笑顔つながるＥテレ敬老ウィーク！９月 16 日（月･祝）～20 日（金）＞
△認知症の当事者が自らの意思で自分らしく生きる。フランスと日本で取材。△語り：井浦新、ナレ：小谷直子、取材協力：分福、撮影：高野大樹、松浦祥子、伊知口大騎ダグラス、編集：鈴尾啓太、取材：小倉藍子、コーディネーター：小林亜希子、Ｄ：比嘉さくら、制作統括：森田直樹、小谷亮太、寺西浩太郎、制作：ＮＥＰ、制作著作：ＮＨＫ、エネット。

９月 17 日（火）20:00～、30 分枠、ＮＨＫＥテレ
ハートネットTV「安心感の輪の中で　アタッチメントと入舟寮のこどもたち」
△発達心理学の「アタッチメント」という理論と実践を紹介。大阪の児童養護施設・入舟寮。△語り：由薫、撮影：原伊知郎、川下修司、Ｄ：山浦淋仁、Ｐ：浅田環、制作統括：岡本朋子、梅内康平。～「入舟寮は家、安心の基地」～

９月 21 日（土）22:00～、50 分、ＮＨＫＧ
NHKスペシャル・調査報道 新世紀 File5「ミャンマー軍を支える巨大な闇」
△欧米各国がミャンマー軍に厳しい制裁を科すが、なぜ軍は市民への攻撃を続けられるのか。△語り：八田知大、撮影・ＶＦＸ：村山貴道、取材：小野志周、取材協力：ナン・ミャ・ケー・カイカン、工藤年博、中西嘉宏、デジタル調査：麻生重樹、映像データ分析：田中元貴、Ｄ：石井貴、五十嵐哲郎、Ｐ：西脇順一郎、制作統括：松島剛太、岩間宏毅、制作著作：ＮＨＫ　～儲かる軍隊の構造がよく分かる～

９月 22 日（日）22:00～、50 分、ＮＨＫＧ
NHKスペシャル・調査報道 新世紀 File6「中国・流出文書を追う」
△中国のＩＴ企業の内部文書、「i-SOON 文書」が流出。△「認知戦」と呼ぶ、新たな戦争も浮き彫りになる。△語り：八田知大、撮影・ＶＦＸ：横山真也、取材：福田陽平、杉田沙智代、取材協力：如水社、Ｄ：新里昌士、高野浩司、Ｐ：石山健吉、制作統括：井上新治郎、蔵重龍、内山拓、制作著作：ＮＨＫ　～内容過多？噛みしめる暇も無い～

９月 22 日&29 日（日）14:00～、55 分、フジテレビ系
ザ・ノンフィクション、前後編「東京三姉妹物語　地酒と涙と夢の行方」
△赤羽桐ヶ丘中央商店街、「地酒処 三益酒店」を営む三姉妹の日々を描く。△美保（39）社長、由美（37）専務仕入れ担当、美香（28）角打ちの笑顔の店長。△語り：清野菜名、構成：田代裕、編集：宮島亜紀、Ｄ：牧野由佳、Ｐ：岩井優介、ＣＰ：西村陽次郎、制作協力：ソユーズ、制作著作：フジテレビ、～結局、お店の宣伝になっている～

９月 22 日（日）24:55～、55 分枠、日本テレビ系
NNNドキュメント 24「『車椅子の花嫁』～理解されない病との闘い～」
△筋痛性脳脊髄炎の塚本明里（34）、母・弥生。△発症 18 年、夢を叶え花嫁に。△ナレ：桐谷美玲、撮影：三上誠志、Ｄ：田中穂積、Ｐ：中谷保、監修：安川克己、尾崎秀行、制作著作：中京テレビ、

９月 22 日（日）25:30～、57 分、ＴＢＳ系列
ドキュメンタリー解放区「アイドルたちの夢　～名古屋から全国へ 世界へ～」
△2023 年４月、21 名のボーイズグループが誕生。７月幕開けの舞台までを追う。△ナレ：出水麻衣、構成：比嘉夢丸、撮影：荻原健、クリエイティブＰ：松木大輔、総合Ｐ：松田崇裕、小池博、Ｄ：津村有紀、制作著作：ＴＢＳ

９月 26 日（木）23:25～、49 分、ＮＨＫＢＳ

BSスペシャル「ネット犯罪から若者を守れ！　～韓国警察の苦闘～」

△ＩＴ先進国の韓国でネット犯罪をどう取り締まるか。△語り：合原明子、撮影：キム・ジョンエ、コーディネーター：イム・スンギョ、取材：小林佳乃子、Ｄ：新井章人、制作統括：日置一太、新津総子、松永真一、制作：ＮＨＫグローバルメディアサービス、制作著作：ＮＨＫ，ドキュメンタリージャパン。～取材スタンスは･･･。～

９月 28 日（土）４:50～、30 分枠、テレビ朝日系列

テレメンタリー2024「万博～組み上げたパズルの先に～」

△関西万博。初めてパビリオンを出展するアルメニア。建築家の遠藤秀平を通して記録。△隣国アゼルバイジャンと衝突し、万博から撤退する。△ナレ：塚本麻里衣、Ｄ：宮本華、岡谷藍、Ｐ：西一樹、制作著作：朝日放送テレビ

９月 29 日（日）10:00～、60 分、ＢＳ-ＴＢＳ

ドキュメントJ×京都「限界ニュータウンと言われても　～住民自治を生きる人々～」 23 年９月制作

△住民自治で「限界」を克服する奮闘記。△京都と大阪の府境の山中に、私有地に無許可で造成されたニュータウン。開発業者はバブル崩壊とともに倒産。住民らは業者所有の土地水道など全てを買い取り、自治会の自主運営に。△ナレ：屋良有作、撮影：奥村恭介、編集：新島愛生、Ｄ：伊佐治整、Ｐ：橋本佐与子、製作著作：ＭＢＳ毎日放送。　～よく動いて、よく話し合う、住民たち、関西弁の魅力か～

９月 29 日（日）25:25～、30 分、日本テレビ系

NNNドキュメント 24「巨人の棲む町　半導体バブルの光と影」

△半導体の巨人、台湾のＴＳＭＣが進出した熊本県菊陽町。その悲喜こもごも。△ナレ：上野聡行、撮影・編集：緒方孝信、取材：後藤宏一郎、松本茜、緒方太郎、小野慎哉、Ｄ：藤木紫苑、Ｐ：福田淳、制作著作：くまもと県民テレビ　～「巨人の棲む町は今も膨らみ続けています」続編が見たい！～

10 月３日（木）26:28～、56 分、フジテレビ系

FNSドキュメンタリー大賞「罪の壁　～危険運転致死傷罪の 23 年～」福井テレビ開局 55 周年ドキュメンタリー

△「危険」な速度や飲酒運転で人を殺しても、危険運転致死傷罪が適用されないケースが相次ぐ。△なぜか、その原因を探るドキュメンタリー。△ドラレコや防犯カメラの時代が来ても、法改正に声を上げなかった法律家の怠慢（立法当時の法務省刑事局長）。△撮影・選曲：加藤英一、取材：菅野佑斗、Ｄ：武澤貴文（記者）、青園大亮、Ｐ：横山康浩、制作著作：福井テレビ。　～力作です。福井テレビ頑張っています！～

10 月５日（土）４:50～、30 分枠、テレビ朝日系列

テレメンタリー2024「WITH YOUR LIFE　～私にしかできない幸せの選択～」

△2017 年から取材。ＡＬＳの武藤将胤（36）と木綿子(39)、結婚５年目に女の子（ゆあ）が産まれる。△付き合い始めて２年、27 歳の彼はＡＬＳと診断。△撮影・Ｄ：毛利恒也、Ｐ：須田光樹、大里和典、制作著作：テレビ朝日

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

【袴田事件】

９月 21 日（土）４:50～、30 分枠、テレビ朝日系列

テレメンタリー2024「でっち上げ～袴田事件 58 年の叫び～」

△9 月 26 日の判決を前に。獄中からの手紙をもとに構成。△ナレ：Nona、Ｄ：和田佳代子、Ｐ：峰島孝斉、制作著作：静岡朝日テレビ。～ひで子さん「再審法改正をやって貰わないと、巖の 58 年の意味が無い」～

10 月５日（土）23:00～、59 分、ＮＨＫＥテレ

ETV特集「巖とひで子～袴田事件･58 年後の無罪～」

△14 年から姉弟を撮りつづけてきた金監督の集大成。△語り：北村有起哉、撮影：池田俊己、編集：野村太、取材：松井一恵、庄野嘉純、Ｄ：金聖雄、制作統括：東野真、太田宏一、制作：ＮＥＰ、制作著作：ＮＨＫ、Kimoon Film

～丁寧な作り。　諸悪の根源は、死刑制度と再審制度。～

＜10 月９日､無罪が確定！＞

11 月 24 日（日）21:00～、60 分枠、ＮＨＫＧ

NHKスペシャル「雪冤の歳月～ひで子と巖　奪われた 58 年～」（10 月放送のＥＴＶ特集をリメイク）

△10 月８日の検事長談話「否を認めない」、９日検察の抗告放棄。△58 年、どこに問題があったか検証されていない。△リサーチャー：神山

陽佑、取材：庄野嘉純、康宇政、Ｄ：金聖雄、制作統括：東野真、太田宏一、松井一恵、制作：ＮＥＰ、制作著作：ＮＨＫ、Kimoon Film

10 月 19 日（土）ユーロスペースほかで公開

映画「拳と祈り－袴田巌の生涯－」

△釈放直後から巌さんと秀子さんにカメラを据え、冤罪を晴らす闘いの軌跡を描く。△監督・撮影・編集：笠井千晶。02 年ＳＢＳ静岡放送の報道部記者の時代に、秀子さんと親交を深め、４本のテレビ番組を手掛ける。映画に結実。△米国で同年に殺人事件で逮捕され、後に冤罪が明らかになるプロボクサーとの文通。釈放を祝うメッセージが良い。

・SBS スペシャル「宣告の果て～確定死刑囚 袴田巌の 38 年～」制作：SBS 静岡放送。
・NNN ドキュメント「法服の枷～沈黙を破った裁判官たち～」制作：中京テレビ放送。
・ハートネット TV「待ちわびて～袴田巌死刑囚 姉と生きる今～」制作：NHK Ｅテレ。
・NNN ドキュメント「我、生還す－神となった死刑囚・袴田巌の 52 年－」制作：中京テレビ放送。

10 月 20 日（日）26:15～、48 分 35 秒、毎日放送

MBSドキュメンタリー映像「死刑囚の手紙－袴田巌さん無実の叫び－」

△26 年前、98 年 11 月 15 日放送の番組を織り交ぜながら、事件と裁判の概要を紹介。△姉への手紙に、衣類は捏造だと見破り、「権力犯罪」だと書いた。獄中からの手紙を朗読。△ナレ：中西安、朗読：西村麻子、手紙朗読：岩城潤子、取材協力：静岡放送、カメラ：泉俊行、Ｄ・Ｐ：里見繁、制作著作：毎日放送。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

10 月６日（日）14:00～、60 分枠、ＢＳ-ＴＢＳ（24 年７月制作）

ドキュメントＪ×静岡「笑って生きる一生」

△笑って生きると決めたＡＬＳ患者・静しお子（70）の仕事と人を描く。△気管切開を「延命」とは言わない、生きて行くための「治療」と言う。△ナレ：ayako-Halo、撮影：渡邊佳昭、編集：中村潔、取材構成：植田麻瑚、ＥＰ：小川満、Ｐ：柏木秀晃、制作：原木雅雄。　～難病もの。「奇跡は自分で起こすもの」凄い人だ！～

10 月６日（日）14:00～、55 分枠？、フジテレビ系

ザ・ノンフィクション「あきらめない僕たちの歌　～今夜も歌い叫ぶわけ～」

△ウクレレ高円寺（原田浩司）がうつ病で弱いから自分を変えたい。キックボクシングの大会に出る。△語り：井上漠、構成：茂原雄二、撮影：谷茂岡稔、Ｄ：広瀬修平、Ｐ：伊豆田知子、ＣＰ：西村陽次郎、制作協力：SLOW hand、制作著作：フジテレビ

10 月６日（日）21:00～、54 分、ＮＨＫＧ

NHKスペシャル「正義はどこに　～ガザ攻撃１年　先鋭化するイスラエル～」

△ガザ地区の死者が４万を超えても攻撃は止まない。△鴨志田郷ほか。△スタッフクレジット無し。

10 月６日（日）24:55～、30 分枠、日本テレビ系

NNNドキュメント 24「キティちゃんと王さまの約束～鉛筆１本から描く平和～」

△辻信太郎（96）サンリオ名誉会長。半生を語る。△ナレ：柏木由紀子、深田幹規アナ、Ｄ：渡辺浩人、Ｐ：古田茂仁、ＣＰ：武井功、制作著作：山梨放送。

10 月 12 日（土）４:50～、30 分枠、テレビ朝日系列

テレメンタリー2024「独白　ひきこもり 40 年、それから…」

△国近斉（ひとし、62）高２で中退、40 年の引きこもり生活を解消して、自立までの記録。△ナレ：山盛由夏、撮影：山本健二、上木雅行、Ｄ・Ｐ：高橋賢、制作著作：山口朝日放送　～事件を起こさずに、生還中？～

10 月 12 日（土）23:00～、59 分、ＮＨＫＥテレ

ETV特集「タマゴ家族」

△家族で営む養鶏場の代替わりの記録、１年半。△父（73）は「ケージ飼い」、息子（47）は「平飼い」。卵は旨い。値段は高い。△飼育方法で父子は衝突し。△語り：鈴木杏、撮影：柳川侑一郎、Ｄ：前田陽一、制作統括：小川海緒、高松竜太、梅原勇樹、制作著作：ＮＨＫ名古屋。
～ヨーロッパはケージ飼い禁止。～

10 月 13 日（日）5:00～、60 分、ＮＨＫＥテレ

こころの時代　宗教と人生「いのちのドアをひらく　助産師永原郁子」

△助産師の永原郁子（57）が半生を描くドキュメント。△2018 年に「小さないのちのドア」を設立、赤ちゃんと母親を守る「ドア」を用意する。△24 時間対応で傷心な妊産婦の相談を受ける。△語り：三宅民夫、撮影：浅見織恵、制作統括：鎌倉英也、Ｐ：奥秋聡、Ｄ；松本友花里、制作著作：ＮＨＫ　～人生の転機と宗教、絵に描いた如く～

10 月 13 日（日）24:55～、55 分枠、日本テレビ系

NNNドキュメント 24「キノコ雲の上と下と～米兵の心に苦悩を刻んだヒロシマ～」

△〝エノラゲイ〟の搭乗員たちの思いに迫ろうと、資料を徹底調査し、音声や手記を独自に入手。心に刻まれた苦悩に迫る。語り：吉川晃司、手記朗読：笠間淳、撮影編集：日野知行、Ｄ：小田成実、増田理沙、ＣＤ：渡邊洋輔、Ｐ：道閑慎一、制作著作：広テレ！　～締めのナレは「キノコ雲の上と下、立場をのりこえ同じ心で訴える」だが･･･。～

10 月 19 日（土）４:50～、30 分枠、テレビ朝日系列

テレメンタリー2024「沈黙の搾取　見過ごされた障害者虐待～」

△恵庭市の遠藤牧場。知的障害者の３人が 20 年間、劣悪な環境で虐待され無給で働かされていた。△調査：北村稔、取材：井口七海、Ｄ：須藤真之介、Ｐ：広瀬久美子、制作著作：ＨＴＶ　～もっと被害者の味方でいいに？～

10 月 19 日（土）23:00～、59 分、ＮＨＫＥテレ

ETV特集「俚謡山脈のDIGの細道」

△人気民謡ＤＪユニット・俚謡山脈が東北土着の音をＤＩＧ（発掘）する旅に出る。△語り：大沼ひろみ、撮影：小田中秀彰、桂嶋賢仁、編集：渦波亜朱佳、Ｄ：大山健一、制作統括：沖田喜之、三森登、梅原勇樹、制作：ＮＥＰ、制作著作：ＮＨＫ仙台。

10 月 20 日（日）21:00～、60 分、ＮＨＫＧ

NHKスペシャル「ジャニー喜多川　〝アイドル帝国〟の実像」

△証言：江木俊夫、テレ東京・田渕俊彦、事務所社員、中谷良（74 没）の姉、大島幸広。△帝国以前：喜田川一家の系譜。（息子をジャニーが襲い）名和太郎が訴える△文春編集者「タブーを作る」△語り：柴田祐規子、コーディネーター：西前拓、リサーチャー：ウインチ啓子、撮影：新井田利之、編集：山崎エマ、福島貴昭、Ｄ：中川雄一朗、制作統括：内山拓、制作著作：ＮＨＫ。

10 月 20 日（日）24:55～、30 分、日本テレビ系

NNNドキュメント 24「過疎と震災　中越地震 20 年…復興と移住のはざまで」

△2004 年 10 月の中越地震。楢木集落の 29 世帯 119 人。△高台移転で残ったのは 29 人。△ナレ：松本光生、Ｄ・Ｐ：倉島実、ＣＰ：中川静子、制作著作：テレビ新潟。～去るも、残るも･･･です。～

10 月 20 日（日）25:53～、60 分、ＴＢＳ系列

ドキュメンタリー解放区「標本室　731 部隊 細菌戦と少年たち」

△1945 年春、14 歳の少年が召集され、ハルビンの関東軍防疫給水部（731 部隊・石井四郎中将）に配属され、人体実験に荷担させられる。△2023 年４月長野県宮田村、清水英男（93）の証言。△24 年８月ハルビン。清水は跡地を訪ね、犠牲者の冥福を祈る。△９月、清水は「批判覚悟で行ったが中国の人は優しかった」。△ネット上の誹謗中傷で「語り継ぐ」のは迷っている。△ナレ：山本恵里伽、山本匠晃、取材：武井一裕、瀬戸雄二、中国取材：立山芽衣子、室谷陽大、任香剣、撮影：寺尾文人、永井岳、Ｄ：日下部正樹、ＣＰ：津村有紀、制作著作：ＴＢＳ～力作です。

10 月 24 日（木）19:30～20:30、59 分枠。ＮＨＫＢＳ

「二階堂ふみ　沖縄　ふるさとの島」

△俳優二階堂ふみがふるさとを巡る旅。△ナレ：池間昌人、取材：田村明日香、Ｄ：和田雄介、Ｐ：池野彩、制作統括：石川健志、佐藤克利、制作著作：ＮＨＫ。

10 月 26 日（土）4:50～、30 分枠、テレビ朝日系列

テレメンタリー2024「しいたけ山のふたり」

△高松市の郊外。原木シイタケの栽培で自立を目指す１年間。△広汎性発達障害と素行障害の岩部大輔（33）と杉山京子（74）。△ナレ：Luca

Delphi、取材・撮影・構成：村主直人、Ｐ：山下洋平、制作著作：ＫＳＢ瀬戸内海放送。

10 月 25 日（金）20:00～、89 分、ＮＨＫＢＳ
「山口一郎 "うつ" からの再出発～サカナクッション　怪獣との格闘～」
△Ｎスペ「山口一郎〝うつ〟と生きる～サカナクッション　復活の日々～」５月５日（日）49 分・ＮＨＫＧの拡大版。
～クレジットメモ・失念～

10 月 27 日（日）5:00～、60 分、ＮＨＫＥテレ
こころの時代「SNS時代の空海に導かれ　～精神科医 名越康文～」
△精神科医。早くに思春期カウンセリングを開設した名越康文（64）。空海との出会いを語る。△「とげとげしい言葉の正体はさびしさ」は、ＳＮＳ時代の「こころの課題」を示して大きな反響を呼ぶ。△「祈ることが世界最古で最も強力な心理療法」。△出演：名越康文、聞き手：大山武人、Ｄ：吉澤仲之、Ｐ：河野純基、制作統括：井上利丸、山田真規子、制作協力：ダイメディア、制作：ＮＥＰ、制作著作：NHK大阪。～関西弁の魅力もある、多弁の人～

10 月 31 日（木）23:25～、50 分、ＮＨＫＢＳ
BSスペシャル「"緊迫の現場" で何が　～アメリカ大統領選挙・市民の闘い～」
△トランプ・ハリス、僅差で競り合い！△ナレ：大橋未歩、リポーター：マイケル・アカティヤ、撮影：室井孝光、Ｄ：小山大祐、坂井みほ、制作統括：柳沢晋二、美細津由加里、制作：ＮＥＰ、制作協力：NHKコスモメディア・アメリカ、制作著作：NHK　～予想が外れ圧勝に～

11 月２日（土）23:00～、60 分、ＮＨＫＥテレ
ETV特集「1000 番地　土地と人間に関するリポート」
△札幌中心部「1000 番地」810 坪の真四角の土地にまつわる人々の記録。△居酒屋の店主・澤野瑞代。△20 億で買った東京のデベロッパー。△開墾した屯田兵の子孫。△語り：高良健吾、撮影：道下学、Ｄ：有元優喜、趙顕と、Ｐ：山森英輔、制作統括：旗手啓介、梅原勇樹、制作著作：ＮＨＫ札幌、

11 月３日（日）5:00～、60 分、ＮＨＫＥテレ
こころの時代「ウクライナ　苦しみとともに歩む」
△ウクライナで戦闘の最前線に支援物資を届け続ける牧師・船越真人。半生を語る。△95 年、妻・美貴とオデーサで布教。△夢はソ連で布教する･･･。△語り：守本奈美、資料提供：ユーラシアビジョン、取材協力：ホーリー・トリニティ教会、加古川パブテスト教会、制作統括：鎌倉英也、Ｐ：奥秋聡、取材・撮影・Ｄ：新田義貴。

11 月３日（日）21:00～、49 分、ＮＨＫＧ
NHKスペシャル・混迷の西紀　最終回「"超大国の分断" アメリカはどこへ」
△河野憲治キャスターの報告：分断を克服できない。△語り：上田早苗、取材：高木優、森健一、田中顕一、Ｄ：荒井愛久美、三宅佑治、川畑真帆、高橋裕太、Ｐ：斑目幸司、矢谷麻理子、製作統括：松島剛太、制作著作：ＮＨＫ

11 月３日（日）24:55～、30 分枠、日本テレビ系
NNNドキュメント 24「神も仏も…　～能登半島地震と豪雨被災者の 10 か月～」
△石川県輪島市の郊外、三井町（みいまち）。避難所となった公民館、小山栄館長は折々の行事を通して人々を励ます。△２月９日「あえのこと」～夏、最後の仮設入り。△９月 20 日線状降水帯。公民館が避難所になる。死者 15 人、1752 棟に被害。400 年続く寺も。△ナレ：藤井貴彦、構成撮影：辻本昌平、Ｄ：中崎清栄、Ｐ：北尾美和、製作著作：テレビ金沢。　～生きているだけで立派！　Ｄも歯がゆかったに違いない～

11 月３日（日）25:28～、60 分枠、ＴＢＳ。
ドキュメンタリー解放区「『安楽死』を考える～その選択と家族の葛藤～」
△スイスの施設で安楽死を受ける、フランス人のジュリアン・クレイ（40）と見守る妹を追う。事故で四肢が麻痺し、神経の痛みが止まらない△エリカ・プライシック医師。４要件「耐え難い苦痛、回復の見込み無し、治療の代替手段が無い、明確な意思表示」。△ナレ：山本恵里伽、撮影：宮田雄斗、コーディネーター：亀島純子、デスク：尾山優恵、統合Ｐ：松田崇裕、小池博、ＣＰ：津村有紀、Ｄ：西村匡史、制作著作：ＴＢＳ　～意志があっても、死ぬのは大変です～

ザ・ノンフィクション「炎の中で死んだ父を僕は知らない」（３回シリーズ）フジテレビ系
第1回『遺された絵画と借金と』11 月 7 日（日）14:00～、55 分枠。
第2回『父と母と家族のこと』 11 月 24 日（日）14:00～、55 分枠。
第3回『僕が生まれた町へ』 12 月 1 日（日）14:00～、55 分枠。
△「相続か放棄か」家族を犠牲にした父が遺した 1000 点の絵と 1500 万円の借金。△語り：宮崎あおい、構成：石井成和、Ｄ：宗田祐佳、Ｐ：上野潤也、ＣＰ：西村陽次郎、制作協力：ユーコム、制作著作：フジテレビ。 ～最後が見えないで終わる。最終回（第４回）はあるの？～

11 月９日（日）４:50～、30 分枠、テレビ朝日系列
テレメンタリー2024「森の探偵ととなりのクマたち」
△写真家、宮崎学（75）。伊那谷を 50 年以上、毎日歩く。動物たちの見たことも無い写真を撮りたい。△くくりワナで、熊・鹿の１割が怪我を負う。△「熊だって悩みながら生きている、そういうのを撮りたい」△ナレ：草田敏彦、協力：宮崎写真事務所、Ｄ：山口哲顧、Ｐ：山下千帆、制作著作：長野朝日放送、 ～哲学がある！熊も宮崎さんも絵になる！～

11 月 16 日（土）４:50～、30 分枠、テレビ朝日系列
テレメンタリー2024「すんどめ ～網膜色素変性症と生きる～」
△アマボクシング、寸止め競技に出る・石川凌久（りく、17）を追う。△遺伝性の病気。両目が見えない母から遺伝。△佐久市で全国大会。優勝。△ナレ：島貫凌、解説放送：尾形杏奈、題字：安藤慎也、撮影：小坂恭平、Ｄ：小坂恵理子、Ｐ：村瀬史憲、制作統括：大塚敏郎、制作著作：メーテレ ～難病もの ～

11 月 16 日（土）23:00～、60 分、ＮＨＫＥテレ
ETV特集「アメリカ 市民たちの選択」
△大統領選の報告、「なぜトランプを選んだのか？」道傳愛子。△アメリカの知性との対話から。△南北戦争以来の２極化。多様性Ｄ・公平性Ｅ・包摂性Ｉは贅沢品。△社会規範の崩壊。△出演：道傳愛子、語り：三浦雅行、取材：山田功次郎、長谷川優基、Ｄ：小林亮夫、岡田亨、Ｐ：中嶋康仁、制作統括：梅原勇樹、東野真、古屋敷将司、制作著作：ＮＨＫ、

11 月 17 日（日）21:00～、49 分、ＮＨＫＧ
NHKスペシャル「8000 メートルで見た生と死 ～写真家 石川直樹の記録～」
△８千メートル 14 座をすべて登頂。写真家ですべて登頂は世界初。その 23 年間の記録。△語り：大竹伸朗、朗読：今井朋彦、映像提供：今井直樹、編集：藤原文彦、Ｄ・撮影：亀川芳樹、制作統括：葛城豪、高山仁、制作著作：ＮＨＫ ～哲学がない･･･。～

11 月 17 日（日）24:55～、55 分、日本テレビ系
「総理大臣を目指した人たち ～2024 二つの党首選から見えたこと～」
△自民党総裁選と立憲民主党代表選･･総理大臣を目指した政治家たち、その人物像に迫りたい。△ディレクターは映画『なぜ君は総理大臣になれないのか』の大島新監督。△日本テレビ政治部とタッグを組み、各候補者へのインタビューに加え、独自の視点で２つの選挙をドキュメンタリーで描く。△D&ナレ：大島新、企画：日本テレビ政治部、撮影：高橋秀典、松浦祥子、長田太平、制作協力：舟入光、仝家存、監修：平本典昭（官邸キャップ）、江口友起、統括Ｐ：井上幸昌（政治部）、ＣＰ：小野昌弘、制作協力：ネツゲン、製作著作：日本テレビ
～井上Ｐ「私たち政治部記者が奮闘して伝え続けた総裁選・代表選とは違う“もう一つの世界”、極限の状況にいる『総理大臣を目指した人たち』の感情むき出しの姿がそこにはありました」～

11 月 23 日（土）4:50～、30 分枠、テレビ朝日系列
テレメンタリー2024「ｼﾞｬﾝﾌﾟの夢 ～現代版ｰキワ荘まんが道～」
△多摩トキワソウ団地。ＮＰＯ法人がシェアハウスを運営。プロへの夢を追う住人たちのドキュメント。△ナレ：渡辺宣嗣、Ｄ：吉田偵、Ｐ：小倉美明、統合Ｐ：須田光樹、制作協力：ＪＳＰ、制作著作：テレビ朝日

11 月 23 日（土）5:20～、30 分枠、テレビ朝日系列
日本のチカラ「木を編む ～島根発！若き組子職人たち～」
△浜田市天空の里。木原木工所。吉原社長（47）と７人の組子職人たちの奮闘。△ホテルに「出雲大社の参道」を作る。ナレ：岡村尚子、Ｄ：小田原安理、Ｐ：河野信一郎、廣吉寛匡、雪竹弘一、製作著作：日本海テレビ。

11 月 23 日（土）27:40～、38 分、フジテレビ系

FNSドキュメンタリー大賞「私のお墓はどこですか　～さまようムスリム永眠の地～」

△大分県日出町。イスラム教徒（ムスリム）の土葬墓地に、地域住民が猛反対し、計画から 6 年で未完成。その記録。△△「遠くない未来、あなたの周りで起きるかもしれない。」△ナレ：小笠原正典、撮影・編集：卯月潤、Ｄ・構成：牧野夏佳、Ｐ：房前啓一郎、ＣＰ：園田雅之、制作著作：テレビ大分。～なかなか難しい･･･。～

11 月 24 日（日）24:55～、30 分、日本テレビ系

NNNドキュメント 24「もう、伝えられない　～孤独死6万人の時代～」

△いわき市、石原葬儀店（夫妻の経営・手作りの祭壇と改装した軽の霊柩車）。見送りの家族がいない。５万円・年間 100 人。火葬場の職員と石原さんで見送る。△ナレ：大橋聡子、Ｄ：今野清楓、Ｐ：岳野高弘、製作著作：福島中央テレビ。

11 月 28 日（木）20:00～、60 分、ＮＨＫＢＳ

世界熱中ひとり旅「サウジアラビア千夜一夜　～サヘル･ローズ　メッカの旅～」

△サヘル・ローズがメディナとメッカの二大聖地で本当の姿を見つけたいと旅立つ。そのドキュメント。△イランの孤児院～７歳で養母に引き取られ８歳で来日。△23 年６月メッカへ。△自分の弱さと対面できた。△旅人・語り：サヘル・ローズ、ナレ：井上二郎、撮影：馬々宏子、Mehammed AI Ghandai、リサーチャー：中川稲子、大隼エヴァ・ハッサン、Ｄ：原口美早紀、制作統括：大井知宏、大道壮司、制作：ＮＥＤ、制作著作：ＮＨＫ。

11 月 30 日（土）4:50～、30 分枠、テレビ朝日系列

テレメンタリー2024「切断からの一歩」

△河合紫乃（23）。事故で左太股を切断、義足を作る。バドミントン選手として復活したい。△義肢装具士・臼井二美男や理学療法士のチャレンジ、骨盤を動かして麻痺した太股を動かす。△ナレ：林美沙希、Ｄ：増田亮央、Ｐ：勝田和宏、酒井秀行、千野壮太郎、総合Ｐ：須田光樹、制作著作：テレビ朝日。

11 月 30 日（土）５:200～、30 分枠、テレビ朝日系列

日本のチカラ「そば畑へ人事異動　サラリーマン農業のパパ」

△長野県安曇野市。農業法人「かまくらや」耕作放棄地を借りて信州そばなどの生産から販売までを手がける。△入社６年目の永井春輝（26）、そば部門は新人の日々を追う。△ナレ：東山未夢、Ｄ：上原一将、Ｐ：手塚孝典、雪竹弘一、制作協力：コンテンツビジョン、制作著作：信越放送。

11 月 30 日（土）22:00～、50 分、ＮＨＫＧ

NHKスペシャル・調査報道 新世紀 File7「気候変動対策の "死角"」

△待ったなしの気候変動対策。△JAXA 開発の観測人工衛星 GOSAT。二酸化炭素や酸素が見える。△メタン濃度の上昇。各国 “水増し”の疑惑。△森を守ってきた先住民が排除される。△見せかけのカーボンクレジット、日本も見直しを！△語り：八田知大、Ｄ：植村優香、安世陽、市野凛、製作統括：山下健太郎、制作著作：ＮＨＫ。　～「1 時間に 40 トンのメタンが噴出する」アメリカの施設・パーミアン盆地に絶句！～

11 月 30 日（土）23:00～、60 分、ＮＨＫＥテレ

ETV特集「誰のための医療か～群大病院・模索の 10 年～」

△2014 年に医療事故が発覚した群馬大学付属病院の改革。△第１章「事故そして検証」、第２章「医療者・家族・それぞれの改革」、第３章「患者との共同意思決定へ」△９月 17 日、医療事故報道から 10 年「誓いの集い」。△ナレ：三宅民夫、撮影：岡田和昭、編集：江川雅人、Ｄ：大野兼司、Ｐ：中嶋康仁、制作統括：東野真、上野剛、制作著作：ＮＨＫ前橋　～前橋局のベテランD，長期取材の成果。丁寧な作りでした。～

12 月１日（日）21:00～、50 分、ＮＨＫＧ

NHKスペシャル・調査報道 新世紀 File8「追跡、 "PFAS汚染"」

△水道水が危うい！発がん性があるＰＦＡＳ対策は？　△吉備中央町、汚染源は不明。工場？基地？　△欧米は規制が進む。予防原則で疫学調査で対策を考える。日本は疫学調査を認めず、放ったままで吉備中央町になる。

12 月１日（日）10:00～、60 分、ＢＳ-ＴＢＳ

ドキュメントJ×岡山「『人薬(ひとぐすり)』精神科医・山本昌知」 ※岡山では24年9月25日放送
△人間の心を癒やすのは人間、だから「ひとぐすり人薬」。△60年前に病棟から鍵を撤去した精神科医・山本昌知（88）の半生のドキュメント。△山本の悔い「対等な人間関係の中で精神医療を根付かせる」△ナレ：小林章子、撮影：田村晋介、藤本茂男、取材・構成・D：三好聡浩、制作著作：ＲＳＫ山陽放送。～クラシカルな岡山弁が良い、出来も良い！～

12月1日（日）24:55～、30分、日本テレビ系
NNNドキュメント24「ドツボと俺～更生支援を続ける理由～」
△尼崎市で清掃業を営む松本和也。社員13人中7人に犯罪歴。△「ほっとかれへん」諦めが悪い社長の更生支援の現実。△ナレ：中村悠一、撮影：西川亮、D：櫻茜理、P：吉川秀和、ＣＰ：指宿文、制作著作：ytv、～社長の嫁がいい～

12月5日（木）22:45～、60分、ＮＨＫＢＳ、
BSスペシャル「破綻の航跡 "暁の宇品" 陸軍船舶部隊の戦争」
△広島の宇品・陸軍の船舶部隊、“暁部隊”。兵士や物資の海上輸送を担う。△新史料と証言で悲劇の運命を辿る。△ノンフィクション作家・堀川恵子。司令官・田尻昌次の手記資料を読みとく。△船底をW字形にして安定させる、技師・市原健蔵の手記。△太平洋戦争開戦時、司令官・佐伯文郎。南方輸送に成功するも、軍中枢は船の損失を甘く算定。△原爆投下直後、佐伯は上陸用舟艇で広島市の消火と救難に向かう。△終戦まで7,200艘、6万人が亡くなる。「輸送船は出たきりで帰ってこない」△取材協力：堀川恵子、講談社、語り：豊島実季、撮影：矢島隆太、リサーチャー：柳原緑、取材：新山賢治、D：林駿平、清水芳雄、P：伊藤俊也、矢島良彰、柿崎鉄男、制作統括：横井秀信、川口潤、小柳ちひろ、制作：NHKグローバルメディアサービス、制作著作：NHK、テムジン。

12月7日（土）4:50～、30分枠、テレビ朝日系列
テレメンタリー2024「爆風の絆　日本×中国 架け橋のドラマー」
△移住して半生を中国ロックに捧げてきた、爆風スランプのドラマー・ファンキー末吉（65）の半生。△ナレ：サンプラザ中野くん、カメラ：合田尚弥（ＡＮＮ中国総局）、那須雅人、鈴木峻也、熱田大、鳴坂昇大、編成：岡田洋子、D：李志善（ＡＮＮ中国総局）、横田客典、P：須田光樹、制作著作：ＴＶ朝日、

12月7日（土）22:15～、49分、ＮＨＫＧ
NHKスペシャル「 "国境の島" 密着500日～防衛の最前線はいま～」
△国境の島の変貌と、そこに生きる人々の1年半の記録。△台湾から111㎞の与那国島。陸上自衛隊の駐屯地、ミサイル部隊の追加配備、駐屯地の拡張・強化。有事の〝全島避難〟△期待の港は国の計画に入らない。△：語り：柴田祐規子、撮影：加屋本子、取材」喜多祐介、D：片山厚志、制作統括：生田寛、成澤良、蒔田斉弘、制作著作：NHK沖縄。

12月7日（土）23:00～、60分、ＮＨＫＥテレ
ETV特集「生誕100年 映画監督 岡本喜八が遺したもの」
△昨年発見の学生時代の日記から、岡本喜八（1924～2005）を辿る。△早生まれで、戦死を免れる。△周防正行監督が語る。次女・岡本真実が語る。△戦争のための世代。国家権力への不信。病理的現象をクールに笑う。△68年「肉弾」ＡＴＧ500万＋妻500万。△語り：三宅民夫、朗読：渡辺翔、D：牛山真一、制作統括：東野真、太田宏一、中嶋弓子、制作：ＮＥＰ、制作著作：NHK、フラミンゴ・ビュー・カンパニー。～懐かしのＡＴＧ作品「肉弾」～

12月8日（日）10:00～、60分、ＢＳ-ＴＢＳ。
ドキュメントJ×鹿児島「隣人」24年2月制作。
△鹿児島市新屋敷町。ベトナム食材店の店長、グエン・ヴァン・ナム（32）に様々な相談が寄せられる。その日々を追う。△結核になった。△通訳の要請。△妊娠。△給料未払い。△撮影・編集・D：武藤久、D：布袋貴代江、制作協力：にんじん、制作著作：ＭＢＣ南日本放送。

12月8日（日）21:00～、50分、ＮＨＫＧ
NHKスペシャル「海獣のいる海～あるトド撃ちの生涯～」
△北海道礼文島。俵静夫（88）。厳寒の海に小舟に乗り、体重1トンのトドを1発で仕留めてきた。△肺がんの進行で、死を覚悟して、手術を断りモルヒネも使わずに静かに逝く。△語り：田中泯、撮影：上杉篤也、那珂英一、取材：那須由樹、制作：長谷川悠、班学人、制作統括：旗手啓介、重藤里彰、制作著作：NHK札幌・旭川。

12 月８日（日）24:55～、30 分、日本テレビ系

NNNドキュメント 24「平和色の写真　よみがえる被爆者の記憶」

△戦争体験者との対話をもとに白黒写真をカラー化する「記憶の解凍」。△高校から活動している庭田杏珠（22）は広島テレビの新人報道記者に。被爆者の阿部静子（97）の依頼「９歳年上の夫の写真をカラー」に。△ナレ：立木文彦、撮影編集：津堅厚一、撮影：若林栄、Ｄ・語り：庭田杏珠、Ｐ：川上陽子、制作著作：広テレ。～自画自賛で照れる･･･。～

12 月９日（月）21:00～、60 分、ＮＨＫＢＳ

英雄たちの選択「隠された南海トラフ地震～学者･今村明恒の挑戦～」

△今村明恒は東京帝国大学の助教授のとき、「東京に大地震が発生し、火災が発生すれば死者は 10 万人以上になる」と警告。△関東大震災で現実のものになった。△地殻変動の観測で予知は可能の信念で、昭和３年から私費で独自の観測網を作る。△昭和 19 年 12 月７日（昭和）東南海地震が東海地方を襲う。今村の悔恨。△軍部による報道規制が敷かれ、M7.9 の地震は隠される。△13 日には大規模空襲があり、明けて１月 13 日には直下型の三河大地震に襲われる。△昭和 21 年、「南海道沖地震」の論文書き上げて、手紙を出した翌日、12 月 21 日昭和南海地震（Ｍ８）が起きる。△昭和 23 年元旦に今村は亡くなる。△出演：磯田道史、浅田春奈アナ、鷺谷威（名古屋大）、山村武彦（防災システム研究所）、ナレ：松重豊、リサーチャー：鵜藤千恵、取材：中村満男、Ｄ：田野裕哉、Ｐ：菊池正浩、神野敬久、制作統括：増田秀樹、谷口雅一、制作：ＮＥＰ、制作協力：ネツゲン、制作著作：ＮＨＫ。　～知らなかった！　皮肉な運命ンの科学者だ～

12 月 14 日（土）4:50～、30 分枠、テレビ朝日系列

テレメンタリー2024「地震と原発　一住民避難計画の現実一」

△能登半島地震。運転休止中の北陸電力志賀原発の 30 ㎞圏内では 14 地区で約 150 人が孤立した。△崩落や亀裂で避難ルートが寸断され、防災訓練は絵に描いた餅！△県と国、原子力規制委員会と内閣府。いつもの責任の押し付け合い。集団的無責任体制が続く。△ナレ：牧野愼二、Ｄ：谷口洸亮、Ｐ：吉中勇介、制作統括：黒崎正巳、制作著作：北陸朝日放送、
～駆け足過ぎて、女川原発を取材した意図がよく分からない。頑張れ！北陸朝日～

12 月 14 日（土）21:10～、59 分、ＮＨＫＢＳ

シリーズ名盤ドキュメント「テレサ･テン　生誕 70 年ベスト　アジアの歌姫は何を歌ったのか？」

△アジアの歌姫、歌手テレサ・テンの生誕 70 年に記念のベストアルバムが制作された。△過去のマルチ録音テープが集められ、リミックス作業が行われる。代表的なヒット曲「空港」「つぐない」「愛人」「時の流れに身をまかせ」「別れの予感」。それぞれのテープ内容を確認すると、彼女が何を思って歌ってきたのかが少しずつ明らかになる･･･。△わずか 42 歳で生涯を閉じたテレサ・テンの足跡をたどる。△ゲスト：一青窈、芳野藤丸、荒木とよひさ、有田芳生、ミッツ・マングローブ、楊逸、ドクター・キャピタル、佐々木幸男、舟木稔、吉野謙志、△語り：森田茉里恵、撮影：牟田高太郎、音声：篠原伸幸、リサーチャー：宇津木瞳子、取材：坂井真一、セキヒカル、Ｄ：滝口一総、Ｐ：長嶋甲兵、制作統括：松永真一、田中雅之、奥田朋之、制作：ＮＥＰ、制作著作：ＮＨＫ、テレコムスタッフ。

～長嶋節の骨法がよく分かる～　　⇒⇒12 月 19 日（木）24:43～、66 分、「あの日あのときあの番組　谷川俊太郎さんをしのんで『詩のボクシング』」。98 年放送の「詩のボクシング」は長嶋甲兵さんの名作です。

⇒⇒シリーズ名盤ドキュメント「キャンディーズ『年下の男の子』～彼女たちのＪポップ革命～」

2023 年９月 23 日、59 分、ＮＨＫＢＳ４Ｋプレミアム 。

△出演：穂口雄右/作曲家、松﨑澄夫/音楽Ｐ、篠崎重/元チーフマネージャー、水谷公生/ギタリスト、川瀬泰雄/音楽Ｐ、秋元康/音楽Ｐ＆作詞家、清水ミチコ/タレント、犬童一心/映画監督、マーティ・フリードマン/ギタリスト、△語り：森田茉里恵アナ。△録音原盤のマルチ音声を通して、キャンディーズのアイドルを超えた、高い音楽性や声の魅力を再認識する＆デビューから解散にいたるまで、自分たちらしく活動したグループの軌跡を追う。

12 月 14 日（土）22:00～、49 分、ＮＨＫＧ

NHKスペシャル「死亡退院～精神医療･闇の記録～」

△滝山病院の３年にわたる調査で精神医療の闇に迫る。※以下省略。～継続は力なり！～

12 月 15 日（日）21:15～、50 分、ＮＨＫＧ

NHKスペシャル「悲しみを癒やす　人生レシピ　栗原はるみの "ひとりごはん" 」

△料理家がひとりご飯に向き合うことで、玲児さんを失った悲しみを癒やして行く･･･。△語り：石田ゆり子、Ｄ：池上祐生、三宅佑治、綾部庸介、制作統括：上田正太、三村忠史、石井有、制作著作：ＮＨＫ福島。

12 月 15 日（日）24:55～、55 分枠、日本テレビ系

NNNドキュメント 24「アポジが眠る海」

△戦時中、43 年２月に山口県宇部市の海底炭鉱「長生炭鉱」で起きた水没事故。△犠牲者 183 人は今も海の底に眠る。△法律で禁じられていた浅い地層（海面から 37 メートル）を掘る炭鉱は、逃亡する鉱夫も多かった。△犠牲者の７割が朝鮮半島出身者。高齢化する遺族は遺骨の収集と返還を願う。△地元の市民団体「長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会」（共同代表・井上洋子（74））は国に調査・収集を要請してきたが、国は「見える遺骨しか調査しない」と回答。△市民団体は募金を集め独自に調査。△7 月、縦坑 28 メートルの潜水調査。９月、本坑道の坑口掘削調査。地下に埋められていた坑道の入り口を発見。10 月坑口から潜水調査、200 メートル以上入る。△11 月 15 日、厚生労働大臣は見解を変えない。△在韓の遺族たち、在日の遺族たち、日本人の遺族たち。高齢化が進み、代替わりする･･･。△ナレ：湯浅真由美、撮影：善浦義隆、山本健二、木村仁彦。柴田剛、三村大、吉田清治、福田芳之、取材：坂倉彩香、磯野恭子、丸山隆康、尾崎秀幸、倉光佑典、倉重暢、重富孝典、Ｄ＆Ｐ：佐々木聡、制作著作：山口放送。～先人たちの積み重ねの力作！です。～

12 月 16 日（月）25:28～、60 分枠、ＴＢＳ系列

ドキュメンタリー解放区「小屋番～山岳写真家が辿る八ヶ岳の山小屋～」

△菊池哲男（山岳写真家）の山の多彩な美しい写真とともに八ヶ岳の山小屋を巡る。△山で暮らす小屋番たち、ボランティアの医師たちの日々を描く。△ナレ：一双麻希、佐々木邦夫、企画・構成：永山由紀子、深澤慎也、撮影：深澤慎也、萩原健吾、永山由紀子、福井敦史、森哲郎、編集：深澤慎也、Ｐ：永山由紀子、音声・監督：深澤慎也、（ＴＢＳ ＡＣＴ）、製作著作：ＴＢＳ　～３月より「小屋番」上映。ＰＲだった･･･。～

12 月 20 日（金）23:50～、72 分、NHKG

北海道スペシャル「安全地帯･零ZERO－旭川の奇跡－」　※北海道地区は 24 年 11 月 15 日（金）に放送。

△結成から半世紀、本当は東京に行きたくなかった８人の青春。その日々を回顧する。△取材協力：大平裕司、たかはしきみこ、本山美幸、堤泰一、石丸靖之、加藤亮、ハーベストロードハウス、撮影：三戸史雄、Ｄ：門脇陸、制作統括：堀口航平、制作著作：NHK札幌。

12 月 21 日（土）４:50～、30 分枠、テレビ朝日系列

テレメンタリー2024「194㎞ 走る凶器」

△2021 年に大分市内で発生した時速 194 キロの死亡事故。△検察は「危険運転致死罪」ではないとしたが、遺族が署名活動を展開し、12 月に訴因変更「危険運転致死罪」で起訴。△24 年 11 月 28 日大分地裁判決。危険運転を認めて、８年の刑。過失の最高刑（７年）＋１年＝８年。これが司法判断の現在地。△検察・被告ともに控訴した。

12 月 21 日（土）5:20～、30 分枠、テレビ朝日系列

日本のチカラ「壊れたら、直せる～輪島塗再起への道～」

△大徹八井漆器店工房・５代目社長、八井貴弘を追う。△地震からの復興途上で、９月豪雨。水の被害は大きい。△直した輪島塗、伝統の技を若い世代につなぐ。△ナレ：川瀬裕子、撮影：保蔵篤史、取材：酒詰はる花、Ｄ：山下竜洋、Ｐ：坂爪陽介、雪竹弘一、制作著作：北陸放送

12 月 21 日（土）22:00～、54 分、NHKG

NHKスペシャル「闇からの飛翔～ウクライナ国立バレー～」

△ウクライナ国立劇場の芸術監督・寺田宣弘とバレリーナのニキータを追う。△５月 22 日アムステルダムで稽古開始。△6 月 22 日公演初日。ウクライナ。△撮影：加倉井和年、福禰將之、編集：岡部航、リサーチャー：桑原真理子、Ｄ：座間味圭子、制作統括：内山拓、小川徹、制作著作：NHK　～公演でヒキの絵がない、ニキータの踊りは？？？～

12 月 22 日（日）10:00～、60 分、ＢＳ-ＴＢＳ。

ドキュメントJ×富山「消える高齢者」　※23 年 12 月制作。

△認知症で高齢者が行方不明になっている。富山県の高岡市、富山市の事例をもとに、その対策を考える。△施設の人手不足。捜索のネットワーク、連携がうまくいかない。△ナレ：西美音、Ｄ：梶谷昌吾、Ｐ：槇谷茂博、制作統括：武石活明、制作協力：東海サウンド、制作著作：チューリップテレビ。　～明日は我が身･･･。～

12 月 22 日（日）24:55～、55 分枠、日本テレビ系

NNNドキュメント 24「第2の家　あなたの再出発、手伝います。」

△米沢市。ＮＰＯ法人「with 優」。代表の白石祥和と再出発する人々のドキュメント。△行政の枠組みから外れ、孤立した人々に居場所を提供

する「第２の家」をクラファンで500万円集めて作る。△17年間ひきこもりの45歳の純平さんをメインに追う。△まずは『家を出て』散髪。２週に一度「第２の家」で２泊３日。△面接の練習～アルバイト～公的支援を受けてアパートを借りる～鉄工所と短期の契約。△女高生・朋子さん（18）幼い頃から両親に虐待を受ける、春には就職するので『家を出て』３か月間、第２の家から通う。△ＳＮＳで支援を要請、30人が応じて、35万円集まる。３月末、就職先へ朋子さんは旅立つ、初任給までの生活費を渡されて。△語り：松本光生、朗読：市川来夢、取材・撮影：光澤光司、佐藤愛未、撮影・編集・Ｄ：齊藤正、Ｐ：三浦重行、制作著作：山形放送　～良く出来ています。～

12月25日（水）22:00～、74分、ＮＨＫＧ

「Mrs. GREEN APPLE　18祭（フェス）　1000人の本音」

△darlingを1000人で歌う。テーマ「本音」のＶメッセージを募集し、オーデイションで選ぶ。△出演：藤澤涼賀（カミングアウトしたカヌー選手）、大森光貴、若井滉斗、ナレ：當真あみ、コーラスアレンジ：田中雪子、取材：西あんず、Ｄ：齋藤勇太、大久保孝一、外山尚喜、制作統括：大塚信広、制作著作：ＮＨＫ。～受信料対策？？～

12月28日（土）23:00～、59分、ＮＨＫＥテレ

ETV特集「カラカサン　私たちに力を」

△タガログ語で“力”を意味する「カラカサン」は、移住女性のためのエンパワーメントセンター。△フィリピン出身の女性たちのあらゆる困りごとの相談に寄り添う。△共同代表・山岸素子、西本マルドニア（28）。△取材協力：移住者と連帯する全国ネットワーク、川崎市立病院、語り：秋元才加、撮影：門脇妙子、西根妙子、Ｄ・撮影：杉本美泉、牧島庄司、制作統括：小柳ちひろ、堀川篤志、梅原勇樹、制作：ＮＥＤ、制作著作：ＮＨＫ、テムジン。　　～小品です！　取材クルーが馴染んでいる。～

12月31日（火）6:00～、90分枠、テレビ朝日系列

テレメンタリー2024スペシャル「消えない波紋」

△「政治とカネと契りと議員」、Ｐ：立川直樹、Ｄ：岡森吉宏。△「知床沖沈没 新たな疑惑」Ｐ:広瀬久美子、Ｄ：山上？、須藤真之介、△「女性死亡後の入管医療」Ｐ：村瀬史憲、Ｄ：福田真依。△「私が〝軽バンガール〟になったワケ」。Ｐ：吉住啓一、Ｄ：伊藤彩香。△「ノーモア・ヒバクシャ」、Ｐ&Ｄ：志久弘樹。△テレメンタリー事務局長：藤田忠久、統合Ｐ：須田光樹、西一樹、共同制作：テレ朝、ＡＢＣテレビ、ＨＴＢ、メーテレ、広島ホームテレビ、ＫＢＣ、長崎文化放送。～悲しく悔しい「入管医療」が秀逸。～

＜ここより、2025年～＞

１月１日（水）19:40～、60分、ＮＨＫＧ

NHKスペシャル「ドキュメント能登半島地震　緊迫72時間」

△正月３が日、生存率の７２Ｈと重なる。警察官・大間圭介、消防団・髙枝岳人、朝市・清水宏紀、119番担当・稲川健太郎、消防署長・出坂明、珠洲市・高重幸、石川県危機管理監・飯田重則、輪島市災害対策課長・黒田浩二、輪島市消防・宮本晴樹、医師・大西賢斉、△語り：中山果南、山崎智之、スタッフのクレジットは無い。制作著作：ＮＨＫ

１月１日（水）22:00～、50分、ＮＨＫＧ

「あたらしいテレビ　2025」　」

△正月恒例、コンテンツのいまとこれからを語り合う新春コンテンツ放談。24年、あのひとはどんなコンテンツに触れていたのか、コンテンツからどんな〝時代〟がうかぶのか。△25年のあたらしいテレビは？　出演：吉田恵理香ほか10人。語り：本多力、リサーチャー：南麻理江、取材：富樫拓山、Ｄ：西原裕貴、Ｐ：内田利元、制作統括：石川慶、坂部康二、制作協力：、、制作：ＮＥＰ、制作著作：ＮＨＫ　～多彩と言うよりは、騒がしいだけ！～

1月４日（土）22:00～、54分、ＮＨＫＧ

NHKスペシャル「〝冤罪〟の深層　～警視庁公安部・内部音声の衝撃～」

△2020年、大川原化工機の社長ら３人が逮捕された事件。軍事転用可能な機器を不正輸出した。△取材班が新たに入手したのは、警視庁公安部内の会議内容が録音された音声記録。独自の法令解釈で事件化を進める幹部らと、戸惑い抗う部下たちの生々しい肉声が記録されていた。△24年12月相嶋一夫さんのご遺族に謝罪したい。４時間にわたって語りあった。△クレジット無し。高裁判決は５月。

1月５日（日）21:15～、60分、ＮＨＫＧ

NHKスペシャル・新ジャポニズム第1集「MANGA　わたしを解き放つ物語」

△漫画はアニメを含めて、世界の10億人がファン。△熱狂の理由は『世界の混沌』。日本マンガの多様で真実味があるキャラクターや物語を、

厳しい現実を前にした人々が自分を重ねている。△ウクライナ、ジンバブエ、イラク、各地のファンを取材。△編集者による新たな「トキワ荘」の運営。未来をになうプロにしたい！△語り：横浜流星、守本奈美、撮影：小口久代、和田圭太、Ｄ：横田大樹、加藤優介、原一雄、制作統括：駒井幹士、倉森京子、濵﨑憲一、制作著作：ＮＨＫ。

１月５日（日）24:55～、55 分、日本テレビ系
ＮＮＮドキュメント 25・**シリーズ　いま声をあげる！性暴力**
「言えない心のうちがわを　家庭内性虐待･子どもの葛藤」
△子どもたちは被害を隠し、痛みを背負う。被害を言えない子どもの心を掘り下げる。△自助グループ「ＳＩAb.」（2013 年結成）のプロジェクト・メンバー５人とその母親が出演。△けいこ（50 代）・兄と父、なみ・父（母からネグレクト）、あや・父、やまだ・義父、△「重いトラウマを語ることは精神的症状を悪化させる」斉藤学。△自己肯定感を失い、「小さい頃の自分が救われたいと思って生きている」△今も被害を受けながら沈黙している大人たちがいる。△ナレ：文音、撮影：門脇妙子、矢田松正香、編集：松田美子、音効：鈴木路子、MA：川口誠、タイトル：村上慎一郎、制作デスク：小島都、Ｄ：植田恵子、Ｐ：福田晴雄、今村忠、古市礼子、尾崎浩行、ＣＰ：小野高弘、製作著作：日本テレビ
～見ていて、辛くなる。生きて殺される状態が死ぬまで続く･･･。力作！　中居くんにつながる･･･。～

1 月 11 日（土）22:00～、49 分、ＮＨＫＧ
NHKスペシャル「それでも故郷に花は咲く～能登限界集落の1年～」
△輪島市若桑地区、22 世帯 50 人。浅田一弘（52）自動車整備工場と上谷衛（59）区長を追う。△地震から２週間後/２月/３月/４月/９月/10 月/11 月住民懇談会/12 月浅田さん金沢に引っ越し、整備工場勤め。/25 年元旦、上谷父子、ハウスの中でトルコキキョウの出荷準備。△避難したまま帰ってこない人・39 人。残った人・９人。△語り：國村隼、撮影：日昔吉郎、Ｄ：棒美和子、前田陽一、制作統括：小川海緒、矢野達史、制作著作：ＮＨＫ名古屋・静岡。

1 月 18 日（土）23:00～、60 分、ＮＨＫＥテレ
ETV特集「坂本しのぶ 誰か私の声を聞いて」
△坂本しのぶさん、68 歳。生まれながら水俣病を背負った「胎児性患者」。「水俣病の象徴」として生きてきた。△私（吉崎健ディレクター）がしのぶさんと出会ったのは 34 年前。以来、継続して水俣の取材を続けてきた。△去年、しのぶさんから、もう一度自分を撮って欲しいと言われた。しのぶさんが今伝えたいことは何か。坂本しのぶさんの生き抜いてきた半生をたどり、しのぶさんの心の声に耳を傾ける。△ラスト、吉崎の語り「坂本しのぶさん、68 歳、『私の声は聞こえますか』そう問いかけられている。その声を聞き、私はこれからも水俣に向かいます」△語り：守本奈美、撮影：中島広城、Ｐ：岩下宏之、Ｄ：吉崎健、制作統括：：植松秀樹、梅原勇樹、制作著作：ＮＨＫ福岡。

～～☆～～☆～～☆～～

2025/01/31　三原治

「放送人グランプリ 2025」ラジオ番組推薦作品など

TOKYO FM 関東大震災特別番組**「福田村事件～暴走することばの群れ」**　4 月 28 日（日）27:00～、90 分、TOKYO FM
△『福田村事件』（五月書房）の著者・辻野弥生氏の語りを中心に、「集団の中の個人が『正義』に駆られて残酷な加害者になりえる」という構造を解き明かす。△歴史上の「事件」の検証だけでなく、ＳＮＳの個人攻撃やヘイトスピーチなど「集団による暴力」は今も続いている。△丁寧な取材による多面的アプローチが事件を立体的に捉えて、いま私たちにできることを改めて問う。△出演：辻しのぶ、辻野弥生、森達也、中川五郎、△構成：林園子、Ｄ：氏家美佳、**Ｐ：**延江浩、原田洋子、　　～24 年度日本民間放送連盟賞　報道部門 優秀賞を受賞。～

ＫＮＢ報道スペシャル**「ふるさとの亀裂～地震と過疎と原発と～」**　5 月 30 日（木）北日本放送（富山県）
△石川県珠洲市。20 年前、原発建設計画の賛否を巡った住民の亀裂が今もなお存在し、深刻な過疎にも直面している。△24 年１月の能登半島地震は過疎地域に甚大な被害をもたらした。△原発計画の「総括」と地震後を生きる人々の「現在」･･･翻弄されながらも生きる民の力を届ける。△過疎の現状を知り、原発建設計画を巡る、厚い取材の蓄積を持つ地元局ならではのアプローチを感じさせ、ローカルメディアの在り方を示した。△ナレ・取材・構成：数家直樹、音声：小塚優、編集：平島健一、制作統括：河原哲志
～24 年度日本民間放送連盟賞　報道部門 優秀賞を受賞。～

文化放送報道スペシャル**「全生園の柊」**（ぜんしょうえんのひいらぎ）　24 年 10 月 25 日（金）19:00～、60 分、文化放送
△20 世紀、日本が近代化を遂げる一方で、優性保護(すなわち劣性排除)のもと、ハンセン病への偏見を国民に植え付け壮絶な差別を生む。その負の歴史を検証し、過酷な実態の「証言」を記録する△東京都東村山市。国立ハンセン病療養所「多磨全生園」、現在およそ 90 人のハンセン病回復者が入所している。△1909 年の開設から 115 年。園の全周をはりめぐらし、逃亡を防ぐ「柊の生垣」は、今も一部で確認できる。

△長野智子が園を訪れ、３人のハンセン病回復者を取材。“生きること”“生きていること”を消し去られたかもしれない彼らの人生を辿る。△出演：長野智子、（多磨全生園入所者）山岡吉夫、平沢保治、山内きみ江、赤沼ヤスヒロ、構成：桐木ケイコ、取材：いしもりのりかつ、Ｄ：相方じゅんいち、Ｐ：関根英生、制作協力：多磨全生園入居者自治会、制作：文化放送報道スポーツセンター

アンジェリーナ 1/3（22 歳）・・・ラジオの次世代の注目パーソナリティ　「令和のラジオスター」として注目を集める。
・TOKYO FM「SCHOOL OF LOCK！」月～金、22:00～、アンジー教頭として水～金を担当。
・TBS ラジオ「アンジェリーナ 1/3 夢は口に出せば叶う!!」　・文化放送「アンジェリーナ 1/3 のA 世代!ラジオ」
△ガールズバンドGacharic Spin（ガチャリック スピン）のマイクパフォーマーとして活躍。

文化放送**「ニュースパレード」永野景子、鈴木純子、後藤謙次**　（月～金、17 時～、15 分）
△文化放送をキーステーションに全国 33 のラジオ局で同時生放送の「ニュースパレード」が放送開始 65 周年を迎える。△昭和 34 年から、その日のニュースを中心に、現場からの中継なども交えて最新情報を届けている。△番組の歴史では、マスコミで唯一全録音に成功した「三島由紀夫最後の演説」や、犯人逮捕のきっかけとなった「吉展ちゃん事件の犯人へのインタビュー」などのスクープがある。△ラジオ番組の特性上、記者らは取材音源集めに奔走する。なお、ニュース原稿ではより具体的に言葉に表そうと、現場の様子をカメラで撮影もしてきた。

ＮＨＫラジオ第１**「ラジオ 100 年プロジェクト　100 人インタビュー」**　夜７時 25 分～50 分
△放送 100 年とラジオ 100 年を迎える 2025 年までに、ラジオにまつわる様々なジャンルの 100 人が、ラジオについて語る番組。△2022 年度から、主に祝日や大型連休に特別編成で、生放送しているインタビュー企画。
1 月 1 日 夜７時 25 分～50 分(R1)　吉永小百合／小林克也　　1 月 2 日 川平朝清／ジョン・カビラ、1 月 3 日小堺一機／春風亭一之輔

ＮＨＫラジオ第１**「みんなでひきこもりラジオ」**　最終週の金曜 20:00～、55 分、
出演：栗原望アナウンサー。△日本に約 150 万人いると言われる「ひきこもりの」の人が話したいことや悩みは千差万別。ラジオには毎回たくさんの声が寄せられている。△就労や親の介護以外のことも語りたい！△ひきこもりのひきこもりによるひきこもりのための番組！
⇒⇒△「テレビでひきこもりラジオ」はラジオをそのまま放送。

「新日曜名作座」出演：西田敏行、竹下景子　日曜日、19:25～、30 分、ＮＨＫＲ1
△ＮＨＫラジオ第１放送で 1957 年４月７日から 2008 年３月 30 日まで 51 年間放送された森繁久彌と加藤道子によるラジオドラマ『日曜名作座』を、西田敏行と竹下景子が 08 年４月６日から引き継いで『新日曜名作座』となる。△当代の名優２人の「語り」の妙技で、１週間の疲れを解きほぐし、時を忘れさせてくれる。最新のベストセラーから古典まで、選りすぐりの名作は心の栄養、人生の糧、明日への活力になる。△24 年 10 月 17 日に西田が他界し、10 月 27 日放送『羊は安らかに草を食み』（最終回）が最後となる。△11 月 10 日～、再放送中る。

「アナウンサー百年百話」　水曜日、22:00～、15 分。ＮＨＫＲ２
△歴代のアナウンサーによる証言を放送する。最前線のアナウンサーの「ことば」をもとに放送の 100 年を振り返る。△黎明期からスポーツ、戦争、エンターテインメント、事件・事故など様々な場面で情報を伝えてきた。その時々でどう向き合ってきたのかを振り返る。

～～☆～～☆～～☆～～

2025/01/31

～24 年度・下期ドラマ・オリジナル作品など～

「海のはじまり」　７月１日（月）21:00～、54 分、全 13 回（特別編を含む）、フジテレビ
△脚本：生方美久、演出：風間大樹（AOI Pro.）、髙野舞、Ｐ：村瀬健、△出演：目黒蓮、有村架純、泉谷星奈、木戸大聖、古川琴音、池松壮亮、大竹しのぶ。△元恋人の死をきっかけに、娘の存在を知る・・・。
「新宿野戦病院」　７月３日（水）22:00～、54 分、全 11 回、フジテレビ
△脚本：宮藤官九郎、演出：河毛俊作、澤田鎌作、Ｐ：野田悠介、制作著作：フジテレビ、△出演：小池栄子、仲野太賀、橋本愛、高畑淳子、柄本明、△歌舞伎町の病院を舞台とした「救急医療エンターテインメント」

「団地のふたり」　９月１日（日）22:00～、49 分、全 10 回、ＮＨＫＢＳ
△原作：藤野千夜、脚本：吉田紀子、Ｄ：松本佳奈、金澤友也（テレパック）、制作統括：八木康夫（テレパック）、勝田夏子（ＮＨＫ）、制作著作：ＮＨＫ、△出演：小泉今日子、小林聡美、橋爪功、丘みつ子、由紀さおり、名取裕子、杉本哲太、△50 代、独身、実家暮らし。団地で生まれた幼なじみのふたり。温かくユーモラスな友情の物語。まったり、さらり、時々ほろり。幸せってなんだろう。

今日もなんとか生きていく。　～ギャラクシー賞2024年10月度月間賞受賞作品。※12月28日～30日、一挙再放送。～

「3000万」 10月5日（土）22:00～、50分、全8回、NHKG
△脚本：WDRプロジェクト、弥重早希子(1)(8)、山口智之(3)(5)、名嘉友美(4)、松井周(6)、△演出：保坂慶太、小林直毅、Ｐ：上田明子、中山英臣、大久保篤、制作統括：渡辺哲也、制作著作：NHK、△出演：安達祐実、青木崇高、野添義弘、愛希れいか、森田想、清水美砂、△祐子は稼ぎの少ない夫とピアノの才能あふれる息子を抱え、倹約で頭がいっぱい。事故で手にした誘惑・３千万円が彼女を危険で甘い非日常にいざなう。しかしそこには危険なクセ者の影が…。
～WDRプロジェクト～　△2022年にNHKが立ち上げたドラマ脚本開発チーム、WDR（Writer’s Development Room）プロジェクトによって、企画出しの段階から複数のライターとスタッフが集まって作る。△応募者2025人の中から脚本家チームに10人が選ばれる。△企画出しで弥重さんの「3000万」が選ばれて、弥重さん含めて４人のプロジェクトメンバーが選ばれる。

「あのクズを殴ってやりたいんだ」 10月8日（火）22:00～、57分、全10回、ＴＢＳ
△脚本：泉澤陽子、鹿目けい子、演出：岡本伸吾、石井康晴、小牧桜、Ｐ：戸村光来、佐井大紀、宮﨑真佐子、製作著作：ＴＢＳ、△出演：奈緒、玉森裕太、斉藤由貴、渡部篤郎、岡崎紗絵、小関裕太、△どん底アラサー女子と金髪の謎の男が、負けっぱなしの人生を変えるために立ち上がる！　恋とボクシングの完全オリジナルラブコメディ。

「ライオンの隠れ家」 10月11日（金）22:00～、54分、ＴＢＳ
△脚本：徳尾浩司、一戸慶乃、演出：坪井敏雄、青山貴洋、泉正英、編成Ｐ：松本友香、Ｐ：佐藤敦司、編成：吉藤芽衣、中野翔貴、製作：ＴＢＳスパークル、ＴＢＳ、△出演：柳楽優弥、坂東龍汰、佐藤大空、尾野真千子、内藤煌成、尾崎匠海、岡山天音。△弟のために生きる兄と自閉スペクトラム症の弟の前に、突然「ライオン」と名乗る男の子が現れて…。完全オリジナル脚本で贈るヒューマンサスペンス！

「無能の鷹」 10月11日（金）23:15～、60分、全8回、テレビ朝日　△見た目は≪有能≫中身は≪無能≫!? 超脱力系オフィスコメディ。
△原作：はんざき朝未、脚本：根本ノンジ、演出：村尾嘉昭、棚澤孝義、ＥＰ：内山聖子(EX)、Ｐ：本郷達也(MMJ)、貴島彩理(EX)、製作：ＭＭＪ、テレビ朝日、△出演：菜々緒、塩野瑛久、高橋克実、工藤阿須加、さとうほなみ、井浦新、本多力、

「海に眠るダイヤモンド」 10月20日（日）21:00～、全9回、ＴＢＳ
△脚本：野木亜紀子、演出：塚原あゆ子、福田亮介、Ｐ：新井順子、松本明子、制作協力：ＮＢＣ長崎放送、製作：TBS SPARKLE、ＴＢＳ、△出演：神木隆之介、宮本信子、杉咲花、土屋太鳳、清水尋也、斎藤工、池田エライザ、國村隼
△戦後復興期から高度経済成長期の「何もないけれど夢があり活力に満ちあふれた時代」と、現代の「一見して何でもあるけれど若者が夢を持てない時代」を同時に描き、過去から現代に通じる希望を見つけだす、時代を超えたヒューマンラブエンターテインメント。

Netflixシリーズ「さよならのつづき」 11月14日世界配信、53分程度、全8回
△原案・企画・製作：Netflix、脚本：岡田惠和、監督：黒崎博、（ＥＰ：岡野真起子？）△出演：有村架純、坂口健太郎、生田斗真、中村ゆり、三浦友和、伊藤歩、イッセイ尾形、△恋人の雄介をプロポーズされたその日に交通事故で亡くし、悲しみに打ちひしがれるさえ子。
一方で、雄介の心臓を提供された相手・成瀬は、心に違和感を覚えていた･･･。

「べらぼう～蔦重栄華乃夢噺～」 2025年1月5日（日）20:00～、43分、NHKGほか
△脚本：森下佳子、演出：大原 拓、深川貴志、小谷高義、新田真三、大嶋慧介 、Ｐ：松田恭典、藤原敬久、積田有希、制作統括：藤並英樹、石村将太、△出演：横浜流星、渡辺謙、染谷将太、宮沢氷魚、岡愛之助、小芝風花、高橋克実、中村蒼、正名僕蔵、山路和弘、伊藤淳史、六平直政ほか、△江戸のメディア王・蔦屋重三郎の笑いと涙と謎に満ちた波乱万丈の生涯を描く！

「TRUE COLORS」 25年1月5日（日）22:00～、49分、全回、NHKＢＳ
△原作：源孝志「わたしだけのアイリス」、脚本・演出：源孝志、Ｐ：井口喜一、田中誠一、伊藤正昭（ジャンゴフィルム）、制作統括：八巻薫（オッティモ）、樋口俊一(NHK)、制作著作：NHK。△出演：倉科カナ、毎熊克哉、滝藤賢一、要潤、髙嶋政宏・石橋蓮司、伊藤歩、加藤雅也、渡辺謙、△視力の低下によって18年ぶりに故郷に戻ったカメラマンと再会した親友による大人のヒューマンラブストーリー

「東京サラダボウル」 25年1月7日（火）22:00～、44分、全9回、NHKG
△原作：黒丸「東京サラダボウル―国際捜査事件簿―」、脚本：金沢知樹、演出：津田温子（ＮＥＰ）、川井隼人、水元泰嗣、Ｐ：中川聡子、制作統括：家冨未央（ＮＥＰ）磯智明、制作著作：NHK。△出演：奈緒、松田龍平、中村蒼、武田玲奈、中川大輔、絃瀬聡一、

△社会派エンターテインメント。国際捜査の警官とワケあり通訳のコンビが、社会からこぼれ落ちそうな人生を拾っていく！
△刑事と通訳人の目線で、異国で生きる葛藤に出会っていく物語。

Netflix シリーズ**「阿修羅のごとく」** 25 年 1 月 9 日（木）、55 分程度、全 7 回、一挙配信　　～1979 年放送のリメイク～
△原作・脚本家：向田邦子、脚色・編集・監督：是枝裕和、企画Ｐ：八木康夫、Ｐ：福間美由紀、北原英治、田口聖、企画協力：向田和子、制作プロダクション：分福。△出演：宮沢りえ、尾野真千子、蒼井優、広瀬すず、國村隼、松坂慶子、本木雅弘、松田龍平、藤原季節、内野聖陽、

「私の知らない私」 25 年 1 月 9（木）23:59～、55 分、全？回、読売テレビ・日本テレビ系
△脚本：大林利江子、演出：今和紀、本田隆一、小野田浩子、ＣＰ：山本晃久、Ｐ：中間利彦、大沼知朗（吉本興業）、島﨑敏樹（泉放送制作）、賀村華帆（泉放送制作）△出演：小野花梨、馬場ふみか、兵頭功海、渋谷凪咲、渋谷謙人、小池徹平。△目が覚めると 1 年間の記憶を失っていた主人公が“殺人疑惑”をかけられる!?

「それでも俺は、妻としたい」 25 年 1 月 11 日（土）24:00～、30 分、全 12 回、BS テレ東
△原作：足立紳、脚本・監督：足立紳、プロデュース：佐藤現、岡本宏毅、Ｐ：山本博紀、久保和明、寺田ひなた、制作協力：レオーネ、制作：テレビ大阪、東映、制作著作：「それでも俺は、妻としたい」製作委員会。△主演：風間俊介、MEGUMI
△売れない脚本家とそんな夫からの誘いを拒絶する妻の物語

「御上先生」 2025 年 1 月 19（日）21:00～、54 分、全？回、ＴＢＳ
△脚本：詩森ろば、脚本協力：畠山隼一、岡田真理、演出：宮崎陽平、嶋田広野、小牧桜、Ｐ：飯田和孝、中西真央、中澤美波、製作：ＴＢＳ、△出演：松坂桃李、吉岡里帆、迫田孝也、臼田あさ美、櫻井海音、林泰文、及川光博、常盤貴子、北村一輝、△文科省の“官僚”兼“教師”が権力に侵された日本教育をぶっ壊す!? 学園ドラマ。

放送人グランプリ2025　投票締め切りは 3月7日(金)です。

事業委員会報告

事業委員長　渡辺 紘史

～新しい体制を目指して

放送開始一〇〇年となる今年は、早々から激しい変化を予感させる年になりました。当放送人の会も変化を免れることができません。会の創業者でもある現会長、今野勉さんが辞意を表明されているからです。詳しくは総務委員長から報告があると思いますが、理事達を中心に「会長推薦委員会」が作られ、新しい会長の選出と会の新しい方向付けについて議論を始めているところです。ここでは、事業委員長として、私見でありますが、現状の課題、今後の会の方向について若干申しあげます。

～現状の課題

ご承知のように、放送人の会は、結成以来、今年で 28 年、四半世紀以上の歴史を持つ組織です。これまでの活動は、今野さんなど創業者に負うところが多く、事業の多くは、会のスタートから間もない時期に開発されたものが今に続いています。しかし、ここ数年、創業に関わった人たちの多くが退かれ、放送人グランプリ、放送番組センターとの共催事業（名作の舞台裏・人気番組メモリー）、放送人の証言、放送人句会、ラジオ聞き酒の会などを除き、これまで続いてきたいくつかの事業は開店休業状態になっていることも事実です。事業に関わるメンバーが固定化し、新しいメンバーが出てこないことが原因です。

いうまでもなく、この会の活動は、本来、やりたい人が自ら手を挙げ、仲間を集め、何かの行動を起こしていく。会の名を冠して行う活動も、会の追認（理事会報告等で）によって正式な事業として定着する、そして、その活動はあくまでも、ボランティアによる、というスタイルです。一方、会員として、年額１万円の会費の納入以外、何かをすることが義務として課せられているわけでもありません。この会は〈お店〉に例えて言えば、豪華な品揃えの商品棚から、何時でも欲しい商品が手に入り、客の注文にもすぐ応じてくれる便利な店ではなく、売り場を貸すから、自分で商品を持参して、自分の才覚で商品を売りなさい、買いたければ、他の売り場の商品と交換したらどうですか、というような、きわめて不愛想で面倒見の悪い店なのかもしれません。

しかも、放送人を取り巻く環境の変化も、新しい人の参加を拒む要因となっています。放送局の経営環境や働き方改革にみられる労働環境も変わり、現場では定年後も働くことが求められ、若い人は、社業専心、会社や職場の域外で活動することが難しくなっています。物理的にも、心理的にも、そうだろうと思います。

中国、韓国に旅行しながら、アジア放送人との交遊、情報交換に役立ってきた「日韓中テレビ制作者フォーラム」がなくなって以降だと思いますが、会員の中には、年数回の「会報」を受け取るだけ、理事会報告や各種催しの連絡も送られてくるが、何の〈お得感〉も得られず、会費１万円を払い続けるだけという方もいらっしゃるのではないか、と思います。

～このままでいいのだろうか

私は、事業委員長として 10 年間、役割を若い人に引き継ぐこともできず、停滞ともいえる状況を見続けてきてしまったことを反省しつつ、今後、新しい体制が出来上がるに合わせ、組織再生の策を講じなければならないと考えています。このままでは、時に集まり、茶飲み酒飲みを楽しむ、年寄放送人の親睦団体でい

いではないか、という声に呑まれてしまいかねません。もちろん、それで良しとする考え方もあることは承知していますが――。

～活動活性化のため、若返り、新しい事業

私は、「放送人の会」活動、より活性化のためには今更のようですが、組織の若返りと新しい事業の開発が必須だと考えています。若返りは、これまでの放送局中心の組織構成から、より制作現場に近い制作会社やプロダクション、東京中心から地方、全国にシフトしていくこと、新しい会長の下で、この方向で新しい会員募集を始めるべきでしょう。また、新規事業の開発には、事業委員会を、事業運営のための委員会から、事業企画・開発のための委員会に変える必要があると考えています。事業委員会と会員ひとり一人との情報交換を活発に行い、会員が、自分で手を挙げて企画を立案し、事業に参加できるような環境を作るつもりです。

改めて、放送人の会員が関心を寄せるべきは、いうまでもなく、放送であり番組です。現在、事務局では、深尾事務局長を中心に、番組資料の蓄積を始めています。この情報を巡って、会員と事務局との間で情報交換や対話が促進されることも、今後期待できることと考えています。

～最後に、「放送人の証言」を使った事業の報告

放送一〇〇年を迎え、放送人の証言を使って放送や事業の企画ができないかの議論は、ここ2年ほど行われてきました。既に報告されてきたように、証言のYOUTUBE上の公開や、TBS「調査情報」での連載、昨年の「名作の舞台裏」での利用などがありましたが、新たに、NHKで3月の放送記念日周辺に予定される「クローズアップ現代」の枠内特集で、仮「戦争と放送」が企画され、放送人の証言が使用されることになっています。これは、新山理事の働きかけで具体化され、深尾理事が資料等を整理し、すでにNHKに提供しています。現時点で確定までは達していないようですが、確定次第、改めて皆さんにご連絡いたします。

事業委員会としては、引き続き、「放送人の証言」という、放送人の会の優れたアーカイブを利用した事業企画を考えていくつもりです。

～☆～☆～☆～☆～

「NHKの経営計画」に対する意見提出について

放送を巡る諸問題検討会　座長　前川英樹

「NHK経営計画2024-2026年度 修正(案)」に対する意見募集につきまして、昨年の11月1日（金）に「放送人の会」の意見を以下の通りNHKに提出しました。

今回の計画は10月8日発表で、意見提出の締め切りは11月7日という限られたものでした。そこで、10月19日の理事会において、「放送人の会」として意見募集に応じるか否かの審議があり、意見提出が適当という合意がなされたものです。

検討期間が限られていたため「放送を巡る諸問題検討会」の座長が原案を用意し、同検討会委員にメールで意見を求めました。その上で検討委員及び理事監事各位に、あらためて修正意見を送付して、最終意見としたものです。会員の皆様がご意見を述べて頂く機会がないままに意見提出に至ったことは申し訳なく思いますが、以上のような経緯であることをご理解いただきたいと思います。

その上で、検討会座長として今回の意見集約について、以下のように考えたところですので付記いたします。

「NHK経営計画」についての意見の提出は今回で3回目です。前2回は、AM波とBS波の削減及び経費の圧縮という具体的な課題が焦点でしたので、理事監事を始め皆様の意見も大変具体的なご指摘ご提案でした。

今回は、インターネット業務という、現在放送局として喫緊の課題が主要テーマでしたので、どう書くべきかということはなかなか微妙なものがありました。

しかし、こういう重要であり且つ放送局の取り組みとしてはデリケートな問題について避けずに考えることは、放送人の会として必要なステップだと思いました。放送に関する多様な問題を考え、継続的に意見をまとめるべく作業することは、「放送人の会」としての力量を蓄えるために必要ではないかと考えています。

お読み頂いた上で、今後の会の在り方という観点からもご意見をお寄せいただけますと幸いです。

◇　◇　◇　◇　◇

NHK経営計画 2024-2026 年度の修正(案)について

2024年11月1日
一般社団法人 放送人の会

[初めに] 最初に疑問に思うこと

・経営計画 2024-2026 年度修正案（以下、本案と呼ぶ）の冒頭で「究極の使命は、『健全な民主主義の発達に資する』（放送法第1条）こと」と高らかに述べています。法律の趣旨に「民主主義の発達に資する」と明記する法は極めて稀です。この1条を受けて、第2条では「放送」とは「公衆によって直接受信されることを目的とする電気通信による送信」としています。

・一方、本案が前回（2021-2023 年度）までの経営計画及びその修正案と明確に異なる新たな提言は、「デジタル」への強い関与です。ここで言う「デジタル」とは総体としてのデジタルネットワーク環境を指すものと推測されます。

・その上で、「NHKの放送番組をテレビ等の放送の受信設備を設置しない者に対しても継続的かつ安定的に提供するため、インターネットを通じて放送番組等の配信を行う業務をNHKの必須業務とするとともに、民間放送事業者が行う放送の難視聴解消措置に対するNHKの協力業務を強化する」と提言する。

疑問は二つ。第一に、放送とインターネット（「デジタル」）とはどのような関係なのでしょうか？　第二に、「民間放送事業者が行う放送の難視聴解消措置に対するNHKの協力義務を強化する」ことと、インターネットを通じてNHKが行う必須業務とは如何なる関係にあるのでしょうか？

（I）放送とデジタル＝インターネットの関係について。

・本案では公共放送の役割の基軸として、「情報空間の参照点」を提供することで正確で「信頼できる社会の基本的な情報を提供する」ことと、「信頼できる多元性確保」のため「情報空間において伝統メディアが競い合い、それぞれの信頼性を高めることに寄与したい」と述べています。しかし、これは「伝統メディア」である放送の補完的機能ではないでしょうか。

・私たちは、放送がネット社会に如何に関わる

かは極めて重要な課題であることを承知しています。であるがゆえに、まず放送本来の存在理由を明確に語ることが大事なのです。

（Ⅱ）「信頼できる多元性確保」について。

・本案では「公共放送（メディア）をとりまく環境が大きく変化しています。自然災害の激甚化が進むなか、視聴者・国民のみなさまの命と暮らしを守る緊急報道の重要性はこれまで以上に増しています」と述べています。

・であればこそ、AM放送サービスはその基本中の基本業務であるはずです。また、BS編成がニュースとスポーツという放送の最も基本的なサービスから逸脱してはならないとも考えます。

・これまで私たちは「経営計画2021-2023」及びその修正案について再三指摘してきたように、AM波の削減とBS編成の2波化には重ねて強く反対します。一〇〇年間、積み重ねられた現場の創意工夫の中に、公共放送としてのラジオ・テレビ波の新たな事業の可能性があるはずです。

（Ⅲ）特に「二元体制」について。

・「NHK以外の放送局（民間放送）が存在すること」により、放送が「嘗ての<大本営発表型>の『権力の広報機関』に陥ることを回避する」という命題（まさに民主主義の発達に資する）に応えようとする、その根本に立ち返って語るべき問題です。

・「民間放送事業者が行う放送の難視聴解消措置に対するNHKの協力」というテクニカルな問題ではないはずです。「二元体制」は放送の多様性多源性という放送法の趣旨に沿った制度であることを再考すべきです。

（Ⅳ）放送技術の発展系としての8Kについて。

・「デジタル」への関与を強く意識するが、本案には8K技術の現状も展望も述べられていません。放送技術を超える可能性が見えつつある8K技術の意味を考えることは、放送本来の在り方を問い直すための重要な意味を持つものと考えられます。

・8K技術による放送は、極めて大きな影響力をもつであろうと想定されます。8Kは家庭聴に馴染まないと言われますが、例えば医療、防災等への応用だけではなく、パブリックビューイングの効果も期待されています。大衆を対象にした8Kによる映像・音響（の同時同報）伝送のインパクトは極めて大きいものと推測されます。

・しかしながら、メディア技術は常に政治的あるいは軍事的効果に近接した存在です。であるが故にNHKの公平性中立性、即ち「言論機関として権力から自由であること」が根源的に問われます。

（Ⅴ）以下は、私たちの最も具体的な提言と考え方の基本です。

①「コンテンツの総量削減と設備投資の大幅削減等による収支改善（△1,000億円の削減の実施）」と「メディアの整理・削減（衛星1波・音声1波を削減）」に強く反対します。この削減は、一時的な帳簿上の収支改善効果を生じても、放送の衰退につながる道です。

②放送は人が作ります。それは「適切な〝資源管理〟」という発想の外にあるのです。人間の想像力や感情や知性から生まれるものです。「人」と「放送」が見えない経営計画に意味はありません。

～～☆～～☆～～☆～～☆～～

訃報

上村　忠（うえむら・ただし）

昭和11年生まれ。昨年の秋に逝去、88歳。東京放送では調査局、開発室、社長室など。退社後、産業能率大学経営情報学部教授。専門はマーケティング、世活文化論、生活者論。著書に『不易と流行』のマーケティング」、「マーケティングの発想を変える心理市場論」など多数。当会には11年4月75歳の時に入会。

北川　信（きたがわ・まこと）

24年11月1日逝去、94歳。

53年に日本テレビに入社。芸能局でディレクターを務め、編成局長などを歴任し、93年に専務。94年テレビ新潟社長、03年にテレビ新潟会長。民放連地上デジタル放送特別委員会の委員長などを務め、地上デジタル放送導入をリードした。

☆　☆　☆

追悼 上村 忠さん

前川 英樹

博覧強記の人であった。

理路整然、起承転結が明確な人であった。

新奇を好む人であった。

何事も調べ尽くす人であった。

若いころから、その才気は社内で知れ亘っていた。

しかし、何処か少年のような好奇な魂を漂わせている人であった。

今や数少なくなった放送界の社内誌「TBS調査情報」を、優れた放送批評家たちとともに文化誌として育て上げた功績を忘れてはならない。

その人脈と精神は「放送人の会」の地下水脈として今も流れ続けている。

☆　☆　☆

地デジの頃のことなど
北川信さん 追悼追憶感謝

前川 英樹

北川信さんが亡くなられた。

北川さんはこの世界の大先輩だが、局も年代も違う。ご縁が出来たのは、テレビのデジタル化を迎える時代に、民放連の放送計画委員会の席だった。その委員会は、放送制度や放送の将来展望に関わる課題に向き合う場であって、地方局の社長と在京局の担当役員で構成されている。その頃私はTBSのメディア担当局長だったが、役員の代理で時々出席していた。

地上波のデジタル化の検討が喫緊（この言葉は官庁用語として使われていることをこの会議で知った）の課題になりつつあるとき、放送計画委員会から独立して出来たのが「地上デジタル放送特別委員会」（デジ特）であり、その委員長として当時テレビ新潟社長だった北川さんが就任した。

その「デジ特」にある下部組織の「地上デジタルテレビ放送専門部会」（テレ専）が集中的にデジタル化の課題と対応を検討することになっていた。その以前から、私は日テレの担当役員・専務）だった北川さんに何度かお目にかかって意見交換をする機会があった。その後いかなる事情かは知る由もないが、北川さんはテレビ新潟社長になられ、デジ特委員長を引き受けられることになった。この辺りは、当時の民放連会長だった氏家氏の意向があったのではないだろうか。多分氏家会長は、地デジが如何なる問題かの詳細より、民放連にとって極めて重要なテーマであることを直感的に

察知していたのではないかと思う。総務省・当時の郵政省やＮＨＫとの関係で、民放連として「相手にとって不足はない」と推測したのではないかと思うのだが、果たしてどうか。

その後の紆余曲折を経て、総務省は民放、ＮＨＫのみならず通信事業者やメーカーなど幅広い関係者を集めて「全国地上デジタル推進協議会」（全国協）を立ち上げ、その下に技術的検討結果などを踏まえて全体的なデジタル化案を集約する場として「総合推進部会」が設けられた。私はその部会長を務めることになったのだった。つまり、全国協と民放連と二重の関係で私は北川さんの仕事をサポートすることになったのだった。

その議論の大きな節目は、地上波のデジタル化のためにはデジタル用の周波数の確保が必要で（そのくらいは私にも解るのだが）、そのためには現行放送用に割り当てられているアナログチャンネルの移行（チャンネル変更通称アナアナ変換）が必要になるということになった。技術に疎い私などは「えっ、そうなの？」というしかないのだが、技術検討チームが試算したところ、アナ変には一千万世帯のチャンネル変更が必要になると試算された。これを聞いて、氏家会長は「検討に値せず」と明言したのだ。チャンネル変更は免許問題であり、デジタル化を至上命題としていた総務省にとっても政策課題として最重要テーマだった。民放連会長が「検討に値せず」と言ってしまったので、ＮＨＫも含め放送事業者も、言われてしまった総務省も作業は頓挫し、凍結状態に入ったのだった。

その状況下で、部会長だった私はちょっと強引ではあったがテレ専として「地上放送のデジタル化は不可避である」という提言を取りまとめてデジ特に上げた。それは、なんであれ総務省は国の方針は変えることはなく、力技を使ってでも放送事業者にデジタル化を迫るだろうし、そうなってから止むなく踏み切らされるよりは技術のトレンドを自ら選択するしかない、と思ったからだった。

テレ専取りまとめを受け取った北川デジ特委員長は、「ヨシ分かった」といって、即座に民放連氏家会長に面会、その場でこれを「デジ特見解」として公表する了解を取ったのだった。こうして民放事業者は地デジというルビコンを渡ったのだった。

そのことも含め、北川さんは優れたリーダーだった。地デジは私の仕事だったという自負はあるが、北川さんという人がいなかったならば結局のところあれほど上手くいかなかったと思う。「俺が日テレで君はＴＢＳだけど、同じ会社の中だってこんなに上手くいくことは滅多にないよ」と北川さんは言っていた。

「君みたいなのは日テレにはいないよ」と言って頂いたことがあるが、「君みたい」とはどういう意味かよく分からない。私に言わせれば、「日テレという会社はなかなかに会社らしい会社」だと思っていたのだった。

「不可避宣言」をデジ特見解として公開した直後のことである。総務省の担当責任課長のＳ氏が民放連を尋ねてきたのだった。北川委員長に面会したいという。民放連幹部と一緒に私も同席することになった、繰り返すが、デジタル化は総務省の最重要政策課題だった。課長は「これ（不可避宣言の公表で）で総務省は助かりました」と言ったのだった。それを伝えに課長は来たのだ。

その頃のことである。日時は記憶していない。ＮＨＫの技術担当の然るべき人と法制度に詳しい幹部から面談の要望があった。この時も北川さんと二人で対応した。話を聞いて驚いた。「ご承知の通り、ＮＨＫには先導的役割があります。しかし、地デジだけはＮＨＫが先導することはできません。受信料との関係で無理なのです。地デジだけは民放さんが先行してください」。二人が帰ってから北川さんと顔を見合わせた。「本気かね。今の話は？」その後、地デジは各地域において概ねＮＨＫと民放は可能な限りスケジュール調整が行われた。

その頃、民放連には「会長副会長会議」という仕組みがあった。民放連のオーソライズされた組織ではなかった。多分、会長の意志意向を全体に周知するための場だったのだと思う。ある時、アレ（会長副会長会議）って何なんだ、という話題になった。「あれはですね〝畏きあたりに擱かせられましては〟てなものじゃないですかねと言ったら、陸軍幼年学校卒の北川さんは「そりゃ凄い、そう聞くと〝はははッ！〟てなもんだな」と大笑した。

民放連の会議メンバーは任期で交代する。地デジ関連ももちろんそうだ。地域と系列バランスを考慮して人選するのはなかなか難しい。特別の事情がない限り前任の割り当てのまま選ばれる。ある時、テレ専のメンバー改選の時に北川さんはテレ専委員にテレビ新潟を入れてくれ、という。そうすると、どこか（地域）の誰か（系列）を交代してもらうことになる。民放連事務局と協議して何とかやりくりし人選を終えた。北川さんに報告すると、「分かった、彼（新メンバー）には、何でもいいから前川部会長を助けろって言ってあるよ」ということだった。北川さんは、私の作業が上手くいくように気遣ってくれたのだった。

事程左様に北川さんとの仕事は手応えもあったが、遣り甲斐もあった。銀座のテレビ新潟の支社には何度も通った。新潟の本社にもお邪魔したことがある。三月になっていたと思うが、まだ雪が大分残っているころだった。地デジの方向が見える頃には民放連会長も交替し、北川さんの仕事は一区切りしてデジ特も全国協も委員長は交代になった。私はしばらくその後も地デジとの付き合いは続くのだが、北川さんと議論したりする機会はなくなった。

思えば、判断力と責任と説得力を備えた優れたリーダーだった。この世界で色んな人に出会ったけれど、北川さんはその中でも最も信頼すべき人であった。

もう一度ゆっくり、地デジのことなど離れて色々話をしたかったとしみじみ思っている。

様々な思いを込めてご冥福をお祈りします。

☆　☆　☆

第98回放送人句会

令和六年十月八日（火）　於　赤坂・麦屋

出席　中村フミ　佐々木光野　深尾一化
　　近藤久仁　松田幸雄

兼題　林檎　秋深し　渡り鳥
　　（業界用語）巻き戻し

青き空林檎をあてに午後の酒　フミ
だらら坂余命見えたり秋深し　久仁
朝顔の蔓巻戻し種弾け　光野
秋深し寄り添ふ猫の重みかな　フミ
くるくると赤の螺旋に林檎むく　幸雄
巻き戻し無理効かぬ身よ秋深し　久仁
秋闌くるざわめき増せる日々なれど　一化
分断の国境越ゆる渡り鳥　フミ
黄粱の夢巻き戻し秋の暮　幸雄
波止場通り競り場の午後は秋さびて　久仁
鈍行の窓辺の林檎海流る　久仁
渡り鳥宙一筋の棹と観ゆ　光野
我知らずリンゴに想ひ寄せし時代　一化
鴻も燕の我も渡り鳥　幸雄
鳥渡るどこまでも真直ぐな道　光野
早戻しは巻き戻しかと古酒を汲む　光野

秋深し健診車来る古都の寺　光野
川奈岬渡り鳥去り鳶一羽　久仁
ふり向けば白き花脈リンゴ園　幸雄
秋深し生きてゆかねばならぬ日々　フミ

第99回放送人句会

令和六年十二月十日（火）　於　赤坂・麦屋
出席　中村フミ　佐々木光野　深尾一化
近藤久仁　松田幸雄　岡田由美子
兼題　焼き芋　手袋　冬凪
（業界用語）立ち稽古

台本捨てて濡れ場へ寒き立稽古　一化
立ちげいこ時代遅れと鵙鳴けり　由美子
立ち稽古素足の新人息白し　久仁
編みかけの手袋柩にそっと入れ　フミ
焼薯るむ新聞紙にプーチン　光野
手袋や右手ばかりを失くしたり　光野
焼き芋や浮気の果てに戻るとこ　一化
新春シャンソンショウ明日立ち稽古　光野
冬凪のはるか彼方は荒れる国　一化
立ち稽古終へ風花の立ち飲み屋　フミ
冬凪や日向に寝そべる猫二匹　久仁
園児らのはじける声や芋焼ける　由美子
赤き頬手袋に埋め笑む娘かな　一化
十二月代役多し立稽古　幸雄
片方の手袋猫の腹の下　フミ
立ち稽古手早く終える聖夜かな　幸雄
改札に小さき手袋置かれけり　幸雄
冷えてなほ石焼芋の甘かりき　幸雄
売り声も味わひ深き焼芋屋　幸雄
焼薯屋思はぬ若きイケメン来　光野
立ち稽古Ｇリハの窓冬の雨　久仁
ふてほどの立ち稽古おへ年忘　光野
手袋や今年は誰にプレゼント　由美子

次回・第百回
２０２５年２月11日（火）赤坂・麦屋
兼題　二月　交魚　猫柳
（業界用語）　本番

編集後記▼お忙しいところ、会員短信をお寄せ頂きありがとうございました。ひょっとして、万が一「私の原稿が無い！　載っていない！」という方がおられましたら、菅野あてご一報ください。▼というのも、五日の水曜日の夜、パソコンの原稿ファイルの端っこで開けてない原稿があったのです。「原稿拝受」のメールを送って保存し、そのまま忘れたのだ。▼お粗末の一言です。下馬評座談会の会場借用で、入力ミスがあったばかりなのに困ったものだ。我ながら、開いた口がふさがらない。ドラマの現場では、間違いだらけの菅野さんを誰かがカバーしてくれてたのだ。▼開いた口でいえば、騒がしい二〇二五年の始まりになった、我が侭し放題のトランプ大統領に開いた口がふさがらない。メキシコ湾をアメリカ湾にしちゃうし、廃墟のガザにトランプタワーでも建てるのか。ガザに報復したイスラエルを非難した国が、パレスチナ人を引き取ればいい。第２次大戦で迫害を受けた国の理屈だから恐ろしい。▼開いた口で言えば、フジ劇場も、その一つ。いい大人が判断停止になるのは、36年間、「居座っている「フジの天皇」がいるからか。87歳、おぞましい。▼かつてフジのドラマは羨ましいほどに眩しくのびやかだった。トレンディーのはるか前、山内久さんの若者たちに、僕らと先輩は嫉妬した。▼放送百年、スマホが全てを変えて、人はみな忙しく瞬間芸の世界にいる。放送メディアが信頼を失っているだけに、人々を幸せにしたいと健気に番組を作っている人と作品をちゃんと見つけて喝采を贈りたい。　（たかゆき）

会員名簿

2025.02.07 現在

【あ】相田洋　青木裕子　青山悌三　秋田和典　雨宮望　【い】石井彰　石井ふく子　石田研一　石橋映里　石橋冠　石原信和　板谷駿一　市岡康子　市川哲夫　市村元　伊藤博文　井上佳子　今井義典　芋原一善　岩澤敏　岩瀬弥永子　【う】浮田周男　内山聖子　【え】江川雄一　遠藤利男　【お】大池雅光　大浦勝　大川光行　大沢悠里　太田昌宏　大類なぎさ　緒方陽一　岡田裕克　岡室美奈子　岡本勉　小川治　小川和之　織田晃之祐　【か】加賀美幸子　柏木登　片岡敬司　加藤滋紀　加藤義人　金平茂紀　川平朝清　鎌内啓子　亀谷弘美　川喜田尚　河邑厚徳　【き】北出晃　北村美憲　北村充史　木下浩一　木原毅　木村成忠　【く】工藤英博　隈部紀生　訓覇圭　黒崎博　黒沢淳　【こ】小池勝次郎　河野尚行　小玉滋彦　後藤和晃　小山帥人　近藤邦勝　今野勉　【さ】斎藤秀夫　斎明寺以玖子　寒河江正　桜井元　佐々木彰　佐々木光政　佐藤敦　佐藤幹夫　佐藤理恵子　佐野有利　【し】塩田純　重延浩　重村一　重盛政史　静永純一　清水誠　下崎寛　下重暁子　下村幸子　白井博　新山賢治　【す】菅野高至　菅野嘉則　杉田成道　鈴木俊樹　鈴木典之　鈴木芳夫　鈴木嘉一　須磨章　【せ】清野豊　関佳史　せんぼんよしこ　【そ】曽根英二　【た】高田宏　田澤正稔　多田健　田中秋夫　田中直人　田中典子　田中則広　【ち】千葉邦彦　【つ】塚原あゆ子　塚本幹夫　次屋尚　辻本昌平　土屋敏男　つボイノリオ　露木茂　【と】東城祐司　戸田桂太　富澤一誠　鳥谷規　【な】長井展光　中込卓也　中崎清栄　中島僚　中島由貴　永田浩三　永田俊和　中村敦夫　中村克史　中村季恵　中村芙美子　中山和記　【に】西村与志木　仁藤雅夫　二宮文彦　【ぬ】沼田通嗣　【の】信井文夫　延江浩　【は】萩原豊　林健嗣　林安二　林隆太郎　原真　原田令嗣　【ひ】日笠昭彦　玄武岩　【ふ】深尾隆一　藤井正博　藤久ミネ　藤村忠寿　古川重樹　【へ】逸見京子　【ま】前川英樹　牧之瀬恵子　増山麗央　松田幸雄　丸山友美　黛りんたろう　【み】光原朋秀　三原治　三村千鶴　宮川鑛一　宮崎洋　【む】村上光一　村上雅通　村上佑二　村田亨　【も】本木敦子　元田成　諸橋毅一　【や】八木康夫　矢島良彰　薮内広之　山鹿達也　山崎隆保　山崎裕　山路家子　山田尚　山登義明　山根基世　【よ】吉澤保　吉田賢策　吉村直樹　【わ】若泉久朗　和崎信哉　渡邉浩平　渡辺紘史

（会員185名）

【賛助会員】　日本民間放送連盟　TBSメディア総合研究所　融合研究所　日本ケーブルテレビ連盟　放送人の会HP